

---

# 戦国トランスジェンダー

藤森応輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦国トランスジェンダー

### 【Nコード】

N7265S

### 【作者名】

藤森応輝

### 【あらすじ】

断じて嫁に逃げられたのではない！

俺の名は上泉六三郎。

剣の腕を頼みに仕官先を求める旅をしていた。

その旅の途中であった不思議な美女、七重を娶り、甘い新婚の毎日を送っていたが、ある朝目覚めると俺は女になっていた！ しかも愛する妻の姿も消えていたのだ！

周囲の者達から、嫁に逃げられて可哀想にという視線を浴びつつ、俺の旅は嫁の行方を捜す旅に変わり、旅の途中でたまたま助けた抜

け忍の伍助に夜毎体を狙われながらも共に全国を巡る事に。

ナエマパートは、挿絵作家の方が文章を書いています。

「なにやってんだ！　ゴオラ！」

俺はそう叫ぶと、伍助の股間を蹴り上げた。そして股間を押させて悶絶する伍助にさらに怒鳴った。

「人の寝込みを襲うなど何度言えば分かる！」

伍助は旅の途中に刺客に襲われて危ないところを俺が助けてやった抜忍だ。

伍助が言うには、上忍の奥さんに手を出したのがばれて忍者の里を追われた、というより逃げ出して、しかもその上忍から追っ手を差し向けられていると言う事だった。

そして伍助は、助けて貰った御恩返しにと言って、俺に付いて来て寝床の用意や食事の用意をしてくれているのだが、ちよくちよく俺の寝込みを襲いやがるのだ。

随分口の悪い女だな。と思われるかも知れないが俺はれっきとした男として生まれた。

じゃあ、伍助は男も女もOKな両刀なのか？　と言うとそう言う訳でもなく真性の女好きである。

言っている意味が分からねえ、と思うかも知れないが、俺だってこの状況は訳が分からねえ。

ある朝起きると、なんと体が女になっていて、しかも妻の姿も消えていたのだ。

あまりの出来事に数日呆然となっていた俺だったが、我に返ると

自分に降りかかった問題と向き合う事にした。

このまま女の体のままで暮らすのも真っ平だし、居なくなった妻も捜さなくてはならない。

俺は消えた妻を捜せば、俺が女になった理由も分かるかと思ひ、妻を捜す旅に出た。

勿論、メインは愛する妻を捜す方である。

とはいえ、せっかく妻を探し当てても、自分が女のままでは何かと残念な事になるので、女に戻る方法も重要だ。

そしてその旅の道中、武蔵国で、伍助が追っ手にやられて命を落とす寸前の所を助けてやったのだ。

とは言っても伍助は3人の追っ手に襲われ、1対3で負けかけていたところに、俺が偶然通りかかり、俺の出現に3人の追っ手の注意が伍助から俺に移り、その一瞬の隙を突いて伍助がその内の1人を切り殺し、残りの2人より伍助の方が強かったと言うだけなのだが。

にも関わらず伍助は俺の事を命の恩人だと言って、ついて来るのだ。

そして俺は、自分で言うのもなんだが故郷では、美貌と猛将ぶりでも有名な陶晴賢の再来と呼ばれるほど美形であり剣の腕も立つ。

つまり俺は女になっても美人であり、上忍の奥さんに手を出すほどの女好きの伍助がちよくちよく俺の寝込みを襲い、そのたびに俺に股間を蹴り上げられて悶絶しているのである。

まったく懲りないもので、俺に付いてきているのも本当は恩を返す為ではなく、俺の体目当てなのではないかと思えてくる。

勿論俺は伍助に、俺は本当は男であり今女の体なのは物の怪か何かの所為なのだ、と説明したのだが、伍助は「そんな細かい事にしやせん！」と言い放った。

これにはさすがに俺も脱力し、それ以上口論する事を諦め、ちよくちよく俺の寝込みを襲う伍助を撃退する日々となったのだ。

> i22495 — 2976 <

俺が妻と出会ったのは、仕官先を求めての旅の途中だった。

故郷の道場では俺に剣の腕で敵う者はおらず、仕官先などいくらでもあると高をくくっていた俺は、大きな城下町に辿り着くと、その城下町にある道場へと出向いた。

調べたところによると、この道場の道場主は、この国の大名家に剣術指南役として禄を貰っているらしい。

ここで俺の剣の腕を見せれば、大名家の方から俺に仕官してくれと言ってくる考えたのだ。

自惚れでは無い。それだけの力は俺にはある。そう思っていた。

故郷の道場の師匠は過去に戦に出て380人も敵兵を討ち取ったと言われている。その師匠が俺に言ったのである。

「お前の剣の腕はすでにわしを遥かに超えておる。戦場でもお前ほどの者を見たことが無い」

こつ言われて自分の腕に自信を持たない者がいるか？

だが城下町の道場で「一手ご指導願いたい」と型どおりの台詞で、その道場の師範と試合った俺は、その師範の剣術に戸惑った。

なんとその師範は刀を振り回してきたのだ。

(刀って突くんじゃないんですか?)  
そう考えていた俺はその師範の剣術に翻弄され、胴を打ち果たされた。

勿論俺は(胴を刀で打つても鎧を切れるわけ無いだろ。ノーカウント、ノーカウント)と思って、試合を続けようとすると、なんと俺と師範の傍に立っていた男が、

「一本！」

と叫び、そこで試合が終わってしまったのだ。

そして「いやいや、おかしいだろ！」と叫ぶ俺の抗議は無視され、道場から放り出されてしまったのだ。

俺の剣の流派は突きを得意とし、合戦では無類の強さを発揮した。戦場で鎧を身に付けている敵に、刀で頭を殴ろうが胴を叩こうが文字通り刃が立たないのだ。

鎧ごと相手を切る大型の刀も有るにはあるが、基本刀で鎧武者を倒すには突きである。

だが最近徳川家により豊臣家が滅ぼされ戦はめっきりなくなってしまった。

鎧武者などと戦う事もなくなってしまう、現在の剣術の主流はあの師範がやっていた様な刀を振り回す剣術らしい。

こうして俺のその城下町で仕官先を求めるといふ思惑は外れてしまい、どこかに俺の剣を理解して召抱えてくれる大名が居るはずと仕官先を求めての旅に出たのだった。

そして妻の七重とはその旅の途中で出会ったのだ。

妻は、と言つてもその当時は妻ではないが便宜上妻と呼んでおく。俺が仕官する国を求めて山道を歩いていると、妻は罪人が入れられる様な竹で編んだカゴに入れられ、カゴから伸びる綱を括りつけた長い棒を担ぐ数人の男に運ばれているところだった。

とは言つても罪人ではなく、どうやら売られていくらしい。

興味を覚えて顔を覗いてみると、なんとすごい美人ではないか。

髪の色は茶色がかっていて、肌の色はやや浅黒かったが細面のか  
なりの美人である。

売られると言つならどこかの遊郭に売られるのだらう。

俺はそれならばと、一番初めの客になるべくその後を追う事にした。

だが後を追ううちに妻を入れたカゴを担いでいる男達の会話が聞こえてきた。

「せっかくだから俺達で頂いちゃいましょうよ」

「馬鹿やろう。我慢しねえか。俺達がやっちゃまっちゃ値が下がるだ  
らうが」

「しかし、これだけの美人めつたにいやせんぜ」

ここまで俺も「さもありません」と頷いていたが  
次の言葉が引つかかった。

「せっかくひつさらった女なんだ。この女を遊郭に売った金で、他  
の女を買えば良いじゃねえか」

ひつさらっただ？ 貧しい農家なんかから売られてきたんじや  
ないのか？



娘を売るにも色々事情はある。下手に助けたりすれば逆に迷惑にもなりかねないと思っていたが、さらわれたと言うなら話は別だ。さらわれたところを助けたとなれば、彼女も俺に感謝して仲良くなれるかも知れない。

男達は5人。みな刀を腰にぶら下げ、確かに改めてみれば楼閣の人買いというより、野盗と言った方が近いかもしれない。その2人ずつが順番に疲れたら交代しながら妻を担いでいる。

俺は妻を助けるべくチャンスを待った。

勿論、野盗の5人くらい俺の腕なら倒すのは訳はないが、兵法とは勝ち易きに勝つものだ。もっと勝ちやすいタイミングがあるかも知れないなら、そのチャンスを待つべきである。

そして夜、そのチャンスが到来した。と言うよりはじめからこの時を狙っていた。

男達は1人を見張りに残し順番で眠りに落ちた。妻もカゴの中で寝ている様だ。

男は焚き火にあたりながら、暇をもてあましているのか、時おり木の棒でその焚き火を突いている。

できれば奇襲で見張りの奴を始めに斬って捨てたい所だが、野盗なだけあって戦闘に慣れているのか、敵襲に気付きやすい様に見晴らしのいい所で野宿をしている。と言う訳で、奇襲で見張りを倒すのは諦めた。

俺は地面を這って近づき、これ以上は地面を這っていても見つかるだろうという所まで来ると、いきなり立ち上がり見張りの男の元へと走った！

男は俺の姿を見つけると、瞬時に傍に置いてあつた刀を持って立ち上がり刀を抜いて構える。だが俺はその時には男達の近くにまで駆け抜けていた。

「おい。おめえら起きろ！」

間近に迫つた俺に男がそう叫んだが、俺はその叫びが終るか終わらないかの内に……寝ている男達を刀で、グサグサと刺して回つた。

寝ていた男達は「ぐえ〜」やら「ぎゃ〜」やらと断末魔を上げて死んでいく。どうして自分が死んだのかも分かっていないだろう。

見張りの男は「え〜〜」という目で俺を見ているが、だつてお前が万一すぐ腕で倒すのに手間取つたら、こいつらも起きてきて5対1になつちゃうじゃん。

だがこの見張りの男がすぐ腕かもという心配は杞憂だつたらしく、この、突然現れた男が寝ている仲間を殺して回るといふ状況に恐怖を覚えて、逃げ去つていつてしまった。

まあ俺もこの男がすぐ腕なんて事は無いだろうとは思っていたが、作戦とは最悪の状況を想定するものである。

野盗が死んだり逃げたりして居なくなると、髪を撫でつけ妻が入っているカゴを開けて、妻に話しかけた。

「お嬢さん。悪夢は終わりました。白馬のお殿様が助けに参りました」

俺のこの決め台詞に目を覚ました妻は、辺りを見回し、口を開いた。

「まだ暗いじゃない。もう少し寝かせてよ」  
そしてまた眠りについてしまったのだ。

「いやいや、そんなに上の方じゃなくて、もっと下の方を見て」

俺の言葉に妻は再度目を覚ますと、今度は地面に転がる野盗達の死体を発見した。

「あら？ どうしたの？ 今度はあなたが私をさらうの？」

うーん。どうも反応がおかしいな。野盗の死体を見つけたなら「きゃー！」と叫ぶなり、自分が助かったのだと俺に礼を言うなりしそんなものだが。

まあいい。状況を説明しよう。

「さらうなんてとんでもない。そなたを野盗から助けたのさ！」

俺はそう言って、野盗の死体に囲まれながらさわやかに笑って白い歯を見せた。

「そうなの？ 面白そうだから言うとおりにしてただけで、別にいつでも逃げれたのに」

え？ マジ？ せっかく助けたのに余計なお世話だった？

だが俺が残念そうにしているのに気付いたのか妻はにつこりと笑った。

「でも、助けてくれたんなら礼を言っわ。ありがとうね」

お？ 結構ポイント高かったか？ 行けそうか？

俺がそう思って妻に笑い返していると、彼女がおもむろに俺の背後を指差した。

ツガキン！ と俺の背中がなった。

「あ。後ろ」と彼女が呟く。

いやいや。遅いから。もう斬られてるから。

俺はすくつと立ち上がると、振り向いて俺を切った相手と向き合った。さつき逃げた見張りの男が戻って来て俺を背後から袈裟切りにしたのだ。

斬られたにも関わらず平然と立ち上がる俺に、男は「え〜。うそ〜ん」と声を上げると、啞然とした表情で俺を見ているが、別に俺は矢や刀の刃が立たない魔物と言う訳ではない。

俺は常に着込み（鎖帷子）を着ているのだ。着込みを着ていればよほどの豪腕の持ち主が相手ではない限り斬られる事はない。もっとも着込みでも突きには弱い。

鉄で出来ていてかなり重く、常に身に付けているのはかなり大変だが、俺の剣術が否定されてから剣を振り回す奴らにだけはやられまいと、身に付けているのだ。

俺は見張りの男を必殺の突きで串刺しにすると、再度妻と向き合った。

妻は拍手をする様にパチパチと手をあわせ俺にっこりと微笑んだ。

「見事な腕前ね。あなた名前は？」

「上泉六三郎だ」

「ずいぶんと長い名前ねえ」

妻は呆れたように俺の顔をまじまじと見た。

「なんて呼べばいいのかしら？かみいずみ？」

「上泉は苗字だ。六三郎と呼んでくれ。君の名は？」

「ナエマ」

「なえ？」

「なんでもいいわ。苗でも七重でも」

「七重か？」

「助けてくれてありがとう」

七重はもう一度花のようににっこりと笑ってみせた。

野盗からいつでも逃げ出せると言っていた妻も、俺の事を、命がけで自分を助けようとしてくれた頼もしい男性、と思っただけで、すぐに仲良くなる事ができた。勿論、色んな意味でだ。って言うか、妻だし。

こうして妻と2人で仕官先を探す旅を続けていたのだが、なかなか上手く行かない。

俺が仕官を求めて、何とかその国の大名の役人に渡りを付けて話が進むと、最終的にはやはりどこも「では、そちの腕を見せてもらおうか」という話になる。

そしてその大名に仕える腕自慢の武士と試合うのだが、ついでに染み込んだ動きをしてしまう。

その染み込んだ動きとは、胴や頭を切り払われそうになっても鎧があるからノーカウントと、打たれるのに任せて突きに行ってしまうのだ。

だがやはりこの動きは理解されず、「戦場だったら俺の勝ちですよ！」という俺の叫びも虚しく仕官の話は流れてしまうのだ。

ちなみに俺は、決闘する時は頭には鉄板を仕込んだ鉢巻を付け、腕にも籠手代わりに鎖を巻きつけ、そして当然着込みを身に付ける。

もっとも仕官の話がまったく無かったわけではない。

男も女もOKという両刀の大名は大勢居る。織田信長や武田信玄は有名だし、特に珍しい趣味と言う訳ではない。

そして美形の俺をそれ目的で仕官させようと言ってくる大名も居たのだ。だが俺にはその趣味はない。さすがに断った。

こうして仕官先を求めての旅を続ける俺と妻だったが、ある日突然妻の姿が消え、そして俺は女になっていたのだ。

女になっては仕官先を求めるも何も無く、こうして俺の旅の目的は仕官先を探すという事から、妻を捜す事へと変わったのだ。

## 1：六三郎（後書き）

鎧武者を突き以外で刀で倒すのは困難ですが、まあ実際は合戦の武器としては刀より槍が主流なので、作中に出てくる合戦を刀で戦うのが当たり前の様な話はフィクションという事で。

後、突きが強い流派で実践に強いけど道場では弱いという話は、新撰組の近藤や土方、沖田の流派である天然理心流が突きが強くて実践には強いが、道場で戦うと弱かったという話が元になっています。

もっともこの場合の突きが実践的だったのは、相手が鎧武者だからではなく、室内で戦う場合に刀を振り回すと家の鴨居に刀が引っかかりたり、狭い路地での乱戦で刀を振り回せなかったりして、突きの方が有効だったからです。

## 2：ナエマ（前書き）

ちなみに「ナエマ」パートは挿絵作家の人が、文章を書いています。



## 2：ナエマ

「ふう〜。いいわねえ、温泉は。疲れがとれるわ〜」

下野に来て今日で5日目だけど、毎日入っても飽きないわね。温泉は。

実際に来てみて、ジパングっているいろアンビリーバブルな国だ  
と思うけど。

水どころかお湯が湧き出る泉があるというのがまた驚きだわ。

「疲れって……。姫様いったいどんな疲れることをされたんですか  
？」

少し離れたところで温泉に浸かってくつろいでいる侍女のアニスの  
冷ややかな視線がささった。

「き、気疲れよ。ほら、私ってデリケートだから〜」

「どの口が言いますか？ 少しは反省しなさい」

「反省なんてしないわよっ！〜！」

私はぷつと頬をふくらませてアニスから目を背けた。

反省しなければならぬのはあいつの方なのよ！

湯気の立ち上る中、枯葉がはらりと落ちて水面を滑りながらくる  
くると回った。

迷ってる……。まるで、私の心の中みたい。

ほんの一週間ばかり前、私は自分の夫に呪いをかけて家出した。私の魔術の中でも最高級にレベルが高くて難しい呪い……。そう、性転換の呪いを。

私は遙か遠い西の国からはるばるジパングにやって来たの。

アラビアにあるアムランという小国だけど、曲がりなりにスルタンも王の娘ですからね。

一国の姫としての教育も受けて、このジパングについても家庭教師に教わったのよ。

ジパングは明瞭な四季があつて、豊富な水と美しい緑や花の生い茂る豊かな国と聞いてずっと憧れてきたわ。

屋根は黄金でできていて、人々はキモノと呼ばれる美しい衣装を身につけていると。

豊富な水と自然については教わったとおりだったけど、黄金の屋根なんてどこにもないわねえ。

まあ、別の場所に行けばあるのかも知れないけど。

それはいいとして、私は観光でジパングに来たわけじゃないの！ジパングに私の運命があると信じて、人生を賭けて家出てきたのよ。

ある日私の父である王スルタンアラム＝アル＝ラシッドはこう言ったの。「明日、シャブワのシャルルカン王子が来られる。お前たちふたりのどちらかを後に迎えたいとのことだ」

ふたりというのは私ナエマと双子の姉のマハネのことよ。

双子なだけあって見た目は気持ち悪いぐらいにそっくりなだけで、性格は正反対と言ってもいいくらい。

マハネは大人しくて従順で、自分の考えを口に出せない引っ込み思案な性格なの。

「つまりお見合いってわけね。親の決めた相手と結婚なんて気が進まないわ」

「でも……自分で結婚相手を探すわけにはいかないでしょ？」  
マハネは困ったようにうつむいて言った。

「そうしていけない理由が私にはわからないわ」

私たちが幼い頃に私たちと城を守るために魔物と戦って亡くなつたお母様とお父様も恋愛結婚だったじゃない。

お母様は善良な魔女で、その魔力はなぜかマハネには受け継がれず、私だけが魔力の持ち主として生まれたの。

双子なのに不思議な話よね。  
美しい魔女だったお母様にオアシスで出会ったお父様は人目で恋をしたと聞いているわ。

魔族の国を飛び出してお父様と結婚したお母様は、魔力を受け継いだ私に色々な魔法を教えてくれた。

たとえば水晶を使って未来を映し出す魔法や、変身魔法、幻覚魔法なんかをね。

そして、命を落とす直前に私たちに銀で出来た小さな箱をひとつずつくれたの。

私の小箱にはバラの花の細工が、マハネの小箱にはジャスミンの

花の細工がそれぞれ施されていた。

「この箱にはお前たちの運命が眠っている。時が来たら開けてごらんなさい。そのときまで決して開けてはいけませんよ」

そのまま、銀の小箱は私たちにとって形見の品になってしまったわ……。

翌日、たくさんのお供を引き連れてシャルルカン王子がやって来た。

「お会いできて光栄です。噂にたがわずなんと美しい姫君でしょう」  
王子は私とマハネを見てにつこりと微笑んだ。

シャルルカン王子の印象を一言で言うならば、まさにおとぎ話の王子様ね。

高貴なロイヤルパープルの衣装を身にまとって、全てを魅了するようなアーモンド形の美しい目をした男性だった。

私は一目でシャルルカン王子に恋をしたの。

……そして、きつとマハネもね。

それから私は猛烈果敢にシャルルカン王子にアタックをしたの。  
魔法で村人に化けて、ふたりでこっそり市井見学にも行ったのよ。

「あなたはいつもこんな風に街に出かけているんですか？」

市場で買ったなつめやしのお菓子をためらいながらかじって王子は聞いた。

「いつもってわけじゃないけど」

喧騒を離れて寺院の木陰に隠れるようにしてふたりで座った。

「領主たるもの庶民のこととも理解しておかないと。そうでしょ？」

私は微笑みながら王子の顔を覗き込んだ。

王子は困ったように、でも嬉しそうでもある笑顔を見せた。

「そのとおりですね」

「……まったく、あなたにはびっくりさせられる」

さっきまで歩いていた人だかりのする市場を見ながら王子は言った。

「街に出て自分で買い物したり、庶民の中をひとりで歩いたのは初めてですよ」

「はしたない女だと思いになる？」

「いいえ、まさか！」

大きく首を横に振って、まぶしそうに笑いながら私を見た。

「あなたは素敵ですよ。ナエマ……。あなたのような人に会ったのは初めてだ」

王子の優しい目がじっと私を見つめて、

私もまっすぐに王子の目を見て、

どちらともなく唇を重ねた。

彼が私の運命なのだと、あの時は信じていた……。

それから2、3日後、中庭で話す王子とマハネを見かけた。どんな話をしているのかはわからなかったけど、王子がジャスミンの白い花を手折ってマハネの髪に挿しているのが見えた。はにかむように微笑んでマハネはうつむいた。

マハネはこんなにきれいだったかしら？

そう思ったのも不思議なことじゃなかった。今にして思えば……。

彼女もきつと恋する乙女だったのだから。

不安な気持ち胸の中を真っ黒に染めていく。

この気持ちは何なのだろう？

王子は私を素敵だと言った。

私のような人に会ったのは初めてだと。

……だけど？

私はこっそりマハネの部屋に忍び込んでマハネの銀の小箱を持ち出した。

この中に私たちの運命がある。

シャルルカン王子は私の運命なの？ それとも……。

部屋に戻って鍵を閉めると、カーテンも閉め切って、テーブルの上の小箱を並べた。

私の銀の小箱と、マハネの小箱。

胸がどきどきする。

見てしまったら何かが、何かを取り返しのつかないほどに決まってしまう気がして……。

だけど開けずにはいられなかった。

私は自分の運命に向かって歩いて行く。運命を待っているような女じゃなかったから。

意を決して、まず自分の小箱を開けた。

バラの花の細工が施された銀の箱を。

箱の中には……真つ赤な炎が燃えていた。

> i 2 2 7 7 3 — 2 9 7 6 <

何……？ これは、いったい……。

「やはりお前が開けたのね。ナエマ」

どこからかお母様の声がして、飛び上がるほど驚いた。

「お母様!?!」

周りを見回したけど、お母様の姿はない。

「ナエマ。開けてごらんなさい。マハネの箱も」

声は直接私の頭の中に響いてくるようだった。

言われるままに、私はジャスミンの花の細工が施されたマハネの箱を開けた。

蓋を開けた瞬間にかぐわしい香りがして、青い水のような輝きが見えた。

「……水と……炎？」

お母様の優しい声がまた頭に響いた。

「お前にはわかるはず」

全てを焼き尽くす情熱の炎。

全てを潤わす癒しの滴。

王子が求めているのは私ではない。

お母様は何もおっしゃらなかったけれど、私にはわかったわ。

あの小箱の炎と青い輝きを見た瞬間に。

涙が頬を伝ったけど、私は私の運命をつかむと決めていた。

「ここでこれ以上コケにされてたまるもんですか！」

こうなったらこの城を出て、私の運命を見つけてやるんだから！

それから、思い立ったが吉日とばかり、大急ぎで荷造りをしてその日のうちに城を出たのよ。

持ち物は宝物庫にあった金貨を少しばかり失敬して、城の宝の空飛ぶ絨毯と水晶玉と……それから、お母様の形見の小箱と、これだけあればまあなんとかなるでしょよ。



……と思っただら。

「さよならってどういうことですか？ 姫様」

生まれたときから姉のように私の世話をしてくれた侍女のアニスにはお別れを言っておこうと思っただのが運のつき。

「姫様は私がいなきゃなんにもできないんですからね！ 姫様が行くところにはどこへだっついていきますよ」

……と、魔物封じのランプに自ら閉じこもって私の旅に同行することになったの。

アニスがなくなっただって魔法でなんとかなるんだから、ついてこられても口うるさいだけなんだけどなあ……。

しかも、自分は高所恐怖症でおとなしく絨毯に乗ってられないからって普段はランプに隠れてるんだもの。

でもまあ、ひとりよりは少しは心強いかな？ アニスがいてくれたら。

「どうせ家出するなら思いっきり遠くへ行つてやろう！ モハメド先生が話してくれたジパングなんていいわね！」

……と、空飛ぶ絨毯で海を越えてここ、ジパングまでやって来たのよね。

はるばる西の彼方から……といっても、空飛ぶ絨毯に乗ってるんだからひとつ飛びなんだけど、ジパングらしき小さな島国にたどり着いた。

いきなり外国人が街に出て行くのも目立ちすぎるので、最初の日は山奥にひっそりと隠れて水晶玉でジパングの文化を研究していたの。

ジパングの言葉はなかなか難しいので、魔法を駆使して睡眠学習まで取り入れてアニスとふたりで勉強したわ。

八トに変身して町に出て、そつと女物のキモノをいただいたちゃったりもしたわね（言っとくけど盗んだわけじゃないわよ！ 金貨をちゃんと置いてきたんですからね！）。

それからひと月ほど経ったかしら……、私の言葉もずいぶん上達して、そろそろ本格的に町にくり出してほしいかなと思ったところにタイミングよく？ 野盗らしき男数人に取り囲まれた。

「命が惜しかったら言うとおりにした方がいいぜ。べっぴんさんよ」  
男たちは下卑た笑いを浮かべて舌なめずりをしながら私を見ていた。

全員ネズミに変えてやってもよかったんだけど、ご親切に立派な籠で町まで送ってくれるそうだから、そのまま言う通りにしておくことにしたのよね。

「こりやめったにない上玉だぜ」

上玉……って、超美形ってことよね。ふむふむ。

「せつかくだから俺達で頂いちまいやしようよ」

やれるもんならやってみなさいな。

「馬鹿やろう。我慢しねえか。俺達がやっちゃまっちゃ値が下がるだろっつが」

「しかし、これだけの美人めったにいやせんぜ」

そうでしょうとも。

“輝く太陽を恥じ入らせるほど美しい”と言われた后ゾバイダの娘ですからね。

それから男たちはなにやらごちゃごちゃと話していたけど、夜も更けてきたことだし、なんだかうとうとしてきちゃった……。

本格的な眠りに落ちる寸前に、「ボスツ」という音とか「ぐえ〜」という声とかが聞こえてきて、ぼんやりと目を覚ますと、目の前にやたらきれいな男の子？ が立っていた。

ジパングの若い男性を近くで見るのは初めてだったから、年齢まではよくわからなかったけど、艶やかな黒髪と輝く瞳が印象的だったわ。

さっき話して男たちとはずいぶん毛色が違うみたいだけど、なんなの？ この人は。

彼は三日月のような目につこりと笑って言った。

「お嬢さん。悪夢は終わりました。白馬のお殿様が助けに参りました」  
声をかけられて少し意識がはっきりしてきたけど、寝入りばなを起こされたもんだからまだ眠くて堪らなかったわ。

しかも空を見上げるとまだ真夜中だったし。

「まだ暗いじゃない。もう少し寝かせてよ」

「いやいや、そんなに上の方じゃなくて、もっと下の方を見て」

寝ぼけたまま素直に下の方を見ると、どうやらさっきの野盗たちが転がっていた。

「あら？ どうしたの？ 今度はあなたが私をさらうの？」

「さらうなんてとんでもない！」

美青年はぶんぶんと首を振って答えた。

「そなたを野盗から助けたのさ！」  
そしてまたさわやかに笑って言った。

「そうなの？ 面白そうだから言つとおりにしてただけで、別にいつでも逃げられたのに」  
と思わず本当のことを言つと美青年は少なからずがっかりしたみたいだった。

そのがっかりした様子が小さな男の子みたいでなんだか可愛い。

「でも、助けてくれたんなら礼を言つわ。ありがとうね」

今でははつきりと冴えた目で彼の方を見ると、背後で大きく刀を振りかぶつた男の姿が見えた。

「あ。後ろ」

危ないっと思つて指差したけれど、ガキンという音が鳴つて既に彼は斬られていた。

斬られたにもかかわらず彼は平然と振り返つて、驚きのあまり奇声を上げる男を一瞬で尽き倒した。

常人だというのにすごい瞬発力！

こつこつ剣術を国では見たことがなかったけど、かなりの使い手みたいね。

「見事な腕前ね。あなた名前は？」

「上泉六三郎だ」

彼は刀を鞘に収めて、私をまっすぐに見た。

その目は優しく微笑んでいて、その細い腕は荒くれ者5人をひと

りで倒すような豪傑のものにはとても見えない。

むしろなんだか可愛いよね。悪い人じゃなさそうだし。

籠を開けて六三郎は私の手を取った。

意外に骨っぽい彼の手は温かく、少しだけ胸の奥がどくんとした気がした。

「姫様……、なんですか？ あの男は」

私は六三郎が眠った際に、こっそりランプからアニス呼び出して事の次第を説明した。

5人の死体が転がっているところから離れて、安全そうな川辺で今夜は野宿することになったの。

「う〜ん。命の恩人？」

少なくとも私のために命を賭して戦ってくれたのは本当だし。

「こんな得体の知れない異国の男についていくなんて、賢い判断ではないでしょう？」

アニスは眉をひそめて小声で言った。

「小声にならなくても大丈夫よ。今の彼は殺しても起きないから。

魔法をかけてあるの」

「普通殺したら二度と起きませんよ」

……相変わらず口のへらない女だわね。アニスも。

そう言いながらも、アニスは少しためらいながら六三郎の寝顔を覗き込んだ。

「まあ……これは、ずいぶんときれいな若者ですね」

「でしょ？ シャルルカン王子にも劣らない美丈夫よね」

「でも……ヒゲを生やしていませんね。まだ未成年なのでしょうかね？」

「ううん。そうかも知れないわね」

私たちの国ではヒゲを生やしていない男は子供かホモと言われて  
いるの。

ヒゲをたくわえていることが立派な成人男性の証でもあるのよね。

ジパングではどうみてもオヤジだったりしてもヒゲを生やしていない人もいたけど、六三郎は案外私と同じ19歳ぐらいなのかも知れないわね。

あんなにたくさん男を斬ったのに、罪のなさそうな無邪気な寝顔を  
している。

「とにかく悪い人じゃないわよ。もしそうでも一瞬でネズミにしちやうから心配しないで」

「……まあ、そうなんでしょうけど」

アニスは「嫁入り前の娘が……」とかぶつぶつ言いながらまたラ  
ンプに戻っていった。

嫁入りをうつちゃって家出てきた娘を相手に何を言ってるのか

しらね。

私はもう一度六三郎の寝顔を見つめた。

そして、銀の小箱をそつと持ち上げてみた

そつと蓋を持ち上げるとキラキラと虹色に輝く星たちが見えた。

「星……？ これはいったい？」

アムランを出る直前は真っ赤な炎が燃えているように見えたのに。

今は虹のように色彩を変えながら輝く無数の星たちが閉じ込められているように見える。

私の運命を暗示するこの箱。今度はいったい何を言おうとしているの？

問いかけても、その夜お母様の声は聞こえなかった。

翌朝から六三郎との二人旅（実はランプに入ったアニスも入れて三人旅）が始まった。

話を聞いてみると、彼はもといた道場では免許皆伝の腕前で、その師匠をも凌ぐ剣豪だったらしいの。

剣の腕を頼みに就職活動してるらしいんだけど、要領が悪いのか未だ就職先は見つかっていないんですって。

あれほどの剣の使い手なら、向こうの方からスカウトしてきてもおかしくなさそうだけど……。

「七重。そなたの家はどこだ？ 帰りたいたらう」  
水にひたした干し飯を朝食にはおぼりながら六三郎が聞いた。

この人私の名前を聞き間違えて「七重」ってことにしちゃったのよね。まあいいけど。

「うづん」

もらった干し飯を少し齧って首を振った。

「私家を出てきたの」

「家出？ それはまたなんで？」

六三郎は驚いたように目を丸くしていた。

まさか「婿探しに来ました」とは言えないのであまいに

「うーん。色々あって……。それに簡単には帰れないわ。遠い、遠い国だから」

と答えておいた。

「へー。そんな遠い国から女ひとりでなんて、大変じゃなかった？」

「ま……、まあね」

深く追求しないでよ……。

「なら、俺と一緒に来るか？ そなたひとりぐらいは何としても食



わせてやるし守ってやるぞ」

六三郎はなんの心配もなさそうな明るい表情をして言った。

確かにジパングには不案内だし、彼がいれば色々なことを教えてもらえそうだわ。

あの虹色の星はきっと六三郎と関係があるような気がするし。それに、この人なんだか可愛いし、気に入っちゃったのよね。

そう考えた私はにっこりと微笑みながら頷いていた。

このときは、数日後彼が自分の夫になるとはまだ思ってもいなかった。

そして……よもや、自分が彼に呪いをかけることになるということも。

俺は故郷である常陸国へと向かっていた。

この状況を故郷に居る剣の師匠に相談しようと考えたのだ。

とは言っても師匠にこの状況をどう説明すりゃいいんだよ……。「なぜか突然、女になりました」じゃ絶対に信じてもらえねえだろうしな……。

まあそれは故郷に着くまでに何とか上手い言い方を考えよう。

しかし、今度故郷に帰るときは師匠には「妻を娶りました！」と報告して驚かせるはずが、まさか「女になりました！」と驚かせる事になりかねないとは……。

もっとも剣の師匠にこんな事を相談しても、なにも解決しないかも知れないが、あまりの出来事に、実際俺自身も気持ちが悪く落ち着いているとは言えない状態だ。

七重が居なくなつて、はや五日。

もしや、またさらわれたのかと思ひ、七重が居なくなつた付近の遊郭はくまなく捜したが、七重の姿は無く、それらしい女を見かけたという話も無かつた。

やっぱり、俺の体が女になつた事と七重が居なくなつた事は関係あるんだらうか……。

とにかく一旦故郷に帰つて、気を落ち着かせたら改めて日本中を歩き回つても七重を探し出すつもりだつた。

しかし、七重は今どこにいるんだろうか。

遊郭に売られたりしているわけじゃないのは間違いないと思うが、それと七重の身が安全という事とはまた別の話だ。

だが、闇雲に探し回ったところで偶然七重を見つかるなんて事は、あり得ないだろう。

俺が故郷に向かうのには、当然元来た道、七重と歩いた道を逆に歩くことになる。

もしかすると、何か手がかりがあるのでは？ という考えもあった。

さらに、落ち着いて事態を整理する意味もあつて取り敢えずは故郷を目指す事にしたのだ。

しかし、七重が無事かを考えるたびに、胸が張り裂けそうになる。七重は野盗に連れられ去れそうになっていた時も、簡単に逃げられるみたいな事を言っていたが、実際どうやって逃げるつもりだったのかは聞いていなかった。

今回七重が連れさらわれて戻ってきていないと言う事は、七重のその方法が通用しなかったと言う事だろうか……。

だめだ、気が滅入るばかりだ。

しかも、ただでさえ頭を悩ませている俺に追い討ちを掛けやがる奴がいる。

「宿に泊まるんなら同室つすよね!」

どうしてこいつはそこで、？（疑問）ではなく！（断定）を  
持って来るんだ？

俺と同室で寝ることを目論んで、伍助は目を輝かせながら俺の後  
を付いて来る。

どうしてこんな奴を付いて来させるのかと言えば、勝手に付いて  
来やがるのだ。

伍助と初めて会った時に、伍助は追っ手を1対2で倒しただけあ  
つてかなりの腕前だ。

そのかなりの腕前の忍者を撒くのは、それ以上の腕前の忍者でな  
いと難しい。

戦えば伍助に負けるとは思わないが、あくまで剣士である俺に、  
伍助を撒くのは不可能だったのだ。

もちろん、何度かは俺も伍助を撒こうとしたのだが、伍助が寝て  
いるうちに起き出し、必死で駆けて山を越え谷を越えた挙句、

「黙って行くなんて、つれないっすよ！」

と笑いながら先回りされていては逃げるのも馬鹿馬鹿しくなった。

結局、どうせ撒けないのならと、俺は伍助に貴重品以外の荷物を  
持たせたり、野宿する時に食事の用意をさせたりと、こき使う事に  
した。

だが伍助は、荷物を持たせようとした俺を

「やっと俺のことを受け入れてくれたんっすね！」

と抱きしめてきやがった。

とりあえず伍助の股間を蹴り上げといたが、寝込みを襲われては  
たまったもんじゃねえ。

「……いや、先を急ぐので次の宿場町は素通りする」

「野宿は危険つすよ!」

お前の方がもつと危険だ。

「だいたい、俺は野宿でも襲うから同じことつすよ?」

自分で言うなよ。

だが先を急ぐ事もあるが、実は路銀が底をつきかけている。

野宿したからといって体調を壊すようなやわな鍛え方をしていないので、よっぽどの事がない限り野宿したほうが良いだろう。

飯は伍助が何とかするしな。

俺は、未練がましく「やっぱり泊まりやしようよー」という伍助を無視して宿場町を通り過ぎ、道を急いだ。

山道を進んでいると、はじめは俺たち以外の旅人とも何人かすれ違ったが、日が傾くに連れて誰ともすれ違わなくなった。

これからこの山道に入っているのは、日があるうちに次の宿場町まで辿り着けない。

野宿などしない普通の旅人がこの時間にこんなところを歩いてはいないか。

俺たちも暗くなる前に野宿の準備をする事にした。

「じゃあ、なんか食うもん集めてきやす!」

伍助はそう言って山の中に分け入って姿を消した。忍者だけあつて、食べられる山菜を見分けたり、野鳥などを捕らえるのが上手い。まかせておけば大丈夫だろう。

じゃあ、俺はかまどでも作っておくかな。

手ごろな石を集めて環になるように並べ、次に木の枝を集めた。たいして手間が掛かる事でもないのですぐに終わり、俺は近くに生えていた木の幹にもたれ掛り伍助の帰りを待った。

そういえば七重と旅していた時は、七重がかまどの準備をしてくれてたな……。

七重の作る料理は今まで食べたことが無い味付けで、辛かったけど美味かった。

俺が「変わった味付けだな」と言うと、七重は、「私の生まれたところの味付けなの」と言った。

「七重の生まれたところって?」

「えーと。ここよりずっと西に行って南の方よ」

「ずっと西で南って言うと……。もしかして琉球?」

「え? ええ。そうよ。そ」

「やっぱりそうか。七重はちょっとエキゾチックな感じだから、そうかなって思ってたんだ。でも、すごく遠くから来たんだな」

「ええ。そう。とても遠くから来たの……」

七重はそう言って遠くを見つめていた。

琉球か……。

場合によつては琉球まで行くことも考えないといけないな。

しかしもし七重が琉球に居るとなると、もしかして俺に見切りをつけ、実家に帰ったということか！？

いやいや、そんな事は無いはずだ！

だって、俺と七重はラブラブだったはずだ！

だが、七重は親の承諾を得ずに俺と結婚している。

もしかして、それが親にばれて連れて帰られたとか、ありえるかも知れない……。

やはり、結婚するときは、ちゃんと親御さんに挨拶すべきだったか……。

琉球に行くときは、結納道具を持参すべきだろうか？

いや、しかしそれにしても、俺の体が女になっている事を先に解決しないと、

「娘さんを嫁に下さい！」

「きみは女じゃないか」

で、話が終わってしまふ。

やはり、男の体に戻るのが先か？

いやいや、七重が実家に帰っていると決まった訳じゃない。

七重の安全を考えれば、七重の居場所を先に見つけないと。

うーん。考えが纏まらない。

やはり、早く故郷に帰って落ち着いて考えを整理する必要がある

な。

「ただいま帰りやした」

俺が七重の事や体の事を色々と考えていると、伍助の声が聞こえた。

声のする方に視線をやると、伍助が右手で山菜を抱え、左手に野鳥をもつて戻ってくる場所だった。

そして近くまで来ると、俺が準備したかまどの傍にその山菜と野鳥を置いたが、伍助は終始にこにこと笑っている。

「なにをそんなに笑ってるんだ？」

「いやー。一仕事終わった旦那の帰りを、飯の準備をして待つ新妻ってこんな感じなんっすかねー？」

伍助はそう言って、俺に向かって親指を突き立てて笑った。

「……………」

> i 2 2 9 7 3 — 2 9 7 6 <

俺は二度とかまどの用意はしないと心に誓い、とりあえず今回は無視する事にした。

その後俺は、飯の準備は伍助に任せ、伍助に背を向けて寝転がり飯の準備が終るのを待った。



背を向けたのは、もちろん、拒絶の意思を表す為だ。

そしてそのうち、良い匂いがしてきたな。と思っていると伍助の「出来やしたよー」という声が聞こえた。

俺は伍助が用意した飯を食い終わると、すぐに横になる事にした。辺りが暗くなれば寝るしかする事がないのだ。早く寝て朝早くに起きて道を急ぐのがいいだろう。

だが、木の幹の傍で横になると、かまどの前から立ち上がろうとした俺だったが、膝が纏れその場に尻餅をついてしまった。なんだ？ 体が重いぞ？

「あ。効いてきたっすか？ 飯に薬入れたんっすよ！」

おいおい。洒落になんねえだろ。

「いやー。料理している時に、俺から背を向けていたから、チャンスかなーって。つい」

伍助は呆然とする俺に見つめられながら「さーてと」と、ゆっくり立ち上がった。

我に返った俺は、地面を転がり木の根元へと辿り着いた。そして木の幹に立てかけていた刀を手にする。

殺らなければ、犯られる！

俺は震える手で刀を抜くと、木の幹で体を支えながら何とか立ち上がった。

「あれ？ 結構動けるんすね？ かなりの量の薬入れたのに」

伍助はそう言いながらにやにやと笑って近づいてきやがる。薬が効いていると余裕なのだろう。

俺は刀を持つ手を腰の右横に引いて、突きの体制に入った。

伍助は警戒して俺の突きの間合いの外で脚を止めた。そしてそこで余裕の表情で俺を眺めている。

薬が効いて俺が倒れるのを待っているのだろう。

だが、しばらく俺と対峙しているうちに、伍助が首を傾げた。

「なんでまだ立ってられるんです？」

「昔から薬が効き難い体質でな」

「げ！ それは予想してなかったすね……」

さっきまで余裕を見せていた伍助だったが、かなり焦ってきたようだ。

さすがに薬まで使って失敗しては、後がない。

ここまでやって失敗しては、次の日も共に旅するのは難しいと伍助も分かっているのだろう。

だが薬が効き難い体質というのは嘘だった。

俺は今にも倒れそうになっていたのだ。

ではなぜ平気そうに、重たい刀を構えていられるのかというと、実は木の幹にくぼみがあるのを見つけ、そのくぼみに刀の柄を差し込んでいたのだ。

つまり、重たい刀を構えているのではなく、固定された刀に寄りかかって立っているのだ。

だがそれももう限界だった。

寄りかかるといっても、刀を構えているように見せかけているので、全体重を支えられているわけではない。

今にも膝が崩れそうだった。

倒れたら伍助の餌食になるだろう……。

しょうがない……俺はやむを得ず切り出した。

「ルールを決めないか？」

「ルールっすか？」

「ああ。とりあえず薬はなしだ」

「へえ。それで？」

「薬なしでお前が俺を襲うのに成功すれば、大人しくお前のものになつてやるっじゃないか」

想像すると自分でも気持ち悪いが、仕方がない。

ここで犯られるよりはマシっていうもんだ。

「へー。どういう風の吹き回しです？」

伍助が疑いの眼差しで俺を見た。

薬が効かないのなら、そんなルールを作る必要がないだろうと疑っているのかも知れない。

「お前がもつと強力な薬を持っていないとも限らないからな。まあもつともこのルールをお前が受けないなら、どちらにしろもつお前をつけてこさせる訳にはいかないがな」

俺は舌が纏れそうになるのを何とか堪えた。

目も霞んで来た。

もう限界に近い。

「うーん。どうしやしょうかねー」

伍助にしてみれば、俺が連れて行かないと言っても、勝手にいつて来る事はできるのだ。

薬ありで俺に隠れて追いかけて襲うチャンス等待つのと、薬なしで俺と一緒に旅しながら襲うチャンス等待つのどちらが良いか迷っているのだろう。

「言つとくが、薬ありの場合は、お前を殺すつもりで抵抗するからな」

「げ！ それは勘弁して欲しいっすね……」

伍助は「うーん」と唸り考え込んでいる。

まったく、もつと違うことに頭を使ったらどうなんだ。

そんな事だから、上司の嫁なんかに手を出して命を狙われるんだ。

……くそ。

早く結論をだしてくれ、もう……限界なんだ。

「うーん。じゃあ薬なしの方で」

その声を聞いた瞬間、俺は意識を失った。

しばらくし気付くと、俺は伍助の膝に抱えられていた。  
なに？

犯られてないか!？

俺は慌てて自分の体のあちこちをさわり衣服の乱れを確認した。

「大丈夫っすよ。何もしていやせん。約束ですからね」

伍助はそう言って、にこっと笑った。

「伍助……」

意外に律儀な奴なのかもしれないな……。

「お六……」

伍助はそう言って俺の顔に自分の顔を近づけた。

「誰が、お六だ!!」

俺の頭突きが伍助の顔面に炸裂した。

#### 4：ナエマ（前書き）

六三郎とナエマが結婚するまでの経緯を書いたお話。  
ナエマのドキドキを書いてみました。

#### 4：ナエマ

アニスが旅籠の隣の部屋で新しいキモノを縫っている隙に、私はこっそり水晶玉を取り出した。

お母様直伝の透視スクライイングは私をもっとも得意とする魔術のひとつなのよ。

両手のひらで水晶玉の表面を軽くさすると、ぼんやりと六三郎の姿が浮かび上がってきた。

あの人、また野宿してるのね。

どこかの山奥で焚き火の炎に照らされながら横になっている六三郎の姿が見えた。

相変わらず無邪気な寝顔で、男のときから可愛かったけど、女になった今ではこの私が焦りを感じるくらいの美女ぶりだね。

眠れる美女……と言ったところかしら？ となんとなく思った瞬間に隅の方で黒いものが動くのが見えた。

……男？

引き締まった体つきの黒装束の男が歩いている。

もっとよく見ようと水晶の映像をズームアップして男の顔がはっきりとわかるようにした。

粗野な感じだけどなかなかのハンサム。繊細で美女と言っても通

用しそうな六三郎とはまさに正反対のタイプで、男臭さが漂うワイルドな魅力がある。

なんなの？ この男は？

男は口元に笑いを浮かべると、いきなり六三郎に覆いかぶさって首筋に唇を押し当てた。

なに〜〜〜！？ こいつも六三郎の愛人なわけ！！？？

思わず拳を硬く握って水晶玉を覗き込んだけど、水鏡に小石を投げ込んだみたいに映像が割れて、波打つようなノイズが流れた。

あ〜〜、またやってしまったわ！ こんなときに！！

お母様によると、私のスクライミング能力は突出してるんだけど、どうも感情の起伏が妨碍になって映し出した映像にノイズが入ってしまうことがしばしばあるらしいの。

こつなったらもうこの映像は見る事ができないのよね〜。

「くう〜〜〜……！」

感情のコントロールができない限り、このノイズもコントロールできないみたいなんだけど……。まったく、こんな時に！

「姫様？ どうかしましたか？」

一仕事終えたらしいアニスが襖を開けて出てきた。

私はあわてて水晶玉を後ろに隠して答えた。

「な、なんでもないわよ。ちょっと足がしびれちゃって」



アニスはうなずいて言った。

「ジパングって椅子がないですもんね。ザブトンとかいうクッションを作るぐらいなら椅子を作ったらいいのにとおもいますわ。木材も驚くほど豊富にあるようですし」

なんとかごまかしたけど、自分から呪いをかけて捨ててきた六三郎が気にかかるなんてとても言えないわ……。

「で、どうだったんですか？」

アニスは私の向かいに腰を下ろしてたずねた。

「どづって？」

「六三郎さんのことです。水晶玉で見ていたんでしょう？」

……この女こそ千里眼なんじゃないかしら。

「べ……別にっ」

私はぷいっと顔を背けた。

「私思ってますけど」

アニスは私の態度を気にもかけずに続けた。

「六三郎さんの浮気って姫様の勘違いだったりしませんか？」

「どづして？ 私はこの目で見たのよ」

まさに今も、水晶玉で見たばかりですしねっ。

「六三郎さんと直接お話したことはありませんけど」

アニスは首を傾げた。

「男性は愛してもいない女性にお母様の形見のかんざしを渡したりするものでしょうか？」

「それは……」

わたしは。初めての夜、六三郎が私にかんざしをくれたときのことを思い出した。

六三郎との旅は主に野宿だった。

就職活動中の彼はお金持ちとは言いがたかったし、徒歩での旅だったから（私の正体は隠していたから絨毯は使えなかったの）、慣れない私を連れてそれほど早く移動することはできなかった。

すっかり疲れた私を背負って歩いてくれることもあったし、六三郎ひとりなら次の旅籠にたどり着けた距離でも、私を連れていたせいでその半分ぐらいしか進めなかったみたい。

だから必然的に野宿をすることが多くなっていて、六三郎は柔らかい草を集めてその上に自分のキモノを置いて少しでも寝心地のいい褥を作ってくれたりもした。

「ごめんなさいね」

私は六三郎の背中で揺られながら謝った。

「何が？」

「重いでしょう？ 私足手まといになってるわよね」

実は六三郎が負担を感じないように魔法でちょっと身を軽くしてるんだけど、それでもかなりの負荷がかかることになってしまっ

六三郎は暢気に笑いながら答えた。

「なんの。軽すぎて拍子抜けしたぐらいだよ。女はみんなこんなに軽いのか？」

そんなわけないでしょ。普通だったらこの倍ぐらいあるわよ。

「それに」

わざわざ木陰を選んで、盛り上がって歩きにくい木の根元を歩きながら六三郎は言った。

「一緒に来いと言ったのは俺だ。そなたを守ると約束したんだから。これぐらいいたいたこと無いよ」

胸がどくと鳴った。初めて彼が私の手を取ったときのように。

いやだわ。ぴったりと密着してる背中からこのときどきが伝わったらどうしよう？ (六三郎は鎖帷子着てるから伝わらないかしら？)

こんな少年みたいな感じの華奢な体で（といっても筋肉硬いけど）、女の子みたいにきれいな顔で、そんなこと言われると弱いよね〜。

このギャップがダメだわ！ 私。

シャルルカン王子とキスをして、身も心も焦がすような恋心を抱いたのはついこの間のことなのに。

激しいスコールの後、砂の間の水分がどんどん消え昇っていくように、あの時の切なさが消えてゆく。

まだ彼に出会って4日目だというのに……。

その日は、六三郎いわくジパングの「梅雨」という雨季が近づいてきている影響でかなり湿度が高かった。

アムランではこんなにじめじめした空気を感じたことがなかった私には息苦しいぐらいだったわ。

特に、夜の寝苦しさだったら！

六三郎は小さな滝の近くの風通しのいい涼しい場所を野宿に選んでくれたけど、19年間砂漠でしか暮らしたことの無い私は、何度も寝返りを打っては汗だくになって目を覚ました。

もう！ こんなんじゃないわ！ 寝られやしないわ！

ただでさえ寝起きのあまりよくない私だけど、あまりの不快さがまんできなくなっていたのね。

熟睡している六三郎の横をこっそり通り抜けて、滝つぼで水浴びをすることにしたの。

乾いたきれいな岩の上でバサッとキモノを脱ぎ捨てて（姫だから自分でドレスをたたんだりはいしないのよ）、つま先をちゃぷんと水の中に浸してみた。

うっくん！ 冷たくて気持ちいい！

安心した私はざぶざぶと水の中に入っていった。

滝つぼは腰ぐらいの深さで中腰になれば肩までしっかりと浸かることができ、水浴びにはぴったりだった。

嬉しくなって、私はちよろちよろと流れている細い滝の下まで歩いて行って頭から冷たい水を受けた。

……すると、思わず声に出して言ってしまったの。

「あ〜〜！ 気持ちいい」

「七重！ どうした？」

私の声と気配の無さに違和感を感じたのか、目を覚ましたらしい六三郎の声がした。

しまった！ 寝ぼけてて魔法かけるの忘れてたわ！

一刻も早く水に飛び込みたい一心で六三郎を昏睡状態にする魔法をかけるのを忘れちゃったのよね。

しかもあわてちゃったもんだから、どんな魔法でこの事態を切り抜ければいいのかとつさのことで思いつかない。

「七重！」

ガサつと音がして草むらをかきわけて六三郎が飛び出してきた。

水浴びをしている私を見て驚いたのか、一瞬弾かれたように後ずさって声を上げた。

「な、なななな何してんだ！？ 七重！？」

「何って……」

見られたものは仕方がない、とばかりに私は開き直すことにした。

「水浴びよ。あんまり暑くて寝られないんだもの」

大丈夫。肩まで水に浸かっているし、頭から水浴びしていたさつきも六三郎に見えたのはせいぜい背中ぐらいよ！

そう、自分に言い聞かせたものの、胸のドキドキが頭までのぼって、体は冷えたのに顔が火照ってきているのを感じる。

「ひとりで危ないだろう！ また野盗にさらわれたらどうするんだよ！？」

「さらわれないわよ」

「……って、実際さらわれてただろ!? そなたは女なんだから用心しないと!」

六三郎は今度は真剣に怒っているようだった。

あれはわざとさらわれたのであって、そんな心配はまったくくないのだと言っわけにもいかない。

「わ……わかったわよ。出るから向こうへ行つてよ」

私は右腕で水面を払いのけるように飛沫をあげながら六三郎が来た方を指差した。

六三郎は素直に來た道を帰っていったけど、しばらくするとまたガサガサと音をたてて戻ってきた。

「おい」

「何よ?」

あんたがいると出られないじゃないの〜!!

彼は褥に使っていた自分のキモノを私のキモノの横に放り投げた。

「それで体を拭くといい」

六三郎は私に背を向けてその場に立っていた。

「……あ、ありがとう」

私は体をかがめたまま、水面から上に肌が露出しないようにしてキモノを置いた岩の方に進んだ。

「……ちょっと」

「なんだ？」

「いつまでそこにいるのよ？ 出れないじゃない」

六三郎はため息をついた。

「見ないから安心しろ。でも、誰かが来たら俺がいないと危ないからな」

今度こそ私の顔は真っ赤になった。

両手のひらで頬を覆いながら岸に近づいて、水から上がるときは両腕で胸を隠しながらすばやく六三郎のキモノを取り上げた。

あわてて体を拭いて自分のキモノを着ると、帯をしっかりと結び、髪をしばって足元にボタボタと水滴を落とした。

「着たわよ」

六三郎は振り返ってこちらに歩いてくると自分のキモノを拾った。

「布団が濡れてしまったな……」



「……」ごめんなさい」

私はうつむいて言った。うつむいたのは反省したからじゃなくて、真っ赤になつてゐるのである。顔を六三郎に見られなくなつたから。

今夜は明るい満月で、月明かりに照らされたら私の頬の赤さがきつとはつきりとわかつてしまう……。

六三郎はゆっくりと右手を伸ばして私の濡れた髪に触れた。

我知らず体がびくつと震えるのを感じた。

髪についていたのか緑の若葉をつまんだ六三郎がその葉を見ながらぼそつと呟いた。

「……やべーな……。俺が襲つちまつかも……」

！！？？

ちょ……、襲つとか、そんな顔で言うのやめて……！！！！

「七重」

六三郎は真剣な声で（表情は見れなかった。私が真っ赤な顔を上げられなかったから）私の方を見て、両手で私の肩を抱いた。

ドキドキがピークになつて胸が苦しくて、私は思わず身をよじつて逃れようとした。

「聞いてくれ。七重」

逃がすまいとしたのか六三郎の腕に力がこもった。私が身動きもできないほどに。

「七重。俺の嫁になってくれない？」

私はびっくりして真っ赤な顔のまま六三郎を見た。

何を……言い出すのよ？ 突然、この人は……。

六三郎は優しい目をしていて、でもちょっと困ったような照れたような表情をしていた。

「……はじめて会ったときから飛天のように美しい女だと思ってたんだ」

右手を私の顎に添えて更に上を向かせる。

「白状すると、そなたが売られてしまうなら最初の客になるうと思つて後をつけてた。最初にそなたを抱くのは俺だと」

「わ……私は売り買いされるような女ではないわ！」

「わかつてる」

左手で私の頬を包み込むように触れる。髪から流れる滴がその手を伝って落ちるのがわかる。

ああ、きつと私の顔が火照っているのが六三郎には丸分かりにな

ったしまったに違いないわ。

六三郎は目を細めて言った。

「そなたのような女は初めてだ」

彼の言葉に、シャルルカン王子の言葉を思い出していた。

「あなたのような人に会ったのは初めてだ」

王子もそう言った。でも、選んだのは私ではなかった。

「……私だけ？」

「うん？」

「それは、私だけ？ 死ぬまで私だけを愛すると誓える？ アツラ  
ーにかけて」

六三郎は首を傾げた。

「アツラー？」

ジパングではアツラーの神は敬われていないのね。

アムランでは、アツラーに立てた誓いを破ると魂が損なわれ懲罰を受けると言われているわ。

つまり破ることのできない誓いを意味するのよ。

「それが何かは知らんが、このかんざしにかけて誓うよ」

彼は下着の懷から赤い包みを取り出した。包みを解くと中に入っていたのは一本の鼈甲の髪飾りだった。

「これは？」

「母上の形見だ。肌身離さず身につけていた。上泉家の家紋が入っている」

丸い部分に三つ葉のクローバーのような彫が入っている。

きつと高貴な女性が髪に挿していたのだろう。

「これをそなたに。母以上に愛する女に出会えたら渡そうと思っていたんだ」

六三郎はかんざしの玉の方を私に向けて差し出した。

「そなたがこれを受け取ったら、今晚そなたを俺の妻にする」

「……！……！」

「……今晚つて！？　なんでそんな急展開なのよ……！？」

考えておいてくれとか、せめて一週間後に返事を聞かせてくれとか、普通もつと待つてくれるもんじゃないの？

シャルルカン王子のときとは違う。これじゃ振り回されてるのはまるで私じゃない？

しかも手管とかかけひきとかじゃなくて、この男は天然なのよ〜  
〜!!

ああもう！ そんなけれんみの無い顔で私を見ないでったら。

混乱する頭のまま彼の目を見ると、ほとんど魔法にかかったようにかんざしに指を伸ばした。

数秒後かんざしを手に行っている自分にはつと気がつく、六三郎はそのまま私の体を引き寄せ、強く抱きしめた。

そして私を抱き上げると柔らかな草の上にそっと下ろした。

「ちょ……ちょっと待って」

私はのしかかってくる六三郎の胸を両手で押し返そうとした。

「どうして？ 言っただろっ？ かんざしを受け取ったら今晚そなたを俺の妻にするって」

彼は私の両手首をつかんで傷つけないように優しく、でもしっかりと地面に組み敷いた。

「七重は受け取った。これはオツケーということだよな？」

「それは……そうかもしれないけど……」

女には心の準備つてもんが必要なのよ〜。

「あれは、手が勝手にね〜」なんて言い訳はこの期に及んで通用し

ないかしら……？

「有言実行が俺の信条だ」

六三郎は笑って私を見た。

「……………」

そんな風に微笑まれると何も言えない……。

彼は、心臓が破れそうにドキドキしている私の帯を解き、胸元を開いた。

そして、私の首筋に、肩に、胸に、頬に、唇に、そっとついでに、ような口づけをした。

すべてが終わって、自分が六三郎の妻になったのだと思ったとき、私は彼の腕の中でそっと呪文を唱えた。

六三郎が私以外の女を愛せなくなる呪文を。

5：六三郎（前書き）

いよいよ、六三郎が故郷の道場に到着。

六三郎の元カノも登場？

（なにげに伍助も大活躍）

俺は、伍助との貞操をかけた数度の攻防にすべて勝利し、何とか清い体のまま常陸国にある故郷の村へとたどり着いた。

だが、伍助との攻防に全神経を傾けた結果……。師匠に会った時に、俺の身に降りかかった事態をどう説明しようかという事を、まったく考えてなかったのだ。

くそ……。これもすべてこの男の所為か……。

俺は伍助を睨んだが、当の伍助は飄々たるものだ。

どうにかして、俺が男のままだという事で通用しないか？  
そういえば、伍助は俺を一目見て女と分かったんだっけかな。  
その時も俺は男の格好をしていたはずなんだが……。

「どうして俺が女の体をしているって分かったんだ？」

「もちろん、フェロモンっすよ！」

「……ああ、すまん。聞いた俺が悪かった」

「後、腰のラインっすかね！ それとやっぱり胸の膨らみはたまんないっすよー！」

「……いや、もういい」

だんだん気持ち悪くなってきた。



しかしフェロモンなんてもので分かるのは伍助くらいなもんだろ  
う。

腰のラインと、胸の膨らみか……。  
腹に布でも巻いて胴を太く見せて、胸はサラシを巻けば、男っぽ  
く見えるか？

よし！ うだうだ考えてても仕方がない。  
これで行こう！

こうして俺は、体中に布を巻きつけ、数ヶ月ぶりに故郷の道場の  
門をくぐった。

「お久しぶりです！」

俺がそう挨拶して道場に入ると、道場に居た俺の弟弟子達も一斉  
に、

「兄弟子！ お久しぶりです！」

「いつお帰りに!？」

と口々に挨拶をして来た。

うんうん。どうやら女だとばれていない様だな。

「今着いたところだ。とにかく道場に顔を出そうと思ってな」

俺はそう言いながら、弟弟子達のところに近づいた、が……。  
でか！ こいつらこんなに身長が高かったか？

「あれ？ 兄弟子、背が縮んでないですか？」

なに？

あ！ そうか、女になった時にもしかしたら身長が縮んでたのか！

着物がぶかぶかになったとは思っていたが、それは単に体が細く  
なったからだと思ってた。

七重が居れば、七重との背丈の差で自分の背が縮んだ事を分かっ  
たんだろぅが……。

とにかく今は、何とか誤魔化さないと。

「いや。えーと。お前達ちょっと見ない間に随分大きくなつたな！  
見違えたぞ！」

「え！ 本当ですか？ 自分でも背が伸びたとは思っていましたが、  
いやーまさか兄弟子よりも背が高くなっているとは」

「はははは。いやいや、本当に見違えた！ 見違えた！」

ふー。

なんとか誤魔化せたか。

俺はやれやれと、額の汗を拭った。

すると弟弟子の一人が、俺の背後に立つ伍助を見つけて聞いてき  
た。

「そついえば、そちらの御仁は？」

「ああ。こいつは俺が危ないところを助けてやった抜け忍で、伍助  
って言うんだ」

「始めまして。彼氏の伍助です」

誰が彼氏か！

俺は伍助に怒鳴ろうと思ったが、それよりも早く弟弟子達が騒ぎ  
出した。

「そんな！ 兄弟子はそつちの趣味は無いつて言ったのに！」

「だったら俺も諦めなければ良かった！」

「ひどい！ 俺達を騙してたんですね！」

……おい。お前ら。

正直、兄弟子に迫られた事はあったが、まさか弟弟子達にも狙われていたとは……。

もしかして、俺はまんまと獣の巣窟に入り込んでしまったのか？

「お前ら騙されるな。俺が男に走るわけないだろ！」

俺が全力で否定すると、弟弟子達はなんとか納得したみたいだが、その表情はなにやら残念そうだった。

俺が男色に走ったのなら、自分にもチャンスがあるとでも思ったのか？

くそ……。

故郷の道場に戻れば、気を落ちつかせられると思ったのに、これではおちおちのんびりともしてられない。

まあ師匠ならばこいつらみたいな事もないだろう。俺はそう思って道場を見渡したが、師匠の姿が無い。

「あれ？ 師匠は？」

「師匠は、持病の腰痛が悪化して寝ています」

そうか。

まあ師匠は20年以上前40歳のときに、当時この常陸国を治めていた佐竹氏側として、関東の雄後北条氏と戦った事もあるという人だからな。

よる歳には勝てないか。

「と、言う事は今道場に居るのはお前達だけなのか？」

「はいそうです」

うーん。

どうも心許ないな。

俺を含めてこいつ等の兄弟子は、みんな仕官を求めて道場を出て行っているからな。

しかし、兄弟子達の仕官は上手く行ってるんだらうか？

数年前に道場を出た兄弟子の多兵衛さんの時はまだ合戦もあつたからすんなりと仕官出来たと聞いている。

だが、その話を聞いて、じゃあ俺達も簡単に仕官できるかも！  
と思つてその後に出た俺や、俺とさほど変わらない時期に道場をでた兄弟子達は、俺と同じく仕官に苦労してるんじゃないか？

兄弟子達も当然俺と同じく、突きが主体の実践剣術。今はやりの  
刀を振り回す道場剣術は苦手のはずだ。

まったくほんの数年の差でこうも状況が変わるとは、これが仕官  
氷河期というやつか。

俺がそう考えていると、弟弟子が遠慮がちに声をかけて来た。

「兄弟子が帰つて来たのが嬉しかったので、忘れていましたが、実  
は……。今、道場破りが来ているんです」

「道場破り!？」

わざわざこんな田舎の道場に来る道場破りが居るとは。

「はい。そうなんです。三日後に果し合いに来ると予告があったんです」

「予告してから来るとは、随分自信満々な道場破りだな」

普通予告なんてすれば、道場側が圧倒的に有利だ。

道場側は準備を整えられるし、極端な話大人数を揃えて袋叩きにした拳句、他に目撃者が居ないのを良い事に、1対1で勝ったんだと言い張ることすら出来るからだ。

もちろん、うちの道場はそんな卑怯な真似はしないが、どちらにしるその道場破りはかなり腕に自信があるのだろう。

「それが実は、その道場破りは師匠の昔のライバルの弟子らしいんです」

「師匠のライバル？」

「そうなんです。実は師匠の幼馴染だったらしいのですが、昔一緒に合戦に出たとき、師匠の方が手柄を立てて褒美を貰ったのを逆恨みしたらしくて……」

故郷の道場に戻って気を落ち着かせるはずが、色々と面倒な事になってるな。

道場破りの件も含めて師匠と話すしかないか。

「師匠は母屋の方で寝てるんだな？」

「はい、そうです」

その返事に、俺は勝手知ったる道場の奥へと進み、師匠に会いに行くことにした。

伍助は連れて行くと面倒なので、道場で見学でもしていると言つて置いてきた。

「師匠！ 六三郎。ただいま帰りました！」

俺は師匠の寢室の前で正座をして、中で横になっているであろう師匠に声をかけた。

「おお。六三郎か。どうしたのじゃ？ 仕官は出来たのか？」

う！

いきなり痛いところを……。

「いえ……。残念ながら仕官の儀はまだですが、実は折り入って師匠に相談したい事が」

「わしに？ まあ良い。とにかく中に入れ」

「失礼いたします」

俺は師匠の言葉に、ふすまを開け寢室へと入った。

師匠は予想通り、布団に横になっていた。

そして俺を見るなり、体を起こしながら口を開いた。

「おお。六三郎、少し見ない間にすっかり……小さくなって無いか？」

「気のせいで御座います」

「おお。そうか気のせいか」

ふー。

上手く誤魔化せたか。

「それで、何の用でわしに会いに来たんじゃ？」

「実は、私妻を娶りまして……」

「なに！ それはめでたい。すぐにその妻とやらに会わせろ。どこにおるんじゃ？」

「いえ。それが……突然姿が見えなくなってしまいました……」

「なに！ 結婚してすぐに嫁に逃げられたと言うのか！」

「ち・が・い・ま・す！ 姿が見えなくなつたのです！」

だが俺の抗議もむなしく、師匠は気の毒そうな表情で俺を見ている。

ああ。現実を認められないんだ……。とでも言いたいのだろう。だが、断じて逃げられたのではない！ その前日まで俺と七重はラブラブだったのだ！

「ふー。それで、わしに何を相談したいのだ？ 嫁がどうしていなくなつたのか？ などと聞かれても、わしに突然居なくなる乙女心など分らんぞ？」

「師匠に乙女心について聞こうなどと思ってはおりません」

「じゃあ、わしに何が聞きたいのじゃ？」

「居なくなった人を探すにはどうすれば良いか、師匠なら何かお知恵があるかと思ひまして」

すると師匠は「うーん」と眉をひそめていたが、しばらくすると「たしか……」と口を開いた。

「どこかの国に、失せ物や探し人が居る場所を探し当てる事ができるといふ者達が居た筈なのじゃが……」

「おお！ まさしくその様な話が聞きたかったのです！ その者達はどこに居るのでしょうか？」

だが師匠は俺の問いに首をひねった。

「どこの国に居るかがどうしても思ひだせん！」

師匠……そんな事を男らしく言い切らなくても。

しかし、そうなるとどうしたものだろう。

師匠が思い出すまでしばらく待つしかないか……。

あ、そういえば道場破りの話もあったな。俺が戦った方が良いんだらうか。

「そう言えば、道場破りが来ているそうですね」



俺がそう聞くと、師匠の表情が曇った。  
当たり前と言えば当たり前だが、師匠にとってあまり楽しい話では無いらしい。

「ああ。あやつめ。手柄を立てられなかった事など自業自得である  
うに、わしを逆恨みしおって」

確かに。

だが、その様な者の弟子など高が知れていると思うのだが、よく  
うちに道場破りに来たな。

「して。その道場破りは果たしててだれなのでしょうか？ 話を聞  
く限り、たいした相手とは思えないのですが」

「いや。油断は禁物じゃ。あやつは剣の腕はわしに敵わなかったが、  
それだけに卑怯な奴での。もしかしたら、今度の事もわしが伏せつ  
ておる時を見計らって弟子を送り込んだのかもしれない」

「なるほど……」

確かに、俺を含めた免許皆伝クラスの弟子がすべて出払い。さら  
に師匠も腰痛で寝たきりの時ならば、たいした腕でなくとも道場破  
りに来ておかしくは無いか。

だが、俺がちょうど帰ってきていたのが運の尽きだ。

俺がその果し合いに出れば問題ないだろう。

俺が師匠に「果し合いには俺が出ます！」と申し出ようとしたそ  
の時、

「言うておくが、おぬしに果し合いに出て貰おうなど、考えておら  
んぞ」

と師匠が先に口を開いた。

師匠に機先を制せられ、改めて師匠を見つめる俺に、師匠はさらに口を開いた。

「確かに、おぬしに任せればわしも安心じゃ。しかし、今この道場を守っておるのはお前の弟子であるあやつらじゃ。わしはあやつらを信用してやりたいんじゃない」

師匠……。

「申し訳ありません！ この六三郎。師匠のお心が分ならず、差し出がましいことを言うところで御座いました！」

俺は、畳に額をこすり付け師匠に頭を下げた。

「はっはっは。よいよい。それよりもその弟子達に稽古でもつけてやってくれんか」

「は！ かしこまりました！ それでは、早速稽古をつけて来ます」

「うむ。よろしく頼む。しかしあまりしごき過ぎるでないぞ。弟子をすべて叩きのめしてしまつては、さすがにお前に頼むしかなくなるのでな。はっはっは」

「ははっ！」

俺は師匠の部屋からでて、また道場へと向かった。  
さすがは師匠だ。

俺も師匠の様な心を持った立派な武士にならなくてはな……。

しかし道場へとたどりついた俺は我が目を疑った。

「なんか、俺達の兄弟子に手を出すとか難癖つけてきたんでやっちやいましたよ?」

弟子達はすべて伍助に叩きのめされ、道場の床に転がっていたのだった。

> i 2 3 3 0 6 — 2 9 7 6 <

俺は弟子達を介抱した後、師匠の部屋へと戻り畳に額をめり込ます様にして頭を下げた。

師匠は、弟子達が全滅したのは俺の所為ではなく、いとも簡単に叩きのめされたあやつらの日頃の鍛錬が足りんのじゃ。と言っはくれたが俺の連れである伍助がやったのだから、やはり俺にも責任があるだろう。

俺は、やはりここは俺が代わりに道場破りと戦うしか無いと思いだめたが、許せないのは伍助だ。

勝手に人に付いて来たばかりか、俺の弟子達を叩きのめすとは!

俺はそう思って伍助をただではおかん! と追い掛け回したが、なんと師匠が止めに入った。

「いやいや。客人に先にくってかかったのは弟子の方と聞いておる。その拳句叩きのめされたのならば自業自得と言つものじゃろ。」

師匠にそう言われては俺も何も言えない。

やむを得ず伍助には「二度とするな！」と釘を刺すだけが精一杯だった。

そして俺は今、道場で一人、型の稽古をしていた。

なにせ伍助が弟子をすべて倒してしまい、師匠も寝たきりなので練習相手すらろくに居ない。

だからと言って、伍助に相手させるのもなんか癪だしな。

相手の体のど真ん中、正中線を狙つての突き。

左右にぶれない完全なる真正面への攻撃に、相手は左右のどちらに避ければ良いのかと、一瞬反応が遅れる。

俺は、道場の壁に印をつけた板をかけ、その印に向かって竹刀で突きを繰り返した。

その稽古を繰り返す。稽古の積み重ねだけが、技の完成度を上げる。

ん？

稽古を続けていた俺は、道場の外に人の気配を感じた。

俺が振り返つて道場の入り口を見ると、妙齡の女性の姿が見えた。

「……おふみ」

そこには元カノのおふみが立っていた。

## 6：ナエマ（前書き）

今回はちょっとほのぼの。

六三郎とのデートシーンもあります。

## 6：ナエマ

「初めて知りましたわ。泥でキレイになれるなんて！」  
「ほんとにねえ」

温泉宿の女中たちは口々に驚きの声を上げた。

「泥と言ってもそのまま使わないで、いったん天日で乾かしてから油と丁子の粉を混ぜるといいのよ」

2〜3日前、部屋を担当してくれている仲居さんに、  
「お客さん、おきれいな上に肌ツヤツヤですねえ。うらやましい限りですわ。何か特別なお手入れされてるんですか？」

と聞かれたことがきっかけで泥パックを紹介してあげただけど、それが宿中で話題になったらしく、休憩時間には数人の女中相手に様々な美容法をレクチャーすることになったの。

ま、いいんだけどね。これと言ってすることもないし。

「お二人は美容のために温泉巡りをされていると伺ったんですけど、もうあちこち行かれたんですか？」

「え……。ま、まあね」

アムランでは毎日の入浴が日課だったけど、温泉はなかったのよね。

「どの温泉が一番良かったですか？」

「下野の温泉はとても気に入ったわ」

私にはっこりと笑って答えた。(他の温泉にはまだ行ってないのよ)

「そうなんですか。それは嬉しいですね。他にはどんな温泉に行きましたか?」

「そ……そうね。バラの花びらを浮かべたバラ風呂とか……。塩でマッサージするお風呂とか」

「へえ〜バラ風呂!」

女中たちは顔を見合わせて、しきりに感心しているようだった。

すると休憩時間もそろそろ終わりらしく、女将の怒鳴り声が聞こえてきた。

「お前たち、いつまでおしゃべりしているんですか! あんまりお客様さんの邪魔するんじゃないやありませんよ!」

「は〜〜い!」

女中たちは声をそろえて立ち上がった。

「七重様ありがとうございます。たのしゅうございましたわ」

「お礼に美味しいお菓子でも差し入れますね」

手には小分けした泥パックのサンプルをしっかりと持って女中たちは仕事に戻っていった。

「姫様、ジパングで化粧品の訪問販売でも始めるつもりですか?」  
女中たちとのやりとりを苦々しい顔で見っていたアニスが嫌味たっぷりと言った。

「あら? それもいいわね」

私は手のひらを打ち合わせて笑った。

「全ての女性は美しくありたいものなのよ。アラビアだろうとジパングだろうと変わりはないわ。私の使命はジパングの女性に美の手ほどきをすることだったのかも……」

「はつきり言ってそれは逃避ですね」

アニスは腕組みをしながら手厳しく言い放った。

「あのね」

きつとアニスを睨んだ。

「何が言いたいの？」

「姫様の本当の気持ちはどうなんです？」

腕を組みながらも、少しだけ口調を穏やかにしてアニスが尋ねた。

……私の、本当の気持ち？

私はアニスに背を向けて座り、障子を開けて裏庭に咲くあじさいの花を眺めた。

青だったり、ピンクだったり、紫だったり……、不思議な花ね。

私はどうしてここにいいのかしら？

私はどうしたいのかしら？

アムランに戻っても、一度六三郎の妻になった私はもう結婚できない。したくもない。

じゃあ六三郎のもとに戻る？

いいえ。彼を許せない限り、戻ることはできない。



できない。したくない。できない。したくない。こればかりで  
八方塞がり。

虹色の星は、箱の中でまだきらめいていたけど……、私にはその  
意味は読み取れないまま……。

「私には、姫様はまだ六三郎さんが諦められないように思えます」

「……………どうしてそう思うのよ？」

「そりゃあ……………」

アニスは苦笑いして答えた。

「寝言で六三郎さんの名前を呼ぶ姫様を見たら誰だってそう思いま  
す」

「っ！？」

寝…………寝言で、私があいつの名前を呼んだですって……！！

ぐっと言葉に詰まって、私は思わず両手の拳を握り締めた。

月明かりの中、夏草の青い匂いに包まれて私は彼に尋ねた。

「この先一生、私だけを愛すると誓う？」

六三郎は腕枕をしている左手で私を引き寄せて、私の目を見て言った。

「誓うよ。母上のかんざしにかけて」

そして、壊れやすいものに触れるように私の髪をそつと撫でた。

「……他の女を愛したことはある？」

ちよつと驚いて、困ったような顔をして六三郎は言った。

「……なくはない」

「……そう」

じゃあ私以外にもこんな風にしたのね……。

こんな風に抱きしめて、キスをして……髪に触れたりしたのね。

「でも、妻にしたいと思ったのは七重だけだ」

月が雲に隠れて、彼の表情が見えなくなった。

「私と他の女たちは何が違うの？」

「うーん……」

六三郎は唸ってしばらく黙り込んだ。

そんなに考えなきゃわかんない違いなの!?

「……上手く説明できないけど」

数十秒たってやっと口を開いた。

「全然違う」

「……………」

まったく説明になってないんですけど……。

沈黙から私の不満が伝わったのか、六三郎はまたちよつと考えて付け足した。

「俺はずつと剣の道一筋できたけど」

「そうなの？」

「うん。正直剣の腕で一番になることと、それで身を立てることしか考えてなかったな」

月を隠す雲が流れて、夜空を見上げる六三郎の少年のような顔が見えた。

ジパングの男性はみんなこうなのかしら？ 繻子のようになめらかな肌が月明かりに照らされる。

「いつかそういう俺をサポートしてくれるようないい妻が欲しいと思っただけど……………」

また私の方に顔を向けて目を細めた。

「今は逆なんだ」

「逆」

「うん。七重を幸せにするためにこの剣の腕を活かしたいと思ってる」

「……………」

「そういう風に思ったのは初めてだから」

「……………うん」

「七重と他の女とは全然違う」

……………イケメンのわりに不器用なのね。この人。そういうところが、可愛くていいのかも知れないけど。

アムランでは男は4人まで妻を持つことができたから、お母様亡き後、お父様も2人の妻を娶ったわ。

さすがにシャルルカン王子がマハネと私を2人妻にすることはなかったでしょうけど。

私はそういう結婚は嫌だったの！

私の夫は私だけのもの。

身も心もずっと私だけのものでいてくれないとダメなの。

それから数日旅をして、甲斐の国にたどり着いた私たちは、ここで大名に仕官しているという六三郎の兄弟子を訪ねたの。

「兄弟子、ってなあに？」

「俺と同じ道場の先輩だよ。昔一緒に修行してずいぶん稽古もつけてもらった」

「じゃあ六三郎より強いの？」

「俺の方が強いけどね」

六三郎はにやっと笑って言った。

仕官先のお屋敷を訪ねてみると、兄弟子の多兵衛さんは町道場を運営しているらしく、その日もお弟子の指導中だったみたい。

町道場の場所を聞いてみると、お屋敷のすぐ裏にあるとのこと、私たちはそのまま歩いて道場まで行くことにした。

道場は程無く見つかって、中を覗いてみると子供たち相手に剣の技を教えている多兵衛さんがいた。

「おお、六三郎か。久しいな？ 息災か？」

六三郎より5〜6歳は年上かしら？ 日焼けした精悍な顔立ちで、イケメンではなかったけどいかにも武道の達人っぽい感じ。

「お久しぶりです。多兵衛さんもお元気そうでなによりです」

挨拶を交わしてから、多兵衛さんの視線が私に向いた。

多兵衛さんは一瞬虚を衝かれたように黙ったが、すぐ我に返って尋ねた。

「そちらの女性は？」

「妻の七重です」

「……結婚したのか!？」

「はい」

六三郎は照れ笑いを浮かべて頭を掻いた。

「すごい美人の嫁さんじゃないか」

「ええ……まあ。かたじけない」

「とにかくめでたい」

多兵衛さんは六三郎と私を交互に見ながら笑った。

「積もる話もあるが今は仕事中でな。近所の茶屋でも待っていてくれないか？ なに、あと半時ほどで稽古も終わる。終わったら迎えに行くから休憩しておいてくれ」

と手を振って稽古に戻ったので、私たちは言われるままに近所の茶屋に行くことにした。

お店と言ってもベンチ？ のようなものを置いただけの簡単な造りで、座るとお茶と緑色の丸い食べ物が出された。

「これはなあに？」

「草だんごだ。美味しいよ」

恐る恐る齧ってみるともっちりとした食感でほのかに甘い。

「琉球にはだんごはないのか？」

「こんな食べ物はなかったわね」

「ふーん。どんな甘味があったのかな？」

「アーモンドとザクロと砂糖で作った甘いお菓子とか」

「なるほど。琉球はサトウキビが豊富にあると聞いたことがあるかな。で、アーモンドっていうのは？」

六三郎はずすとお茶をすすりながら聞いた。

「えーと、木の実の種よ。クルミみたいな」

「不思議な取り合わせだな」

「そうね。私にはこの草だんご？ が不思議だわ」

> i 2 3 4 7 8 | 2 9 7 6 <

お茶も緑色で不思議な香り。

アムランではミントの葉を浮かべた紅茶に砂糖を入れて飲んでいただけ、ジパングではお茶に砂糖を入れる習慣はないみたい。

ふと気がつくと六三郎がなんだか嬉しそうににこにこしている。

「どうしたの？ そんなにこのお菓子好きなの？」

もう一個食べる？ と私は自分の草だんごを差し出した。

「いやいや。そうじゃなくって」

六三郎は笑いながら首を振った。

「こんな風にのんびり女の子とお茶を飲んだことはなかったなーと思ってる」

「そうなの？」

「うん。俺が住んでるところも田舎だったし、周りにはほとんど男しかいなかったからなー」

「私はいつも城……家を抜け出して町に出かけてたわ」

時にはアニスをお供に連れて行くこともあったわね。

ナツメのお菓子やシャーベットを買い食いしたりした。

マハネに話すと、大人しいあの子にしては珍しく「王女にあるまじき振る舞い」と眉をひそめてたけど。

あれはやめられなかったわ〜。

「すごいな、七重は」



六三郎は目を丸くして言った。

六三郎は、自分には3人のお姉さんがいるんだけど、みんなほとんど外に出かけることも無く、自分が小さいうちにお嫁に行ったんだと話した。

それからは両親が他界し、2人のお兄さんたちとも別れて、常陸国の道場で師匠の息子同様に修業するようになったとも。

「だから女ってみんなほとんど家にいるもんだと思ってたな」

「うちもそうよ。姉はずっと城……家に閉じこもってたもの」

私はふたつめの草だんごにかぶりついた。

結構豪快な食べっぷりだったので、六三郎は可笑しそうに笑った。

「六三郎も、女はしとやかな方がいいと思ってるの？」

「いいや」

笑顔のまま首を振った。

「一緒に野宿して、平気で水浴びするような度胸のある女がいいな」

「……なっ!？」

「あ、でも危険なことはNGだぞ。またさらわれたら困るからな」

「だからあれは私ひとりでも逃げられたんだってば」

私は口をとがらせて六三郎を睨んだ。

「七重もガンコだなー」

私が本気になったらあなただってかなわないんだからね！

声には出さなかったけど、心の中で六三郎に舌を出しておいた。

私がふたつめの草だんごを食べ終わったところ、稽古を終えた多兵衛さんが迎えに来てくれて、3人で多兵衛さんの家に向かった。

多兵衛さんは独身の一人暮らしだったけど、結婚祝いだと言って心づくしの晚餐を用意してくれた。

いなり寿司という変わった料理や葉物でできたピクルスのようなもの、焼き魚などが机に並んだ。

それからお酒も少しふるまってくれた。

「多兵衛さんも早く奥さんもらいましょうよ〜」

どうやらお酒に強くないらしい六三郎はほんの一本飲んだだけで酔っ払ってしまったらしく、さかんに多兵衛さんに絡んでいた。

「女は面倒でいけない。俺が落ち着くのはもう少し先でもいいだろう」

女の私を目の前にしてずいぶん無神経な発言だけど、どうやら多兵衛さんも酔ってきているみたい。

「俺は剣の道一筋よ〜」

だんだんエスカレートしてきたのか徳利から直接お酒をぐびぐび飲みながら多兵衛さんが言った。

「あ、俺もそうだったんすけどね〜」

だめだわ……。六三郎、完全にろれつが回らなくなってる。

「嫁さんいるといいねすよ〜。あんなこともこんなこともできるし〜」

「なに言ってるんだお前は〜」

多兵衛さんの目が据わってきた。

……何？ ふたりとも下戸だって言うの???

「ぶつたるんどる〜！ 稽古つけてやる。来い〜」

突然多兵衛さんが立ち上がって玄關に向かった。

「おっ。のろむところだ〜」

六三郎も立ち上がってふらふらと玄關に向かって歩いていった。

「ちょ……、ふたりとも！ どこ行くのよ!？」

私も思わず立ち上がってふたりの後を追いかけた。

「心配すんな〜、ななえ〜」

六三郎が私の肩をつかんで家の中に押し戻した。

「ななえは留守番だ〜」

「大丈夫ですよ〜、奥さん。道場でひと勝負したら戻ってきますから〜」

多兵衛さんも右手をぶらぶらと振りながら言った。

「行ってくるな〜。にやにやえ〜」

ふらつきながら肩を組んで歩いていく男ふたりを複雑な心境で見送ったわ。

道場は近いから、そこまでたどり着けないということもなさそうだけど……。

あんな状態で木刀を持って怪我しないかしら???

私は六三郎が飲んでいたお酒を一口飲んでみた。

「あ、けっこう美味しいかも」

安心してぐびぐびぐびと飲んでみた。

「あ〜〜これ、いける〜〜」

と声に出したとたん急にくらつと目の前が回りだした。  
なにになに?? これ、けっこう強いお酒なわけ???  
体に力が入らなくなって、私はそのまま机の上に突っ伏した。

「……………ちよつとだけ……………。きゆうけい〜〜」  
意識が薄れて、どれくらい眠ってしまったのだろうか?  
目が覚めたときは外が真っ暗になっていて、ふたりが戻ってきていないことに気づいた。

さすがに心配になってきて、私は道場まで様子を見に行くことにした。

泥棒や追いはぎにあわないように家の周囲と道に人除けの結界を張る。

これでみんなこの道を迂回して通ることになる。

道場の前まで行くと、中からうつすら灯りが洩れているのが見えた。

あのふたり、あの状態で本当に稽古してるの???

私は道場の引き戸を開けた。

わが目を疑うような光景が目の前に広がっていた。

六三郎が……多兵衛さんに覆いかぶさるようにして激しいキスを交わしていたのだ!!

アンビリーバブル!!!!!!

「……ということがあったわけよ」

一気に話して喉が渴いた私は、用意されていたお茶を一息に飲み干し、ついでに側にあっただお茶菓子を手を伸ばした。

「な、なるほど……ですね」

アニスはなんとも言えない顔をして、また少し考え込んだ。

「あいつホモの気があったのよ。そもそもなんか怪しいと思ってたのよね」

お茶菓子をひとつ口に放り込んだ。

「まあ……」

「2、3日前も水晶玉で様子を見てみたら、別の男といちゃついていたのよ」

もつひとつお茶菓子を口に入れた。

「うーーん」

「女は私だけでも、男なら何人でもいけるってわけ？ なめんじゃ  
ないわよ」

3つ目のお茶菓子にかぶりついて一気に飲み込んだ。

「……太りますよ。 姫様」

呆れたような目をしてアニスは言った。

「今日だけよ」

私はお茶でお菓子を喉の奥に流し込んで、ふうーっと息を吐いた。

「それに、私がかけた呪いが発動して、六三郎は女になっちゃって  
るしね」

「ええっ！」

アニスは卓袱台テーブルを叩いて、身を乗り出した。

「なんでそんな呪いをかけたんですか、 姫様！？」

「六三郎の浮気封じのつもりだったのよ」

アニスは苦々しい表情で私を見た。

「……わかってるわよ。 結果的には男好きの六三郎の後押しちゃっ  
てるってことは」

「いえ、そういうことではなくって」

「なによ？」

「万が一それが全部姫様の勘違いだったらどうするんですか？」

「現行犯逮捕なの？」

「聞けば姫様酔っ払ってたんでしょ？」

ま……確かに、家を出る前はちょっと酔って眠りこけちゃったけど。

「ふたりを見たときはもう酔いが醒めてたのよ」

「自分の寝起きがどれだけ悪いかわかってますか？」

「大丈夫よ。レム睡眠だったから」

「は？ 意味不明です。とにかく」

アニスは私の目をきつと見つめて言った。

「直接六三郎さんに確認してきてください。今後の身の振り方はそれから考えましょう」

## 7：六三郎

> i 2 3 5 7 4 — 2 9 7 6 <

「…………六三郎さん。帰ってきていたならどうして言ってくれなかったの？」

道場の入り口で、おふみは少し悲しげに俺を見つめていた。

おふみとは彼女からの強烈なアプローチで付き合い始めたのだが、俺が稽古に明け暮れあまり彼女にかまってやれなくなった為自然と疎遠になり、俺が仕官を求めて故郷を出る頃には自然消滅していた。

「……………すまん。まず先に師匠に挨拶をと思って道場に立ち寄ったら、色々と騒動が起こってな……………」

「そう……………。でも、久しぶりに故郷に戻ってきたんだから、挨拶に来ないなんてひどくないかしら？」

う！ 普通は、元カノに挨拶に行くものなのか？

おふみにしたって別れた元カレになんて、会いたくないと思っ  
ていると、考えてたんだが……………。

だが、俺が反応に困っていると、彼女は俺が申し訳なくて押し黙  
ったのだと解釈したのか、少し苦笑気味に笑った。

「仕方ないわね……………。六三郎さんは前からずっと剣一筋だったから  
……………」



「すまん……」

「聞いたんだけど、道場破りと戦うことになったんですって？」

「ああ。そうだけど、そんな話どこで聞いたんだ？」

「どこって……。村中その話でもちきりよ？ だって小さいなにもない村だもの。何か変わったことがあれば、すぐに広まっちゃうわ」

あきれた様な口調で言うおふみは、どこか投げやりな雰囲気を感じられた。

確かにここは小さい村だ。

住んでいる者達も、代わり映えのない毎日と少しでも違う事が起これば、瞬く間にその噂が村中を駆け巡る。

「そう言えばそうだったな……」

「ええ。息が詰まりそう」

おふみの言葉に俺は改めておふみを見つめたが、おふみは俺の視線に気付いたのか誤魔化す様に、少しわざとらしく明るい口調で口を開いた。

「とにかく、久しぶりに六三郎さんと会えてうれしかったわ！ じゃあ、稽古の邪魔をしちゃ悪いから、もう行くわね」

「いや、わざわざ会いに来てくれてありがとう」

「ううん。じゃあ、またね！」

おふみはそう言って手を振り道場を後にした。

またね。か……。

俺は頭を一振りすると、また稽古を始めた。

そして道場破りとの決戦の日。

俺は、道場破りと対峙し、ふたりの間に緊張が走る。

見守る弟弟子達は固唾をのみ息すら止めているかの様に道場は静まり返っている。

俺は、気を張りつめ僅かな隙も見せまいとするが、道場破りも同じくこちらの間を窺う。

僅かな気の緩みが命取りとなり、その瞬間に敵の切っ先が俺の体を貫くだろう……。

となるはずが、

なんだこりゃ？

「こつちこつち！　ここだと良く見えるわよ！」

「兄ちゃん達！　まだ始めないでくれよ。　まだ連れが来てないんだ！」

「六さん。相変わらずペツピンだな」

「道場破りの子も、ワイルドでカッコいいじゃない」

「……おい。これはどう言うことだ？」

俺は堪えかねて口を開くと、俺の前ににやつきながら立っている道場破りが「ククッ」と笑いを漏らした。

「お前らが、卑怯にも俺を袋叩きにしておいて、1対1で勝つたなどと言い出さぬ様に保険をかけたまでさ」

そうか……。

これを狙ってわざわざ道場破りの予告なんてしたって訳か。

小さな村のことだ。

道場破りが来るともなればみんな見物に来る。

見物人が大勢居れば、こちらが袋叩きにしたくとも出来ないだろうって訳だな。

もちろん、はじめからそんなつもりは無かったが、なかなか油断ならない奴だな。

しかも、こいつの師匠は戦で手柄を立てられず、俺の師匠が手柄を立てたのを逆恨みする程度の男と聞いていたので、その弟子という道場破りも大したことはないと思っていたが……。

佇まいや雰囲気からは、意外にもかなり腕が立ちそうぞ。

道場破りは、ザンバラ髪に着物を着崩しているが、その機崩した着物の襟から着込み（鎖帷子）が見えている。

俺と同じ様に着込みを着ているのか……。

しかもこいつの師匠は俺の師匠と同じ合戦に出ていたんだ。

こいつの剣術も突きを主体とした実践剣術って訳なんだよな。

共に突きを主体として戦うというならリーチの差がかなり重要となるのだが……。

でかいな……。

弟子との身長差から推測すると、俺が男だった頃よりも少し大きいぐらい。

つまり、女の体になって背が縮んでいる今リーチの差はさらに広がっているだろう。

しかも俺は女になり体が小さくなった為、自分の間合いの目算が狂っている。

それに気付いて昼夜猛稽古をしたが、数日で長年の感覚を矯正できたと言いがたい。

これは存外、苦戦するかもしれないな。

俺は、改めて道場破りを睨んだ。

だが、俺が真剣にそう考えていると、俺達を取り囲む見物人の輪からとんでもない声が聞こえてきた。

「どつちに賭けるんだい？」

「やっぱり、ペツピンさんの方だろう。同郷のよしみもあるし」

「いやいや。道場破りのあんちゃんも強そうだぞ。いっちょようあんちゃんの方に賭けてみるか！」

おいおい。賭けまで始まるのかよ！　　と俺が考えていると……。

「兄弟子が勝つに決まってるだろ！　兄弟子に全部だ！」

おいお前ら……。そしてさらに。

「じゃあ、俺は俺が勝つほうに全財産だ」

道場破りはそう言って、賭けの元締めらしき男……って伍助じゃないか！　に自分の財布を放り投げた。

こいつ等、馬鹿にしゃがって……。

「ぶざけるのもいい加減にしろ！ とつとと始めるぞ！」

「へいへい」

道場破りは俺の怒号に、飄々と答えて、木刀を構えた。

道場破りが構えたのにあわせ俺も構える。

俺の全神経は奴に集中し、さっきまでうるさかった見物人達の声が、嘘の様に耳から消える。

正眼の構え。

つまり木刀を自分の腰の辺りで握り切っ先を俺の喉元に向けるといふ、攻防どちらにも対応できる基本的な構えだ。

取りあえずこちらの様子を見る気だな。

俺はそれに対して脇に木刀を構えている。

防御には向かないが、この構えの利点は自分の腕と木刀を前に突き出す正眼の構えと違い、こちらの間合いが相手に悟られ難い事にある。

さつき対峙していた時も何気に木刀の端を5寸（約15cm）ほど着物の袖で隠し、俺が手にしている木刀が通常の物よりその5寸長い物である事を誤魔化していたのだ。

これで俺の間合いは道場破りとの間合いより2寸ほど広いはずだが、道場破りが俺の身長から俺の間合いを推測しているとすれば、その2寸が勝負を分ける。

だが、その誤魔化しも一度きり。

一度俺が突きに行けばそれでこちらの間合いはばれる。

俺はじわりじわりと、道場破りへとの間合いを詰めて行った。

道場破りはまだ間合いの外だからと思っっているのか、相変わらず飄々とした表情でまったく感情が読めない。

俺はさらにもじり寄る。

俺の間合いまで後、5寸。

4寸。

3寸。

あと少し！

だが唐突に道場破りが動く！ 奴の木刀が俺の体目掛けて伸びてきた。

「つく！」

俺は反射的に身を左に捻りその攻撃をかわす。

……片手突きかよ。

奴は右手正眼の構えから左手を放し、体を捻りながら右手だけで突いてきたのだ。

当然、体を捻る分間合いは広がる。

だが、体を捻りながらの突きは僅かながら俺の体の正中線からぶれ、その為俺は反射的にかわす事が出来た。

これが正中線に決まっていれば俺は動くことすら出来ず、棒立ちのままやつの突きを食らっていただろう。

もっとも、片手突きで寸分ぶらさず狙い打てる奴など、この日本ひのくにに何人居ることやら……。

しかし、これで俺の間合いの優位は失われた。  
とはいえ、当然片手では威力は落ちる。

二刀流が邪道と言われるのは、片手では肉は切れても骨は断てないと考えられているからだ。

それは突きでも同じこと、いくら鎧武者には突きが有効とはいえ、片手突きでは鎧を突き破るのは難しい。

最近よく噂になっている宮本某という二刀流の剣豪がいるが、その剣豪は人並みはずれた膂力《怪力》を持っていると聞いている。

俺は足を後ろに運び、奴から間合いを取った。

そして、首元の汗を拭うふりをして、俺も着込みを着ていることを何気に道場破りに見せ付けた。

すると飄々としていた道場破りが破顔した。

「あっははは！ あんた面白いな。そおいやー。まだ名前も名乗っていないかったな。新九郎って言うんだ」

「……六三郎だ」

「へー。六三郎って言うんだ」

道場破り……新九郎はそう言うと、正眼の構えではなくあからさまに木刀を右手だけで持ち、そして右手を大きく後ろに引いた。

右の片手突きをしますよ。って言うところか？ いや、右手一本で着込みを突き破りますよって言いたいのか。

ふー。結構やばい戦いになりそうだな。

俺は、再度奴との間合いを詰めに入った。

だが俺が奴の間合いに入る前に、やつの方から一步踏み込み間合いを詰めてきた。

奴の片手突きが俺を襲う。

俺はすんでのところでその突きをかわした。

そして一旦間合いを取ってから再度、間合いを詰める。

そして再度の奴からの突き。それも身をかわす。

俺は神経を集中させ、何度も奴の突きをかわした。

そして次第に、飄々としていた新九郎の表情が険しくなっていく。何度やつても突きが俺に当たらない事にイラついてきているのだ。

それに対して俺はにやりと笑って見せた。

実は、俺の背中は冷や汗でびっしょりと濡れていたのだが、あえて余裕がある演技をした。

そう、突きが届くという事と当たるといふ事は別なんだよ。当てなければもつと踏み込め。と挑発したのだ。

俺は改めて奴との間合いを詰め始めた。

俺の間合いまであと5寸。4寸。

そして3寸。ここが奴の間合いのはずだ。

だが新九郎は動かない。

2寸。

1寸。

……俺の間合いに入った。

だが俺もまだ仕掛けない。



さらに1寸近づくと。

もう1寸近づくと。

後1寸。

1寸。

そしてさらに俺が間合いを詰めようとしたその瞬間！ やつの右手が動いた。

俺は、身を振りかわそうとしたが、奴の木刀は俺のわき腹を貫く。だが俺の木刀も奴の胸部を突いていた。

時が止まったかのように俺と奴はお互いの体に木刀を突きつけたまま対峙していたが、不意に奴が倒れる。

奴はよっぽどこつい着込みを着ていたようで、女になった俺の力では奴の着込みを貫くことは出来なかつたが、それでも奴の胸骨にひびを入れさせる事ぐらいは出来たようだ。

そして奴の木刀は俺の着込みを見事に貫いていた。俺の体に巻いた大量のサラシと共に。

男の体のままだったら相打ちだったか？ いや、男の体だったらまた違う戦い方になっていた。考えても仕方がないか。

しかし紙一重だった。奴が仕掛けるタイミングは読んでいたにも拘らず、それでも脇腹を貫かれるとは……。

そう俺は、奴がああタイミングで仕掛けてくると読んでいた。

俺は木刀の長さを5寸誤魔化していた。奴は俺の間合いまで後1寸あると思っていたはずだ。

いくら自分の間合いよりもっと踏み込む必要があると言っても、俺の間合いに入るまで踏み込む必要はない。俺の間合いのギリギリ外で仕掛ければいい。

それでダメだったらその時には、俺の間合いにまで踏み込めばよいのであって、はじめから冒険をする必要はないのだ。

そして勝ったと思って気が緩んだ瞬間、俺の耳に大歓声が聞こえてきた。奴に集中していた神経が解放されたのだ。

「やったなベツピンの兄ちゃん！」

「あんたに賭けてよかったよ！」

「なんで、腹から木刀を生やしてて平気なんだい!？」

もうちょっと、感動的な声援を贈ってもらえないものかな……。俺が不満げに見物人達を見回していると、不意に女性の声が聞こえた。

「六三郎さん！ 素敵よ！」

お！ そうそうこう言う称賛を。と俺が声のする方向を見ると……。

おふみ……。

そこには俺に向かって手を振るおふみの姿があった。

だが笑顔を贈ってくるおふみにどう返そうかと戸惑っていると、弟子達が俺に抱きついてきた。

「兄弟子！ やりましたね！」

「あいつの木刀が刺さってますが大丈夫なのですか？」

「ああ。大丈夫だ。ギリギリ着込みだけ貫かれただけだからな」

「ギリギリっつていう感じではなさそうですが……」  
俺の言葉に、弟子達は怪訝そうに首を傾げながらそう言った。  
実際俺の胸はサラシを何重にもまいてかなり太さを水増ししている。  
奴の木刀はそのサラシを貫いてるのだが、はたから見れば思いつ  
きり俺の腹部を貫通している様に見えるのだろう。

「だっ大丈夫だ！ それよりも師匠に報告してくる！」

俺はそう言うと、脇に刺さった木刀を抜いて逃げるように道場を  
後にした。

そして師匠の部屋へと向かったが、足早に歩いているうちに木刀  
に貫かれたサラシがほどけてきてしまった為、途中にある空いてい  
る部屋へと滑り込んだ。

改めてサラシを巻きなおす為だ。

着込みを脱いで、一旦サラシを全部とって……。結構面倒なん  
だよな。

っち！ あいつに貫かれた所為で、サラシが途中で切れちゃって  
いる。

俺は上半身裸のまま、切れたサラシを結び合わせて改めて一本に  
していた。

「おお。六三郎ここに居たか！ 見事道場破りをやっつけたらしい  
な！」

不意に師匠がふすまを開け、飛び込んできた。腰痛はどうなった  
んだ？

だが今はそんな事より、師匠に俺が女の身体だとばれた事だ。

師匠はしばらく呆然と俺を見つめていたが、ポツリと呟いた。

「いつの間に、そんなにええ乳になったんじゃ」

「いえ。こっこれは……」

「旦那がそんなええ乳では、嫁も逃げるじゃろうな……」

「……」

その後、さらに弟弟子達もやってきて大騒ぎになった。

「俺は両方行けます！」

「俺は兄弟子が女でも気にしません！」

「姉さん女房は、金の草鞋を履いても探せといいますし！」

「馬鹿野郎！ お前らは男でも良いんだろが！ 女の兄弟子は俺に譲って、お前らは違う男の兄弟子を探せ！」

おいお前ら……。伍助……。

仕方がないので、俺は師匠および弟弟子達に、いきさつを洗いざら喋ると、師匠は、さすがに驚いていたが、実際俺の身体が女になっっている以上信じるしかない。

道場破りを倒したさっきまでの浮かれた気分も吹き飛んでしまい、みなあまりの事に押し黙っている。

「とにかく、今日はもう疲れたであろう。わしも少し混乱しておる。みなも今日はもう休みなさい」

師匠は俺たちにそう言い、俺達も素直に下がった。

実際、道場破りとの戦いは長い時間ではなかったが、全神経を集中させ身体にも緊張が張りつめていた結果、俺の身体は泥の様に重くすぐに眠りに付いた。

俺は七重の夢を見ていた。

おお、七重！ 探したぞ！ 会いたかった！

「六三郎！ 私も会いたかったわ！」

どこに行ってたんだ？

「それが、悪い魔物に連れさらわれていたの……。でも、隙をついて逃げ出してきたわ」

そうか。それはよかった。

「六三郎の身体が女になったのもその魔物の所為だったんだけど、私はその魔法も解いておいたわ」

俺が自分の体を見下ろすと何故か着物を身に着けておらず、俺の首から下には男の身体が見て取れた。

おお、男に戻っている！

そして顔を上げて改めて七重を見ると……。七重も着物を身に着けておらず裸だった。

……。七重。

「……六三郎」

俺達は強く抱き合った。

久しぶりのやわらかい七重の身体を抱いて……。硬い？

俺は怪訝に思ったが、七重はかまわず俺の首筋に吸い付いてきた。

あれ？ 七重ってこんなに積極的だったか？

そして七重が俺の名を呟く。

「お六……」

お六？

「誰がお六だ！！」

俺が目を覚まし叫ぶと、目の前には果たして伍助がいた。

「いやー。今日は疲れてぐっすりと寝ているかなー。っと」

伍助はそう言いながら、俺の身体の上で頭を掻いている。

「てめー。伍助！」

俺は伍助を突き飛ばして転がりながら自分の刀を置いてあるところまで移動すると、刀を手を取った。

「いやー。そこまでマジにならんでも」

「うるさい！」

実際、伍助が俺の事を「お六」なんて呼んでなければ、今日のはやばかったんだぞ……。

「兄弟子！今の叫び声はいかがしたのですか！？」  
ふすまを勢いよく開けた弟弟子達が部屋に雪崩れ込んできた。

「お前！俺達を差し置いて何やってんだ！」

「うるせえ！早いもん勝ちなんだよ！」

「なんだと！あ。兄弟子！」

「うわ！」

不意を付かれた俺は一瞬反応が遅れたが、すんでのところで身をかわした。

なんと、伍助の言葉を真に受けたのか、弟弟子の一人が、じゃあ俺が一番に！とでも言うのか、俺に飛び掛ってきたのだ。

「お前らしい度胸じゃねえか！まとめてかかってこいや！」

俺が伍助と弟弟子達に叫ぶと、奴らは俺に飛び掛ってきた。

俺は飛び掛ってくる奴らを鞘に収めたままの刀で迎撃する。

そして夜はさらに更けていった。

## 8：ナエマ

ピスミラー。

彼が情欲を持って私以外の者に触れるとき、彼の肉体を女と変化せしめん。

私は彼の心臓が脈打つ左胸にくちづけて唱えた。

これで六三郎は私以外の女を愛することはできない。

「……それにしても、六三郎にホモの気があつたとは誤算だったわね」

夜明け前の空を絨毯で飛行しながら私は呟いた。

もうすぐ夜の闇がラピスラズリの色彩に変わり、やがて日が昇るとき世界はしばらく白く柔らかな光に包まれる。

私が一番好きな時間。

アムランにいるときも、こっそり城を抜け出して朝の空気を楽しんでたわね。

残念ながら、今絨毯で飛んでいられるのは夜が明けるまでだけ。

「直接六三郎さんに確認してきてください」

とアニスに言われて、仕方なく六三郎に会いに行くことになった私。

そんなこと言われたって、既に魔法が発動してるんだから、それが何よりの証拠じゃない？

……だけど、もし何かの間違いだったら？



(だけど、六三郎は多兵衛さんにしつかりしがみついてキスしてたの?)

……だけど、酔っ払ってた私の見間違いだったら?

(だけど、水晶で見たときも別の男といちゃついてたわよね?)

う~~~~ん。考えるほど混乱してきたわ。

「七重を幸せにするためにこの剣の腕を活かしたいと思ってる」

「そういう風に思ったのは初めてだから」

と言った、あの夜の彼の言葉を信じたいけど……。

私は六三郎の道場があると思われる村の少し手前の人気の無い森に降り立った。

どうやら私の姿はジパングではかなり人目を引くことがわかっていたので、地味な村娘に見えるように魔法で変装することにした。

こういうときは美人過ぎるのも苦労するわね。

村に向かってしばらく歩くと、早朝から野良仕事に出てきたらし  
いおじさんに出会った。

あ、あの人に聞いてみようつと。

「すみません。少し尋ねたいのですが……」

「おじょうちゃん見ない顔だね。何の用だい?」

小さな村にはよそ者というだけで珍しいのか、おじさんは上から下までジロジロと私を見ながら言った。

これでも、ずいぶん地味に変身したんだけど……。

「六三郎という人がいる道場を教えてくださいたいんです」

「六三郎っていうと、あのべっぴんのお兄ちゃんかい？」  
べっぴんのお兄ちゃん……。確かに。

「はい。そうだと思います」

「その道場ならこの田んぼの一本道を歩いて右側にある丘の上の神社の裏にあるよ」

「ありがとうございます」

お礼を言っ立ち去ろうとすると

「しかし、あんたもちよごいいときに来たね」

とおじさんは頷きながら笑った。

「え？」

「今日はその六さんと道場破りの果し合いがあるんだよ」

「ええっ!？」

果し合い!？

「な、なんの果し合いですか？」

「そりや道場の看板をかけての果し合いだろうなあ」

何を当たり前のことを聞いているんだとばかりにおじさんは苦笑いをして答えた。

「六三郎が……。いえ、六三郎さんが戦うのですか？」

「そう聞いているよ。なんせあの道場の一番弟子は六さんだからねえ」

そんなことになっていたなんて知らなかったわ。

ここ2、3日、六三郎のことは考えまいとして水晶も見ていなかったものね。

「ところで、あんたよく見るとべっぴんさんだねえ。六さんとはど

ういう関係なんだい？」

話しているうちに私の美貌に気づいたらしく、にわか私と六三郎の関係に興味を持ったらしいおじさんが尋ねてきた。

う〜ん。ここで「妻です」というのもなんだしね。

……第一、彼女が女になった今、そして他の男と関係を持った今、妻でいるのかどうかも疑問だしね……。

「旅の途中に危ないところを助けてもらっただんです」

「ほおお〜。そうなのかい。で、いったいどんな危ない目に？」

興味津々という風に目を輝かせておじさんが迫ってきた。

……まずい。面倒なことになってきたわよ。

「めんどくさいので、私のことは忘れてしまいなさい！」

おじさんの目の前で両手を打ち鳴らし、おじさんが呆然と意識を喪失しているあいだにそそくさとその場を立ち去った。

きつとこういうことはすぐ村中の噂になったりするんだわ。

後々のことを考えても私の痕跡は残さない方が良さそうね。

しばらく歩くと右手に小さな神社が見えてきて、その裏にまわると古びた道場が建っていた。

ここが六三郎の道場ね……。

多兵衛さんの道場と比べると大きいけど、老朽化が進んでいて今にも倒れそうだわ……。

近づいていくと、神社と道場の間に小さな雑木林があつて、そこで一心に素振りをしている剣士がいるのに気づいた。

……六三郎。

稽古に集中しているのだろう。遠くにいる私の気配までは気づかない。

ずいぶんと……小さくなったのね。

もともと細身だったけど、男性にしては華奢としか言いようがない（女性なんだからしょうがないけど）。

こんな体で勝てるの？

六三郎は敵を倒すことだけを考えていて、彼の心の中はそのことについてはいなんだということがその横顔からわかった。

彼の心の中は私以外のものでいっぱいだわ……。今日だけじゃなく、きつと、いつも。

私の事だけで六三郎の中をいっぱいになればいいのに……。

六三郎と話すのは果し合いとやらが終わってからにしよう。

今、私たちの話を持ち出して六三郎の心をかき乱すべきじゃないし、私も姿を隠しておいた方がいいわね。

私は魔法で姿を少年に変え、六三郎に自分の存在を気取られぬようにしてその場を立ち去った。

日が高くなつてくるとたくさんの村人たちが集まつてきて、にわかには賑やかになった。

まあ、田舎の小さな村だし、これといった娯楽もなさそうだし、村でよそ者との決闘があるとなればみんな見物に来るわよね。

ゴザを敷いてすつかり観戦モードな人たちもいるし、なんだか場違いにおしゃれした村娘たちのグループもいる。

……もしかして、六三郎ファンの女の子たち?????

「やっぱりイケメンよね。六三郎さん」

「昨日会いに行つたんでしょ？ おふみ」

「会いに行つた」という言葉に反応し、私はおふみと呼ばれた村娘を目で追つた。

「うん。ちょっとだけだけどね」

髪を結び上げて赤い櫛を挿したなかなかの美人だ。

たとえば言うなら「野に咲く一輪の花のような」感じ。

「何話したのよ？」

「挨拶程度よ。彼は稽古中だったし」

稽古中にわざわざ会いに行つて話すなんてどういう関係よ？

「久々の再会よね？ 彼なんて言つてたの？」

「別に……。会いに来てくれてありがとうつて」

おふみは肩をすくめた。

「焼けぼっくいに火がつくことはないの？」

隣に立っていた娘がおどけて言った。

「焼けぼっくいに？」

「わからないわね。彼、今は今日の試合のことで頭がいっぱいみたいだし」

気のせいかしら？ 彼女はやけに熱っぽい目で六三郎を見つめている気がする。

「よりを戻したとしても前みたいにならずとほつたらかきにされてたんじゃない淋しいしね」

よりを戻す???

つまりこういうこと？

おふみって人は六三郎の元恋人だった。

で、再会した今復活愛を狙っているというわけ？

ああ、この人が六三郎が元愛した人なんだわ……と思うと複雑な気持ちだけど、今の六三郎の体のことを思うとなんとなく笑いが込み上げてきそうでもある。

しかも、六三郎の同性愛嗜好をこの人知ってるのかしら？（ま

あ、これは保留なんだけどね）

そうこうしているうちに六三郎の対戦相手らしき男性が現れた。

筋骨逞しい、多兵衛さんと同じタイプのいかにも剣豪っぽい大柄な男性だ。

美形でもハンサムでもないけど、不敵な笑みを浮かべたその顔は不思議に少年っぽくて魅力を感じさせた。

大きいやんちゃ坊主みたいね。乱暴だけど、女性にモテそうなタイプ。

「おお、いかにも強そうな兄ちゃんだな」

「六さん、負けんなよ！」

六三郎は対戦相手の男と何か二言三言交わし、慚然とした表情で口をつぐんだ。

何かを考え込んでいるように見える。

……大丈夫？

私は自分の頭の中を探るように思考した。

六三郎が負けるといふ兆候は感じない。

私の直感を信じるならこの勝負は六三郎の勝ちだろう。

ただ、六三郎はハンデを背負っている。

私がかけた呪いのせいで、体力的には男のときと同じ……という訳にはいかないはずだわ。

無傷で勝つのは難しいかも知れない……。

魔法で……六三郎を助けることは、できればしたくない。

真剣勝負なんだから、私が出る幕じゃないもの。

でも……もう、怪我だけはして欲しくない。

初めて彼に抱かれた日、きれいな肌にいくつもの傷跡があった。痛そうで、可哀想で、私の胸が痛くなった。

「平気だよ」と六三郎は笑っていたけれど……。

「兄ちゃんも一口どうだい？」

考えていると、ふいに男の声が耳元で聞こえた。  
振り向くと……

「あ！」

「ん？ どうした？ ギャンブルには興味ないかい？」

にやにや笑いながら立っているこの男は……。

あの、水晶玉に映っていた六三郎の愛人！？

「ギャンブル？」

「地元のアイドル六三郎が勝つか、挑戦者の道場破りが勝つか」

……この男。自分の恋人を金儲けの道具にしてるの？

呆れてしまったけど、情報がもらえるかも知れないと思って聞いてみた。

「……オッズはどうなってるんだい？」

「お。いい質問だね。今のところ六三郎1・5倍。道場破り2・3倍だよ」

なるほど。みんな六三郎が圧勝だとは思ってないみたいね。

「何やってんだ！ 伍助！」

六三郎が男をぎろりと男を睨んだ。

伍助と呼ばれた男は「てへへ」とでもいうように頭を掻いた。

ふーん。伍助っていうのね。この人。

私は銀貨を一枚投げた。

「六三郎に一口」

「まいど」

伍助はにやりと笑って銭貨を受け取った。

私に背を向けて別の客を捕まえようとした伍助を追いかけるように質問を投げた。



「あんたさ」

伍助は振り向いて首を傾げた。

「なんだい？」

「六三郎とやらとどういう関係？」

「おっ。ばれちまったかい？」

笑いながら伍助は親指を立てた。

「コレだよ。コレ」

「……なんだ？ コレって？」

私は同じように親指を立てて顔をしかめた。（アムランにはこんなゼスチャーはなかったのよね〜）

「コレと言ったら決まってるでしょーが!？」

伍助は呆れて肩を落とした。

「彼氏だよ」

「ほんとに？ 男同士で？」

わざとちよつと驚いてみせた。

するとまたにやつと笑って伍助は言った。

「兄ちゃんにはそう見えるんだろうな」

「どういう意味？」

「これ以上は俺の口からは言えねえな」

伍助はひらひらと手を振りながら、「じゃな」と言って去っていった。

つまり六三郎が女だと、あの男は知ってるのね。

まあ、どう考えてもその方がノーマルなだけだ。

はつきり「彼氏」だと言われたのに、なんだかまだ釈然としないものが残っている。

きっと六三郎本人に確認してないからなのね。  
試合が終わったなら……きちんと確かめて、何もかもすっきりしよう。

それからしばらくして、

「とつとと始めるぞ！」

という六三郎の怒鳴り声が出て、場内はしーんと静まり返った。

いよいよ始まるのね。

私も観客も固唾を飲んで六三郎と挑戦者を見守った。

ふたりは睨み合い、しつかりと木刀を構える。

向かい合うふたりを見ると。改めて体格の差がわかる。

身長は、10cmは違うだろう。

体重は……20kgぐらいは違うかも知れない……。

この差が、きっとそのまま力の差になるのね。

じれったいほどにゆっくりとふたりの距離が縮まっていく。

ふいに挑戦者の方からの先制攻撃。

片手で軽々と木刀を持って六三郎の胸を突こうとする。

あっという間のすばやい動き。

私は思わず自分の胸元を手で押さえた。

きわどいところで六三郎はひらりと攻撃をかわした。  
そして挑戦者から距離をとると首筋の汗をぬぐった。

場内のあちこちから安堵と感嘆のため息が洩れる。

挑戦者は余裕綽々といった様子で笑いながらなにやら六三郎に話しかけている。

表情を変えずに答える六三郎。

そして、六三郎は再び挑戦者になじり寄る。

六三郎の方から仕掛けていくように見えたそのとき、またしても挑戦者の突きが六三郎を襲った。

また、それを危うくかわす。

それからの攻撃は全て挑戦者からの突きで、六三郎はそれらをかわすので精一杯のように見えた。

> i 2 3 7 1 4 — 2 9 7 6 <

けれども、徐々にふたりの表情が変わってきているのに気づいた。

六三郎は相手を挑発するように薄笑いを浮かべている。「突けるもんなら突いてみな」と言っているかのようだ。

対して当てが外れた挑戦者の表情には焦りが見えてきている。

胸が……ときどきする。

魔法のような六三郎の動きから目が離せない。

再びふたりは木刀を構え向かい合った。

少しずつ挑戦者に近づいていく六三郎。

今度こそ……六三郎からの攻撃？

あっと思った瞬間に六三郎の木刀がすばやく相手の胸を突いていた。

表現しようのない鈍い音が響く。

場内からわあっと歓声が上がって、「決まった！」と思ったけれど、相手の木刀も六三郎の脇腹を貫いていた。

……六三郎！！

思わず駆け寄りそうになる。

でも、次の瞬間に崩れ落ちたのは挑戦者の方だった。

拍手喝采に包まれながら、六三郎ははっと我に返ったようだった。

ん？？？ 体に……木刀が刺さっているのに平然としてる？？？

「六三郎さん、素敵よ！」という黄色い声がして、声の主を見るとおふみというさっきの村娘が手を振りながら笑っていた。

六三郎はおふみを振り返りながらなんともいえない複雑な表情をしている。

どう反応するのだろうと思っているうちに、道着を来た少年たちがわらわらと六三郎を取り囲んでいった。

怪我はないの？ 大丈夫なの？

なんとか近づいて確認できないかと思っていると、六三郎が体に刺さった木刀を抜いて床に投げ捨てた。

そして、そのまま人々を掻き分けてだーっと道場から走り去っていった。

……破れたキモノから白い包帯のような布がはみ出てたような……  
……???

チャンス！ とばかりに六三郎の後を追おうと出口へ向かって足を踏み出したけど、がしつと男の腕に肩を掴まれた。

「兄ちゃんおめでとう。これあなたの配当な。手数料として1割はもらっといたぜ」

伍助が笑みを浮かべながら何枚かの硬貨を差し出していた。

「あなたの……コレ、大丈夫なのか？ 木刀刺さってたみたいだけど」

私は硬貨を受け取り、親指を立てながら聞いた。

「いやいや。コレは俺。あれはコレ」

伍助は親指を立ててその先を自分に向けるように振り、次に小指を立てて見せた。

「コレ？」

今度は小指かいつ！

「コレは「彼女」って意味。兄ちゃんおぼこいねえ」  
まいったなーというように伍助は苦笑した。

「それはどうでもいいんだけど……。あの人、大丈夫なのか？」  
「うんうん。大丈夫。お六さんは着物の下に鎖帷子着てる上に、更にその下にサラシぐるぐる巻きにしてるから。見たところじゃあ、何枚かのサラシめくったくらいだな、あれは。道場破りの方は骨にヒビぐらいいってんだらうけど」

「そうなの??」

「おうよ。だから心配いらねえってわけ。じゃ、おめでとさん」  
伍助は私の頭をポンと叩いてその場を離れた。

そう……。女になったわりにはウエストもないし、やけにずん胴

だと思つたら、男に見せかけるためにサラシを巻いてたのね。

私はほつとため息をついた。

怪我がなくてよかつた……。

夜になつて人氣が引いたら、六三郎に会いに行こう。

そして、確かめなきゃ。

多兵衛さんとのキスのこと。伍助との関係。それから……おふみ  
つて女のこと……。

すっかりと夜も更けて、道場の面々はみんなぐっすり眠っている  
ようだった。

私は足音と気配を消しながらこっそりと六三郎が眠っているであ  
るう部屋に向かった。

若く健康そうな寝息やいびきがあちらこちらの部屋の中から聞こ  
えてくる。

……それにしても……男臭っ！

道場の木材の匂いとかび臭い匂い、そして汗の匂いなどがもわつ  
と襲ってくる。

私は鼻から口にかけてを右手で押さえ、鼻で息をしないようにし  
ながら歩いた。

そして、六三郎の部屋の前に着くと変身魔法を解き、いつもの自  
分自身の姿に戻った。

手鏡を取り出して髪の乱れや肌に汚れがなどをチェックする。(女子なんだもの。当然でしょ！)

髪を整えてキモノの崩れを直してから、音がしないようにフスマと呼ばれるジパングの引き戸をそっと開ける。

そこで、私が目にしたものは……。

なに……これ？

行灯と呼ばれるジパングのランプの薄明かりの下で、六三郎がガシツと伍助を抱きしめる姿が見えた。

布団の上で……もつれ合うように抱き合つふたり……。

伍助が六三郎の首筋に吸い付くように顔を埋める。

六三郎は左手で伍助の背中を抱き、右手で伍助の頭を優しく愛撫している。

うぐつ。

……吐き気が……、込み上げてきたわ……。

容赦ない悪臭と、それに……目の前で繰り広げられている気色の悪い光景に……。私、耐えられない！！！！

匂いとふたりのあえぎ声と……水晶で見るのとは違う、あまりの生々しさが衝撃的だった。

気がつくと、私は絨毯に乗って夜空に浮かんでいた。

あの光景を直視するのに耐えられず、無我夢中で逃げ出していたみたい……。

ふたりが抱き合っている鮮明な映像と胸のムカムカがこびりついていて、とにかく混乱していた。

あれは、やっぱりそういうことよね？

私の疑惑は、単なる勘違いではなくって現実……ってことよね？

……ということは?????

「……明日考えましょ」

そう呟くと、呆然とした状態のまま、私はアニスの待つ宿に向けて絨毯を飛ばした。



「まったく昨日は散々だったな……」

俺は昨日の騒動について愚痴をこぼしながら、道場の横にある井戸の傍で洗濯をしていた。

以前だったら洗濯なんか弟弟子にやらせていたのだが、俺の身体を狙っていると思うと洗濯させる気にもならなかったのだ。

すると背後に人の気配を感じた。特に殺気も感じないので弟弟子の誰かと思っていたら「……六三郎さん」と女の声で名を呼ばれた。振り返ると、おふみが立っていた。

「おふみ……」

うーん。

元カノと何度も顔をあわすのなにやらへんな気分だな……。

だがおふみはそんな事は気にも留めていないようで、笑顔でさらに俺に近づいてきた。

「昨日はおめでとう。すぐに言いたかったんだけど、六三郎さん奥に入って行っちゃってたし」

「そうだったな」

「それ洗濯物？」

「ああ」

「私が洗ってあげるわ」

おふみはそう言うと近づいてきて俺から洗濯物を取り上げてしま  
い、じゃぶじゃぶと洗濯を始める。そして洗濯物に視線を落とした  
まま問いかけてきた。

「仕官は上手くいってるの？」

「いや……それがなかなか」

「そっか。でも六三郎さんなら仕官先なんてすぐに見つかるわよ」

「ああ。ありがとう」

うーん。どうもおふみのペースだな。

「食事とかはどうしてるの？」

「まあ、適当にやってるよ」

「でも、一人じゃ大変でしょ？」

「いや、実は連れが居るんだ。昨日道場破りと戦った時、賭けをし  
てた奴分かるかな？ あいつと一緒になんだ」

「そうなんだ……。どこで知り合ったの？」

「確か武蔵野国の北の方だったかな……。実はあいつ抜け忍らしい  
んだけど、ちょうど追っ手に追われているところに俺が出くわして  
たまたま助けたみたいになったら、なんか恩返しとか言っついて  
来てるんだ」

本当は俺の身体目当てなんだが、それはさすがにおふみには言え

ないな。

「そうなんだ。でも男の人だけじゃ大変よね？」

もしかして……。おふみは俺について来たいのか？

「いや……。意外と何とかなってるよ。男だけだと野宿でもかまわな  
いしな」

「そう……」

残念そうだな。やっぱり俺について来たいみたいだ。そういえば  
昨日も小さな村でうんざりみたいなの事を言ってたっけ。

これはすっぱりと早めに諦めさせた方が、おふみのためか……。

「おふみ……。実は俺嫁を貰ったんだ」

「ええ！ 誰なの！？ 私の知ってる人？」

洗濯をする手を止めて、おふみは目を大きく見開いて俺を見た。

「いや……。旅先で知り合ったんだ」

「そうなの……。で、その人は……。どこにいるの？」

あ。いきなり痛いところをついて来た。

「いや、それが今どこに居るかは分からないんだけど……」

「どづいづいとっ」

おふみは怪訝そうに俺を見上げた。

「それが……朝起きたら姿が見えなくなってたんだ」

そう。多兵衛さんの道場で酔っ払ってそのまま朝まで眠ってしまった、目を覚ますと慌てて家に戻ったが、七重はいなくなっていた。……しかも、俺の体が女になってしまっているというオプションつきで……。

「何の前触れもなく？」

「ああ……」

俺は頷いた。

どうして七重がいなくなったのか、今でも皆目検討もつかない。

おふみは再び洗濯物に視線を落として呟いた。

「そう……。私だったら逃げたりしないのに……」

……痛い。痛すぎるぞ。おふみ。

「いや！ 逃げられたのではない！ 何故か姿を消したのだ！」

だが全力で否定する俺に、おふみは気の毒そうな視線を投げかけてくる。

まったく師匠といいどうしてみんな七重が逃げたと決め付けるんだ！

「とにかく、俺にはすでに妻が居るのだ。おふみ、もし俺について来る気だったのなら、すまないがすっぱりと諦めてくれ」

だが、俺の言葉におふみは眉をひそめて疑わしそうな表情を浮か

べた。

「奥さんって本当に居るの？」

もしかして、おふみを連れて行きたくないばかりに俺が嘘を言っていると思ってるのか？

「いやいや。本当に居るんだ」

「じゃあ、連れてきてよ」

「だから姿を消したんだって」

「じゃあ、居ないのと一緒にじゃない！」

おふみはどこまでも食い下がった。

う。これじゃ話が堂々巡りか。

「とにかく、お前を連れて行くわけにはいかないんだ！」

「私は諦めないからね！」

おふみは俺の洗濯物を桶に叩きつけると、足早に立ち去ってしまった。

何なんだ？ おふみの奴。

昔からマイペースな女だったが、いくらなんでも強引過ぎるだろ！？

……しかしあの分じゃ、なかなか諦めてくれそうに無いな。

まったくどうしたのか……。俺は仕方がなく、また洗濯物を洗う為に桶へと向かった。

その後朝飯を食ってさらに日も昇った頃、他に相談する相手もないので、やむを得ず俺はおふみの事を伍助に相談することにした。

道場から少し離れた林に伍助を引っ張っていき、おふみという元カノがいること、その元カノにしつこく迫られていることなど一通り状況を説明し、

「おふみを諦めさすにはどうしたらいいと思う?」  
と聞いてみたのだが……。

「俺が頂いちゃいましょうか?」

「……………死ね」

「冗談つす。俺は六さん一筋つすよ!」

「……………三回くらい死ね」

ダメだ。やっぱりこいつに相談しても意味なかったか……。だが実際どうしたものかな。いくら嫁が居るといっても信じないし……。

「ふ。お困りのようだな」

俺と伍助が同時に声がする方を向いた。

俺たちふたりそろって気配に気付かないなんてどんな奴かと思っ  
ていると、なんとそこには道場破り……新九郎が立っていた。

すると伍助がにやにやしなから言った。

「おお。あんちゃんどうした？ 六さんにも負けて賭けにも負けて帰る旅費が無くなったか？」

「ふ。まあそんなところだ」

伍助の冷やかしにもまったく堪えていない様で、新九郎は肩を竦めて笑った。

俺だつたら果し合いに負けた道場破りがどの面下げて……と思うところだが、こいつは相当図太い神経の持ち主のようだ。

飄々と笑いながら自分を負かした相手に話しかけるとは。

「伍助少し黙ってる。お前も何の用なんだ？」

「話は聞かせてもらった。そのおふみって奴を諦めさせればいいんだろ？」

てめえには関係のない話だろ？ と言いたい所だが……、おふみの件については、今の俺はワラにも縋りたい状況だ。

妙案があるというなら、新九郎の話だろうと聞いてみようという気になった。

「まあそうだが……。何か考えがあるのか？」

「つまりあんたに相手が居れば良いって話なんだろ？」

「そう……だな。だがその相手が居ないから困ってるんだろ」

「簡単な事だ。相手をでっち上げれば良い」

「でつち上げるといってもそんな事を頼めそうな女は居ないぞ？」

「ふ。別に女である必要はないだろう」

女である必要がない……。

「しかし、女装が似合いそうな奴なんて居ないぞ？」

「ちっ！ まったくなにぼけた事言つてやがるんだ。男が出来たつて言やあ良いじゃねえか」

「ふざけるな！ どうして俺が男と付き合わなくちゃ行けないんだ  
「！」

「だから、でつち上げるつて言つてるんだろつが！ 要するに俺は  
そつちの人間だから女はお呼びじゃないという訳よ」

うーん。こいつの言わんとする事も分からないでもないが……。

「しかし、誰と付き合っている事にしろつていうんだ？」

「ふ。もちろん俺に決まっているだろうが！」

新九郎は右手の親指で自分を指差したが、新九郎の言葉を伍助が  
せせら笑った。

「何言つてんだよ。六さんは俺のもんじに決まってるだろつ？」

伍助はそう言いながら、俺の肩に手を回すが俺は即座に振り払う。



「誰がお前のか！」

そして伍助の言葉を俺が即座に否定した事に、新九郎が勝ち誇った。

「ふ。どうやらてめえは六三郎に嫌われている様じゃねえか」

「まあ見てなつて。一回でも押し倒す事に成功すれば俺のもんになるって約束になつてるんだからな」

ちっ！　そう言えばそんな約束もあつたな。

しかし、新九郎もどうして俺と付き合うふりをするとか言い出してるんだ？

「もしかしてお前両刀なのか？」

「ふざけるな両刀なんて気持ち悪いことするかよ」

「おお。そうか。いや最近俺の周りにはそんな奴ばかりだな。それは悪かった」

「当たり前だ。男一本に決まってるだろう！　俺は俺より強い男をずっと捜してたんだ！」

もっと悪いじゃねえか……。

「さあ。俺がお前の彼氏になつてやるから早くそのおふみとかいう女の所の行こうじゃねえか」

くそ……。どうして俺の周りにはこんな奴らばかりなんだ？

いや、だが考え様によつては男にしか興味がなければ、今の俺にとつてはむしろ安全かもしれないな。

「よし、分かった！　じゃあ、おふみのところに行こう！」

俺はそう言つて新九郎と共におふみのところに行こうかとしたが、すると伍助が鼻で笑いながら口を挟んだ。

「ふつ。何言つてやがんだ。昨日六さんと戦つておきながら、恋人です！　なんて通じるわけないだろ。ここはやっぱり俺の出番だな」

「……たしかに」

ここで俺が新九郎と仲良くしては、あの試合も八百長と言われかねないか。

「うーん。やむをえん。伍助を彼氏にするしかないか……」

俺は肩を落としたが、ここで中途半端におふみを置いていけば、おふみの為にもならないだろう。

すっぱりと諦めさすには仕方がないか。

「くそ……。俺のアイディアなんだぞ！」

新九郎は悔しそうにしているが、確かに昨日戦つたばかりなんだからやっぱり無理があるしな。

「せつかくアドバイスしてくれたのに悪かったな。後で一杯奢らせ  
てくれ」

「それはデートの誘いと受け取って良いんだな？」

「じめん。違う」

即座に否定する俺に新九郎は目に見えて落ち込んだが、こいつに構っている余裕はない。

「まあとにかくまた後でな」

俺はそう言つて新九郎をその場に残し、伍助と共におふみに会つべく、おふみの家へと向かった。

そしておふみの家の近くまで来ると、通りがかった子供に駄賃を渡して、近くの林へとおふみを呼び出して貰った。

「六三郎さん、わざわざ呼び出すなんて……もしかして連れて行つてくれる気になったの？」

おふみは期待を込めた目で俺を見ている。

これから言わなければならぬ台詞を思うと気が重いが、俺には七重が居る以上おふみについて来られる訳には行かない。

「いや、実は俺は付き合っている奴がいるんだ」

「何よそれ！ その話なら今朝もしたじゃない。奥さんなんてどこにも居ないじゃない！」

激昂するおふみに俺はどう切り出したものかと考えていると、俺の横に立っていた伍助が口を挟んだ。

「姉ちゃん。だからこう言つ事なのさ」

俺が何がこう言つ事なんだ？ と不思議に思っていると、突然伍

助が俺の肩を引き寄せた。

そして何だ？　と思つて伍助の方を向いた瞬間、さらに俺の顔に手を添えて……。

「うぐっ！」

「六三郎さん！」

なんと伍助が俺にキスしやがったのだ。

「てめ……何しやがる……」

抗おうとする俺に伍助は一瞬唇を離し小声で囁いた。

「これくらいししないと信用しやせんって」

いやしかし……。

だが戸惑っている俺の唇を再度伍助の唇が襲う。

だがそこに怒鳴り声が響いた！

「てめえ！　俺の六三郎に何してやがんだ！」

俺と伍助、さらにおふみが声の方を向くと、果たしてそこには新九郎の姿があつた。どうやら俺達の後をつけていたらしい。

そして怒りの形相で俺と伍助の間に割り込むと、あっけに取られていた俺の唇をなんと今度は新九郎がふさいだ。

> i 2 3 9 8 5 — 2 9 7 6 <

「いやー……」

この状況についておふみが叫び声をあげた。  
不必要なまでのディーブキスに、俺は息を止めて吐き気をこらえながら新九郎から体を離れた。

くそつ、気持ちわりい！ 叫びたいのは俺の方だ。

そして取り乱したおふみに俺がつい近寄ると……。

おふみは飛び退いて俺をきつと睨んだ。

「近寄らないで！ この変態！」

変態……。俺はその場につくりと膝を付いた。

「付き合ってる時からぜんぜん手を出してこないと思ったら……、  
そついうことだったのね！！」

いや……。正直俺としては、おふみとはそこまでの関係じゃないと  
思ってたし……。なんて言ったら火に油を注ぎそつだな。

がつくりとうな垂れたまま口も利けずにいる俺の左右で、

「そつそつ」

「そついうこと」

と、伍助と新九郎がしきりに頷いていた。

それからおふみは俺たちにくるりと背を向けて無言で走り去って  
いった。

まるで汚らわしいものから逃げるかのように……。

……一応、これで目的は達成された。が、俺の胸中には苦々しさ  
と、今にも込み上げてきそつなおぞましい吐き気が残った。

しかも、明日には俺がホモの変態野郎だという不名誉な噂で村中  
もちきりだろう……。

「まあ結果オーライってやつですかね？」

「俺の最後の一撃が効いたようだな」

伍助と新九郎は満足げに逃げ去るおふみを見送っていたが、俺は密かに誓った。

いつかこいつらを殺そう。と。

「ただいま〜」……」

夜明け前、丸めた絨毯を魔法で縮めるのも忘れてずると引きずりながら姫様が戻って来た。

「おかえりなさい。……大丈夫ですか？」

ガラガラと窓が開く音に飛び起きた私は、暗がりの中憔悴しきった表情の姫様に気づき、声をかけた。

風に煽られた髪が乱れている。

身だしなみにこだわる姫様らしくないわね。これは、大変かも……。

「あいつ……やっぱりそうだったのよ！！！！」

「姫様、しーっ。声を落として」

まだ夜も明けきらぬ時間に安普請の温泉宿で大声はまずいわ……。取り乱している姫様の口を押さえて部屋の奥に引っ張る。

「……見たのよ！ 六三郎と伍助のベッドシーンを！」

やや声を落として、はらわたの煮えくり返るような表情で姫様は言った。

「ほ……」

「ほんとだつてば！」

私が口を挟む前に姫様は首を振って断言した。

「伍助……って、誰ですか？」

「六三郎の旅の連れよ。私と別れてからどこかで知り合っただけよ。姫様はすばやく水晶玉を取り出すと、表面をさすって画像を映し出した。」

ぼんやりとした画像が徐々に鮮明になってきて、布団の中で背中を丸めて眠っているらしい男の姿が見える。

姫様の気持が高ぶっているせいか、水晶の画像はときどきブレたりノイズが入ったりして見えにくい。

「これが伍助よ」

「……女性に不自由なさそうな男性に見えますが、同性愛者なんですか？」

「嘆かわしい……」。

ジパングの道徳観念はどうなっていることやら。

「それがどうも伍助は六三郎が女だったことを知ってるらしいの」「そうなんですか？」

「じゃあ、更に六三郎さんが本当は男だと知ったらどうなるのかしら?????」

「で、六三郎さんの口からはっきり聞いたんですか？ この人との関係を」

私は姫様の顔をじっと見て尋ねた。

姫様はうつと一瞬黙り込み、観念したように白状した。

「実は……聞いてないの。ふたりが寝室で抱き合ってるのを見て、そのまま逃げ帰っちゃった」

「……何しに行ったんですか？ この期におよんで……」

「だって！ 気持ち悪いし臭いしサイテーだったんだから！」

まあ……。男同士のラブシーンは私もできれば見たくないですけ



ど。臭いって……。

「男ばかりの道場だったから……異臭が……」

「な……なるほどですね」

「姫様は犬並に嗅覚が鋭いから……、匂いにはかなり弱いんだっ  
たわ。」

「どちらにせよ。六三郎が男とキスしたり寝室で抱き合ったりして  
るのを3回も見ちゃったもの。3回も見たら確実にしょ?。」

水晶玉の画像が六三郎さんの寝姿に変わった。

右手の横に何故か刀が置かれている。

「寝ているときも、いざというときに備えて用心しているってわけ  
かしら?」

自分の道場にいるのに、すごく用心深い人なのねえ。

……あれ? 何かひっかるわね。

「姫様。このふたりの様子おかしいと思いませんか?」

「思う。思う」

姫様は強く頷いた。

「六三郎は男好き。伍助は女好きっておかしいわよね?」

「いえ……。そういうことではなくて」

「どづいづいと?」

「恋人同士って愛し合った後に別々の部屋で寝ますか? ふつう」

「え？」

「同じベッドで一夜を共にしませんか？」

「……それは」

姫様は少し考え込んだ。

「かたやしつかりと刀まで備えて眠るなんて、どう考えても不自然ですよ」

「……そうかしら？」

「腑に落ちませんね」

姫様は腕を組んで再び考え込んだ。

ここは、姫様のために私が人肌脱ぐしかないわね。

「姫様、今度は私が行きます。直接このふたりに会って、ふたりの関係を確かめてきますわ」

……そして、さっそく翌日絨毯に乗って六三郎さんの村に来ただけど……、死ぬかと思ったわ。この遠距離飛行……。

空を飛んでいる間は、絨毯が接着剤でくっついたみたいに体は固定されていて、たとえ宙返りをしても落ちないとわかっていて、だからって高所恐怖症が治まるわけじゃないもの……ね。

温泉宿で出会った旅装束の女性を参考に衣装もそれっぽくして、私は村の中に足を踏み入れた。

まだ朝早いけど、六三郎さんたちがいつまた村を発つとも限らないし。

姫様の水晶玉で見た限りでは、さっきまでまだ道場の部屋で寝ていたから大丈夫だと思うけど……。

姫様から聞いていた道順をたどって道場に向かって歩くと、ふわっと甘い香りが漂ってきた。

キョロキョロと辺りを見回して香りの元を探すと、少しバラに似た白い花を咲かせている低木が見つかった。

ジャスミンと似てるけど、もっと甘い香りだわ。姫様が好きそうな香り。

私はもっと香りを嗅いでみよう、花をつけた低木に近寄った。すると不意に後ろからすっと手が伸びてきて、私の目の前の花を一輪手折った。

びっくりして振り返ると、なんと！ あの伍助という男が花を持って立っていた。

……どうして？ さっきまで誰もいなかったのに。

「いい香りだ」

伍助は白い花に顔を近づけて香りを嗅ぐと、その花を私に向けて差し出した。

「……え？」

「お近づきの印に一輪」

は？ と思って花と伍助を代わる代わる見ていると、伍助は私の

手をとって白い花を握らせた。

その手は傷だらけで、茶色っぽい血の筋があった。  
よく見ると背中に野鳥の死体を背負っている。狩りの……獲物？

> i 2 4 1 3 8 — 2 9 7 6 <

「お姉さん見ない顔っすね。この村の人じゃないね」  
笑いながら私の顔をじつと見た。

「え……、ええ。旅の途中でここにはたまたま……」

「へえ。女の一人旅なんて珍しいね。しかもこんな早朝に」

うつ……。結構するどいわね。この男。

「ひ、ひとりじゃないのよ。連れがいるの」

「ふーん。どこに？」

伍助は面白そうに目を細めた。

「それが……、道中はぐれてしまって……」

く、苦しい……。

「お連れさんかお姉さんかどっちかえらい方向音痴なんだな。ここら辺はけもの道でもなけりゃほぼ一本道てえのに」

「もつと遠くではくれたのよ!」

「そんなムキにならんでも……。わかりやしたよ」  
「わかったといいながら、伍助の目が笑っていた。これは絶対信じないわね!」

「まあ、それはどーでもいいや。そのお陰でこんなべっぴんのお姉さんとお近づきになれそうなんすからね。俺は伍助。お姉さん名前は?」

な、なんであなたに自己紹介しなきゃなんないのよっ。

「悪いけど得体の知れない男に名乗るほど安い女じゃないの」

「おっ」

伍助はひゅーと口笛を吹いた。

「クールビューティだねえ。ますます好みっすよ」

何? この男。六三郎さんの恋人なんじゃないの??  
これじゃ単なるスケコマシってやつなんじゃ……。  
と思つて、伍助をきつと睨んだ瞬間、背後から声が出た。

「何やってんだ、伍助! そろそろ朝飯の……」

振り向くと……。六三郎さんが道場の方から歩いてくるところだった。

つと私に視線を移すと、びっくりしたように目を見開いて駆け出

した。

「七重！……！」

「は？」

「七重！ 探したぞ！ 今までどこにいたんだ！？」

恐ろしい勢いで突進してくる六三郎さん avoidance ようと、思わず伍助を盾にしてその背後に回った。

「おっと」

伍助は六三郎さんの両肩を押さえてその場に踏みとどまらせ、首だけで私の方を振り返った。

「お姉さん。六さんの嫁さん??」

「ち、違いますっ。人違い！」

伍助が押さえていなければ今にも私に飛びついてきそうな六三郎さんは、じたばた暴れながら私の顔を見て言った。

「七重……！ じゃない」

間近で見るとさすがに私が姫様ではないことがわかったようで、六三郎さんはがっくりと肩を落とした。

「すまない……。背格好が俺の妻に似てたもんだから」

まあ、髪型とか顔立ちとか、こっちの人と比べればかなり似てる

ものね。

「いいえ……」

伍助は大人しくなった六三郎さんを解放して、まじまじと私を見た。

「六さんの嫁さん、この人に似てるのかー。じゃあ確かにべっぴんなんだな」

私はこのチャンスを活かさない手はないと敢えて聞いてみた。

「奥さん……、どうされたんですか？」

六三郎さんはばつ悪そうに頭を掻きながら答えた。

「旅の途中でいなくなってしまって、ずっと探してるんだ……」

「そつなんですか……」

姫様！ 聞きましたか？

六三郎さんは必死で姫様のこと心配してるみたいですよ。

「六さん、こつちのお姉さんもお連れさんとはぐれちゃったらしいつすよ」

「そつなのか？ 女ひとりでそれは大変だな。俺は六三郎。そなたは？」

え……？

「わ、私は……」

私はアニス……って本名じゃない！ えーと……アニス……スタ  
ーアニス《八角》だから……。

「や……八重と申します」

「八重……」

「なんか、名前まで似てるっすね」

伍助は少し呆れたように笑った。

それから六三郎さんの厚意で、私は道場で朝食をよばれることにな  
った。

……ありがたいんだけど、姫様から聞いていた通り男ばかりで、  
よほど女性が珍しいのか激しく視線を感じる。

しかもみんなシャイなのか、一見お椀をかき込んでいるように見  
えながらチラチラとこちらの様子を伺うという感じで、なんともや  
りにくいわ。

「すまんのー、お八重さん。弟子たちがジロジロ見るから食べにく  
かるう。ごらんの通り男所帯なものでな。悪気はないんじゃない。気に  
せんとどんどん食べてくれ」

師匠とみなに呼ばれているご老人が苦笑いを浮かべて言った。

「はい……。ありがとうございます」



「お前ら変な目でお八重さんを見るんじゃないねえ」  
道場のリーダーらしい六三郎さんが弟子たちをギロリと睨んだ。

こんな調子でなんとも奇妙な空気の漂う朝食が終わり、私はお礼を言つて道場を後にした。

女ひとりだと危ないだろうということ、次の村までの山道を六三郎さんが送ってくれることになり、朝のうちに出発することになったのだ。

「道中、連れの人と合流できるといいんだけどね」

「ええ……。もしできなくても、お互い下野を目指していますから、きつとそこで会えます」

……てか！ わざわざ送ってくれなくてもいいんだってば……。

「あの……。ほんとに送っていたただかなくても大丈夫です。こう見えて、私結構旅慣れてますし（嘘）、護身術の心得もありますし（これは本当）……」

「俺の妻もそう言つてたけど、野盗にさらわれてたし、今も行方不明になつてる」

六三郎さんはため息をついた。

「なんで女はみんなそう自分を過信してんのかなー。ずっと俺の側にいてくれれば危険な目に合わさずに済んだのに」

私と話しながら、六三郎さんの言葉は姫様に向かっているようだった。

悔しそうな表情で呟く。

「心配ですね。奥さんのこと」

「ああ」

「探しに行ったりしなくていいんですか？」

「心当たりは全部探したけど手がかりすら見つからなかったんだ。闇雲に探してもしかたないと思って、いったん故郷の村に戻って準備をしてからまた探しに行くことにした」

「なるほど。じゃあこれからまた探しに行くんですね」

「うん。日本中を周ってでも探し出す」

そう言い切る六三郎さんの表情はとても真摯で、姫様を本気で心配しているんだとわかった。

「とつても……、愛してるんですね。奥さんのこと」

「は？ ま……まあ」

「そんなに愛されてる奥さんがうらやましいですわ。六三郎さんは他の人に心が向いたことなんてないんでしょうね？」  
ちよつと鎌をかけてみた。

姫様の聞きたい言葉が聞けるかも知れない。

六三郎さんは真摯な表情で呟くように言った。

「……ああ。もちろんだ」

そうそう！ その言葉が聞きたかったのよ！

この人はやつぱり姫様だけを愛している。

あの伍助とかいう男がなんなのかは知らないけど。

本気で姫様のことを思っただけなら赤の他人にまでこんな話するわけないもの。

それから休憩を挟みながら夕方まで歩いて山道を越え、次の村の入り口にたどり着いた。

「本当にありがとうございます。今日はこの村で宿を取りますので」

「うん。気をつけて。もし……」

六三郎さんは立ち去る前に言った。

「どこかで七重と……俺の妻と会うようなことがあれば、俺がずっと探していると伝えてくれないか？ できるなら俺の村で待っていて欲しいと」

「はい……。もしお会いできたなら必ず」

「ありがとう」

それから、六三郎さんは笑って手を振りながら、自分の村に向けて戻る山道に入ってしまった。

私はほっとした胸を押さえながら、湧き上がってくる嬉しさに微笑んだ。

どうやら姫様の泣く顔を見ずに済みそうだわ！

「お八重さん」

背後から突然声がして、私は思わず飛び上がった。

「誰っ！」

「俺だよ。伍助っす」

にやにやと笑いながら片手を上げて伍助が立っていた。

……さっきまで誰もいなかったはずなのに、どこから湧いて出たの？ この男。

「あなたはねー！ なんでこういつも突然湧いてくるのよ？ びっくりするじゃない！」

「なんでって、俺忍者だから」

「ニンジャ………？」

知らない言葉だね……。ジパングの魔人ジンニとかそついうものなのかしら？

まあいいわ。ついでだからこいつにも確認しておこう。

「あなたって六三郎さんとはどういう関係なの？」

「えーと。彼氏ってことで」

伍助はにやっと笑って答えた。

「何言ってるの。だいたいあなたたち男同士じゃない。六三郎さんには奥さんもいるしね」

私は目を細めて、思いつきり疑いの表情を作って言った。

「うーん。詳しい事情はいえねえんだけど、そこは色々と事情があるんっすよ」

事情って……やっぱり知ってるのね。六三郎さんが女だって。

「よく分からないけど、六三郎さんを狙ってるわけ？ さっするにあなたの横恋慕みたいだけど」  
腕組みをして冷たい目で伍助を見る。

伍助は頭を掻きながら苦笑し、白状するように言った。

「まあねー。うまくすれば俺のものになってくれる約束になってるんっすよ。今んとこ負けっぱなしだけど」

「でしようね。あなたのことだから六三郎さんの寝込みを襲っては追っ払われてるんでしょ？ 目に浮かぶわー」

「なかなか容赦ないっすね。お八重さんも。まあ、そうなんすけど」

……やった！ これで伍助からも裏が取れたわ！

知らず知らずのうちに顔がにやついてしまっていたようで、伍助がまた苦笑しながら言った。

「なんか、嬉しそうっすね。お八重さん」

「いえいえいえ。ほんとに。お気の毒〜」

とどめを刺してしまったのか、伍助はがっくりと肩を落とした。

「いっすけどね……。別に」

「ところで何の用なのよ？ わざわざこんなところまで来て」

伍助はにこっと笑って私の両肩に手を置いた。

「今朝途中だったから、改めて口説いてみようと思って」

私は体を後ろに引いて、伍助の両手から逃れた。

「あなたは六三郎さんが好きなんでしょ？ 他の女を口説こうなんてどういうわけ？」

「そうなんっすけどね。お八重さんのことも気に入っちゃったから」

「なるほどねー。いつもその調子で女を口説いてるんだ」

「まあね。気になる？」

「ぜんっぜん！ てか、あなたみたいな軽薄な男にまったく興味ないから」

「……ほんときついっすねー」

伍助はいきなり私の左腕をぐいっと引っ張って自分の方に引き寄せた。

「なにすんのよっ！」

「はい。これ」

私の左手にあの白い花を握らせた。

「忘れ物っす」

そして、ぱつと手を離して両手を挙げた。

「無理矢理やっちまうこともできるんっすけどねー」

何言ってるの？ この男。

「お八重さん、六さんと違って俺に抵抗できないから」

「抵抗するわよ。思いつきり。あなたね。そんなちゃらんぽらんだとほんとに好きになった女に一生相手にされないわよ」

「一生って……。そこまで言いますか？ まあ、いいや」

伍助は両手を下ろして笑った。

「気いつけて。俺以外の男に襲われないように」

「襲われないわよっ」

「はは。じゃ、さいなら」

伍助は手を振りながら私に背を向けて立ち去ろうとした。

「待って」

私は一歩伍助を追いかけた。

「なんすか？」

伍助は振り返った。

「これ、なんていう花？」

白くて甘い香りのバラに似た花。

「くちなし」

「くちなし？」

「そう、八重咲きのくちなし」

伍助は目を細めて笑った。

手元のくちなしの花を眺めて、ふと顔を上げると伍助の姿は消えていた。

まるで始めから誰もいなかったかのように。

帰ったら姫様に報告したいことがいっぱいある。

六三郎さんが必死で姫様を心配して、日本中を歩き周ってでも探すと思うていること。

ホモ疑惑については、伍助は単なる片思いで、ふたりは恋人同士でもなんでもないこと。

姫様きつと喜ぶわ……。

もうしばらく、この花の甘い香りを嗅いでから。

もうしばらく、日が暮れるまで歩いたら、姫様のところへ帰ろう。

私はくちなしの花びらにそっと触れ、幸せな気分で微笑んだ。



俺が七重を野盗から救った後、ふたりで一緒に旅をする事になった。

七重は、物怖じしない性格なのか、知り合ったばかりの俺ともざつくばらんに喋ってくれるが、どうも訳ありの様で自分の事をあまり詳しくは話してくれない。

まあ、いずれ話してくれる時もあるだろうと無理に聞かないでいた。

一緒に旅をしていて気付いたのだが、七重はこっちの国の風習や食べ物にうとい。

遠い国から来た七重は言っていたし、肌の色も少し浅黒いので琉球から来たんだと当たりをつけているのだが、多分当たっているんだろう。向こうとこっちではかなり風習が違っつて言うからな。

しかも育ちが良くて働いた事が無いのか、あまり体力もないらしく、どうも俺がついていてやらないと危なっかしくてしょうがない。

仕官先を求めての旅の道中も七重は歩くのが遅く、予定していた場所まで歩く事が出来ず、すぐに弱音を吐いた。

「足がいたーい」

と言う七重に、俺は、やれやれとため息を付く。

「大丈夫か？」

「もう歩けなーい。」

でも、俺が仕方ねえなーとおぶってやると七重は申し訳なさそうな顔をした。

だったら最初から弱音を吐かなければ良さそうなものだが、もしかして今日はここまでで野宿をしたかったのか？

とはいえ、俺にも予定があるのでそうはのんびりとはしてられない。

俺は、まあ女の子の一人くらいおぶって歩くのも修行の内かと思うことにしたが、七重が予想以上に軽いには驚いた。

女の子ってこんなに軽いものなのか。

これじゃ確かに体力がないのも仕方が無いか。

しかしこんなに軽いのに出ているところはちゃんと出てるんだよな。

俺の背中にさっきから柔らかいものが当たってくる。いかん結構ムラムラしてきたぞ。

だが、これくらいでムラムラしてくるからと言って、俺はもちろんチエリーではない。

道場の兄弟子から

「女も知らんで人が切れるか！」

と、もつともなんだか良く分からない事を言われて遊郭へと連れて行かれてとつくに経験済みだ。

しかし遊郭では最近、南蛮人が持ち込んだという梅毒という病気

が流行っていて危険そうなので軽々しく行くのも躊躇する。

かの天下人、太閤秀吉から

「百万の軍勢の采配を任せてみたい」

とまで言われた名将大谷吉継も梅毒にかかり、関ヶ原の戦いの際にはすでに目も見えなくなっていたという。

それほど男ですら病には勝てないのだ。

そう思うと遊郭に行くのも躊躇われて、そう何度も足を運んだ訳じゃない。

もっとも俺も、はじめは七重の事を遊郭に売られていくのなら一番初めの客にと思ったのだが……。

しかしこうして一緒に旅をしていると、そういう心算で野盗に連れられていく七重を追いかけたと言つのが後ろめたくなってくる。

野盗から助けた俺を無邪気に頼ってくる七重に、俺も保護欲がき立てられてきたのだ。

まあ、遊郭の客になる心算だった事はいずれ話して謝る事にしよう。

だがその時は思いの外早くやってきた。

深夜、野宿していた俺が目覚ますと七重の姿が見えない。

一瞬、もしやまた野盗にさらわれたか！とも思ったが、さすがにそれだけの騒ぎが起こったならその時に俺が目覚まさない訳がない。

七重が自分でこっそりとどこかへ行ったんだろつが、まったくどこへ行ったんだ？

俺はやれやれと寢床から起き出した。

俺が気配を感じられないほど離れた場所で、また七重がさらわれる可能性もあるからな。

あちこち探し回っていると、どこからかバシャバシャという水がはねる音が聞こえてくる。

しかも七重らしき声もするではないか。

そして俺が、そこか？ と思って音が鳴る方へと向かい、

「七重！」

と顔を出すと、なんと七重が滝つぼで水浴びをしていた。

「な、なななな何してんだ！？ 七重！？」

心の準備が無い状態でいきなり目の当たりにした七重の裸体に、俺はうろたえてしまった。

ま、正直、「よっしゃ！」と思う気持ちもないではなかったが……。

この状態ってまさか、俺、のぞきと勘違いされてないか？

「何って、水浴びよ。あんまり暑くて寝られないんだもの」

慌てて水の中にしゃがみこんだ七重が、少しふてくされたような声で答えた。

おいおい、無用心にも程があるだろ？

まったく！ 俺が見つけたから良かったものの、もし野盗に見つかっていたらまたさらわれるところだぞ！

「ひとりで危ないだろう！ また野盗にさらわれたらどうするんだ

よ!？」

「さらわれないわよ」

「……って、実際さらわれてただろ!？ そなたは女なんだから用心しないと!」

七重は大丈夫と言うが、大丈夫なわけないだろう!

どこどう考えれば大丈夫だって言うんだ? 仕方がないので、七重が滝つぼから上がるまで見張っていた。

……と言っても、裸の七重をジロジロ見るわけにはいかないの(そうしたいのはやまやまだったが)、七重が着替えるまでの間は背を向けて気配だけを頼りに無事を確認していた。

あまりにも世間知らず過ぎる。これじゃ四六時中俺が着いていないと危なっかしくてしょうがない。

とりあえず今日は良いとして、明日からはちゃんと見張っておかないとな。

だが……と、俺はふと気付いた。それってずっと一緒に居るといふ事か?

七重とずっと一緒に……か。

まだ知り合って数日しか経っていないのにこんな気持ちになるなんて不思議だが、自分でもなぜか違和感を覚えなかった。

滝つぼから上がった七重は着物を着て姿を見せたが、頬が幾分赤い。

まあちらりとは言え男に裸を見られたんだから当然か。

見たのは腰から上だけで、しかも七重はすぐに背を向けて水中にしゃがんでしまったので、本当に一瞬のことだったが、予想通りの豊かな胸と濡れてつややかに光る背中はしっかりと俺の脳裏に焼きついていた。

改めて七重を見ると、濡れた髪に小さな木の葉がついている。

俺は無意識にその葉をつまんだ。

俺に触れられると思ったのか、七重の体がびくつと震えた。

「……やべーな……。俺が襲っちゃまうかも……」

無邪気だった七重が俺に裸を見られて緊張していることに、俺も刺激されていたようだ。

思わず心の声がぼそつと出てしまった。

七重は真つ赤な顔で驚いたように俺を見て少し後ずさった。

だが俺は逆に妙に冷静になっていた。

男として七重を自分のものになりたいという欲望はあったが、それ以上にずっと一緒に居たいという気持ちが強いことに気づいた。

七重のそばに居て、突拍子も無い七重の行動に振り回されるのも悪くない。

もっと七重を知りたいし、見ていたい。

こんな気持ちになったのは初めてだ。

「七重。俺の嫁になってくれない？」

今ぼんやりと頭の中で形になってきた気持ちがつい口から出てきた。

我ながら不思議なんだが、何故か俺の中に躊躇とか不安とかいう

ものは見当たらなかった。

七重は更に驚いたまん丸な目をして、更に真っ赤な顔をして俺を見た。

「何を……言い出すのよ？」

「白状すると、そなたが売られてしまうなら最初の客になろうと思って後をつけてた。最初にそなたを抱くのは俺だと」

七重が野盗に連れられていた時、遊郭に売られるものと思って最初の客になろうとしていた事を正直に話した。

そして心からの言葉を口にした。

「そなたのような女は初めてだ」

いつか俺も所帯を持つことになるだろうと思っていた。

七重のような女ではなく、良き妻となるようなしとやかな女を妻にするつもりだった。

だが、俺は妻が欲しいのではない。

七重が欲しいから、七重を妻にしたいと思った。まったく、予想外のことだったが。

「それは、私だけ？ 死ぬまで私だけを愛すると誓える？ アツラーにかけて」

七重がこれまた予想外のことを聞いてきた。

プロポーズされた女は「はい」か「いいえ」で答えるもんだと思っていたが、条件を付けてくるとは……。

しかも、アツラーってなんだ？ 琉球の神様か？

俺は懐から母上の形見のかんざしを取り出した。

「アツラーが何かは知らんが、このかんざしにかけて誓う」

そして母上の形見のかんざしを七重に差し出した。いつか、妻にする女性に渡そうと思っただけで持ち歩いていただけだ。

「これは？」

「母上の形見だ。肌身離さず身につけていた。上泉家の家紋が入っている」

俺はかんざしを七重に差し出した。

「そなたがこれを受け取ったら、今晚そなたを俺の妻にする」

「……！！！！」

七重は真っ赤な顔のまま絶句したが、しばらくするとそっとかんざしを受け取った。

俺は七重を抱き上げ、そのまま草の褥に下ろした。

俺が触れるたびに七重は体を縮込めるようにして震えた。

野盗になんかさらわれないとあんなに強気だった七重が、俺の腕の中で小さく震えている。

優しくしないと、傷つけてしまいそうだ……。

七重を抱くのは俺だけだ。

七重に触れるのも、俺だけだ。

ずっと側について、誰にも傷つけられないように守ってやらないと



……。

七重を妻にした夜、俺は心の中で誓った。

朝目を覚ますと七重がすでに先に起きていた。

「おっおはよう」

「……おはよう」

お互い朝の挨拶をしたが、どうも照れくさい。

七重は俯いて俺と目を合わせない。もっとも俺だって七重に正面から見つめられていたら目を逸らしてしまっていたかも知れないのだが。

それから俺と七重は目を合わせないまま黙々と朝食の準備をした。

そしてふたりとも黙々と飯を食べる。

ふたりとも目を合わせずに、ただただうつむいて食べ続ける。

しばらくその状態が続いたが、あまりの不自然さに俺は遂に、

「っふ！」と軽く噴出してしまった。

すると七重も俯いて、

「ふふふっ」

と笑い出した。

七重の笑い声に俺はさらに大きく笑い、そして七重も大きく笑い出した。

人気の無い早朝の山奥にふたりの笑い声がこだました。

ああ、俺達は夫婦なのだ。と思った。

そして旅は続き、兄弟子の多兵衛さんの道場を訪ねた折、茶屋で一休みする事にした俺達はふたりでお茶と団子を頼んだ。

考えてみたら、女の子とこんな風に茶店でデートっぽいことをしたのはあのときが初めてだった。

故郷の村で付き合っていたおふみとは、強引に押し切られる形ではなく付き合っていたが、稽古の合間にちよつとしゃべったり、差し入れてくれた握り飯を食べたり、祭のときに一緒に歩いたりしたぐらいだったしな。

そう思うとなんだかくすぐつたいような妙な気分だ。

ここでも七重は無邪気さを発揮し、豪快に団子にかぶりつく。

黙っていればどこぞの高貴な姫のようにも見えるのに、そのギャップが面白い。

故郷の村でもおてんばな娘は居たが、七重ほど豪快な女の子は居なかったな……。七重が住んでいた国では当たり前なんだろうか？

そんな七重を見て俺は微笑んだ。

ずっとこう言つ日が続くものだと思っていた……。

目が覚めると道場の一室だった。

やれやれ夢か……。昨日七重によく似た八重さんという人と会った所為だな。

しかし本当に似てたな……。  
やや浅黒い肌の色といい、ぱっちりした大きな黒い目といい、同じ系統の顔立ちなのかもな……。

しまった！　もしかしたら八重さんも琉球から来た人だったかも知れないぞ。

もっと色々と話聞いていたら七重の事は直接知らなくても何か手がかりが掴めたかも知れないのに！

くそ！　だいちゃんぼだ！

七重が姿を消してから、なすすべもなくどんどん時間だけが流れていく。

こうしていると七重と出会ったのも、夫婦になつて一緒に旅をしたのも、もしかしたら夢の中の出来事なんじゃないかと弱気になってくる。

七重と過ごしたのはほんの一週間ほどだ。

消えた母上のかんざしと頭に焼きついた七重の面影以外何も残っていないのだ。

そう……確かなものは何も。

こうなったらやっぱり師匠が言っていた、失せ物や探し人の場所を言い当てる事が出来る人の居場所を聞き出すしかないか。

しかし、師匠も最近ぼけてきているからな……。このままだと、探し人の居場所を言い当てる人を見つけられる人を探さないといけなくなりそうだけ。

まったく笑い話にもならない。

俺はやれやれと布団から起き上がった。

まず早朝から弟子達の稽古をつけてその後、伍助が準備した朝飯を食べる。そして飯の後はまた稽古。

昼飯を食べてその後も稽古だ。

弟子達は、

「兄弟子敵しすぎます!」

「一日中稽古じゃないですか!」

「もつと強くぶって下さい!」

と口々に弱音? を吐いてるが構わずしごく。

3人がかりでも伍助に遅れを取るなんて、もし俺が居ない時にまた道場破りが来たらひとたまりも無いからな。

俺が居る内に出来るだけ鍛えておかないと。

とはいえ、俺も長居する訳には行かない。七重を探さなくては。

一日の稽古も終わり夕食の後、俺は師匠の部屋へと向かった。

道場破りの新九郎と戦う前に師匠から聞いていた探し人の場所を言い当てるといふ者達の居場所を聞く為だ。

「六三郎です。失礼いたします」

俺はそう師匠に声をかけ、師匠からの「うむ」と言う返事に、ふすまを開け敷居を跨ぎ、早速本題に入った。

「師匠。以前に師匠からお聞きした、探し人の場所を探し当てる事ができるという者達の居る場所なのですが、思い出しましたでしょうか」

「おお。その事がそれは間が良いことよ。今ちよつと思ひ出していたところじゃ」

「本当ですか！　ありがとうございます！」

これで七重の居場所が分かるぞ！

「うむ。では早速話そう。覚えているうちに喋らなくては、また直ぐに忘れてしまうからの」

「おいおい。大丈夫か？　マジでボケはじめてるな……。だが今は師匠の事よりも七重の事だ。」

「それでその者達はどこに居るのでしょうか？」

「確か……。どこだったかの？」

「師匠！」

「ほっほっほ。なに冗談じゃよ」

まったく師匠はこう見えても結構お茶目だからな。心臓に悪いぜ。

「確か……。山城の国……。京の都だった……。気がするの」

どうも頼りないな。だが今は師匠の言葉を信じるしかない。この

常陸国から京まではかなりの道のりだが、それで七重の居場所が分かるなら易いものだ。

「師匠、ありがとうございます。早速京に向かいます」

俺は師匠に深々と頭を下げた。

「兄弟子！ 行ってしまわれるんですか！」

「いつかきつと兄弟子に相応しい武士に成って見せますから待っていてください！」

「ずっと待っています！」

出発の日の早朝、何か言っている弟弟子達に、俺は一瞥もくれず師匠へと向き直った。

「それでは師匠、行ってまいります」

「うむ。その逃げた嫁とやらが早く見つかるの良いの」

「ち・が・い・ま・す！ 居なくなったのです。逃げたものではありません！」

だが俺の抗議もむなしく、やはり師匠は俺に哀れむような視線を投げかけた。まるで、いい加減に現実を認めろよ……。とでも言う様に。

くそ。だが断じて俺は嫁に逃げられたのではない。何故か居なくなっただけだ！

「では、これで」

俺は不機嫌な表情で一礼すると師匠達に背を向けた。

ここから京都までは20日ほどか。だが急げば17、8日で着くだろう。

旅費は俺と新九郎が戦った時、伍助がかけの元締めをしていた時の儲けを拝借してきたのでたつぷりある。

俺が戦って儲けたのだから当然の権利だ。もつとも急ぐ俺は街道沿いにある宿場に泊まらず、夜が更けても突き進み夜は野宿する心算なので旅費はかなり節約できるが、金は有るに越したことは無い。

それに探し人の場所を占うという人の報酬だつて必要だろう。俺がそう考えながら道を急いでいると、突然声がかかる。

「置いて行くななんてひどいっすね」

ちっ！ せつかく朝早くから出発したのに、やっぱり忍者をまくのは無理だったか。

しかも伍助は先回りし、俺の進む先にある木の幹にもたれ掛つていた。追い付いたんなら後ろから声をかけるよ。わざわざ先回りするなんて嫌味な奴だな。

「なんでわざわざお前に声をかけにやなんのだ。どこの世界に自分の身体を狙う相手を自分で呼寄せる奴がいるんだよ」

俺は顔をしかめて冷たく言い放ったが、伍助はいつも通り何処吹

く風だ。

「なに言ってるんすか。俺が六さん押し倒す事に成功したら俺のものになるって約束でしょ？ だったらちゃんと俺にも声をかけて貰わないと約束が違うじゃないっすか」

おいおい。どこまで拡大解釈する心算だ。まったくここまで自分勝手な奴も珍しい。だが俺が伍助に言い返そうと思ったその時、後ろからまた声が掛かった。

「その話、俺も乗った！」

俺と伍助が気配に気付かないとは……。俺と伍助が声のする方を見ると、やっぱりと言うべきか新九郎が立っていた。

「俺も乗ったってなんのこと？」

伍助が新九郎に問いかけると、新九郎は近づき俺を見つめながら答える。

おいおい、かなり気持ち悪いぞ。

「お前を押し倒すのに成功すれば、お前を手に入れられるなんて良い話、どうして俺に黙ってたんだ」

いやいや、どうしてお前に言わなきゃならんのだ。そう思って口を開こうとすると先に伍助が口を開いた。

「何言ってるんだよ。俺と六さんはちゃんと理由があってそういう話になってんの。お前を混ぜてやる言われはねえよ」



そして五助はそう言つと新九郎に、シッシと手を振つた。

> i25722 — 2976 <

あー、もういいや、とりあえず伍助に任そう。俺はそう思つて後ろに下がった。

「どんな理由だ言つてみる」

「一回薬を使つた時に六さんを押し倒すのに成功しそうだったんだがな、薬を使わずに押し倒せたら諦めて俺のものになるって約束してくれたんだ。なにせ薬を使つて押し倒してもその一回限りだからな」

「ちつ、薬は使つちやダメなのか」

新九郎はそう言つて舌打ちをする。

おいおい薬を使う気まんまんだつたのかよ。危ない奴とは思つていたが、こんなのと伍助と両方から狙われたらたまつたものじゃないな。

「六さんとの決闘に負けたお前が、薬を使わずに六さんを押し倒せるわけ無いだろ？ 諦めてとつと帰れよ」

「ふつ。夜這いすれば問題ねえだろ」

「六さんの傍には俺が居るんだぞ？ 夜這いなんてさせるかよ」

伍助はいつも通りの余裕を持った態度で返答していたが、次の新九郎の言葉に顔色を変えた。

「だったら俺は、お前の夜這いを邪魔してやるろう」

「あ。てめえ！ 何言っつてやがる。人の恋路の邪魔をして楽しいのかよ」

「ああ。楽しいな」

「うむ。結構話が長引きそうだな。よしこのままふたりとも置いていこう。」

俺は気配を消して気付かれない様にふたりから離れると、先を急いだ。

今日中に常陸国を出れば良いんだが、と、俺は足を速める。だがしばらくすると後ろから声がする。

「六さーん。なに俺をおいてっつてんすか！」

「お前なに考えてやがんだ！」

くそつ。やっぱり追いかけてきたか。

「俺は先を急ぐんだよ。のんびりとお前らの相手なんてしていられるか！」

俺はふたりを無視して先を急いだが、ふたりはめげずに俺の後についてきやがる。

「だからついてくんなって！」

俺は駆け足になる一歩手前の様な足取りで先を急ぐが、ふたりも負けじと、

「そりゃないっすよ！」

「俺はあきらめんぞ！」

と着いてくる。

こうして、何故か俺の身体を狙う男が二人となり、俺の嫁を探す旅は続くのだった。

11：六三郎（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。

六三郎の七重への気持ちを書くのに苦労しました。

感想・アドバイス等ありましたら、是非お願いします。

## 12：ナエマ

両手のひらが真っ赤になるほどの血で濡れていた。

いったいどこから……？ 傷口を探してみたけど、どこにもない。

やがてふと気がつくのと、目の前に血だらけの六三郎が倒れている。

「六三郎！」

私は叫んで彼の体の傷口を探す。

一刻も早く止血しなければ……。

「七重……」

しゃべらないで！

六三郎の破れた着物を開いて、どくどくと血が流れ出す腹部を押さえる。

止まれ！ 血よ、止まれ！

私はイメージする。彼の血液の中の血小板が傷口に集結して堰を作る場面を。

腹部の傷口が固まってほっとした途端に、六三郎の左胸が裂けて血が流れ出す。

どっしって……？

止血をするごとに、次々に六三郎の体の新しい箇所が破れていく。どんどん彼の血が失われる。

このままでは……六三郎の体の血が涸れてしまう。

「……七重……」

六三郎が血だらけの手で私の頬に触れ、何かを喋った。何を言っているのか、まったく聞き取ることができない……！

どうしたらいいのかわからない！！

六三郎を救うためにはどうしたらいいのか、必死で考えているうちに、彼の体はどんどん萎んでいった。

まるで、溶けていくかのように……。

水の中に落ちた砂糖をすくうように手を伸ばして、消えていく六三郎をとどめようとしたけど、私が掴んだのは六三郎のキモノだけだった。

「ダメ！ 消えないで！！」

私は叫びながら掛け布団を跳ね除けて起き上がった。

……あれ？

気がつくところはいつもの温泉宿だった。障子から日差しが部屋に入ってきて、もうすっかり明るくなっている。

「夢……」

跳ね除けた掛け布団を掴んで呟く。  
ひんやりとした布の感触が、寝ぼけた頭を少しずつ現実に引き戻してくれるようだった。

……なんて、リアルな夢。

いいえ、もしかしたら現実かも！！

私はあわてて卓袱台の上の水晶玉に飛びついた。

さすりながら六三郎の姿が映るように念じると、水晶玉の奥に六三郎の姿が徐々に鮮明に浮かび上がってきた。  
ハシと器を持って朝食をとっている最中のようなだった。

「良かった〜！ピンピンしてる」

私はほっとして胸を撫で下ろした。すると、次の瞬間に……。

「あら？ アニス？？」

六三郎の右横にアニスが座って、同じように朝ご飯を食べていた。

やるじゃない。もう道場潜入に成功したなんて！

アニスの表情は笑顔がこわばっていて、なんだか居心地が悪そうに見えた。

男ばかりの道場でジロジロ見られて気まずい思いをしているのかもね〜。

アムランの城では基本的に男女別れて生活してたし、たくさんの男の中に女ひとりというシチュエーションもアニスにとっては生ま

れて初めてぐらいのものよね。きっと。

「ありがとね……。アニス」

高所恐怖症を押し空飛ぶじゅうたんに乗って常陸まで行ったり、男の集団に紅一点の不快感を我慢してくれたり、全部私のためだものね……。

私は水晶玉をもう一度さつと撫でて、六三郎とアニスの画像を消した。

せっかく頑張ってくれているアニスの口から報告を聞いたかった。水晶玉が教えてくれるのは真実の一部分だし。映像だけ見て全てがわかる訳ではないわ。

ふうとため息をひとつついた瞬間、廊下の方から仲居さんの声が聞こえた。

「おはようございます、七重様。お目覚めでいらつしゃいますか？朝げの支度ができましたので、よろしければお持ちいたしますが」

「ええ、お願いするわ」

私は髪の毛をささつと直して、入り口に向かって答えた。

するとすつとフスマが開いて、女中のお駒さんが入ってきた。

ご飯という米を炊いた主食と豆のスープ、季節の野菜のピクルスという定番のメニューを卓袱台に並べてくれた。

「あら？ お連れ様が見えませんか」

アニスがいないことに気づいたお駒さんは、首を回してキョロキョロと部屋の中を探すように眺めた。



「そうなの。ちょっと早朝から出かけてるのよ。帰りは夜になるかも知れないわ……」

「そうなんですか……。じゃあ、ひとり分はお下げしといたほうがよろしいですかねえ？」

「ええ。せっかく持ってきてくれたのに、ごめんなさい……」

「いえいえ。じゃあ夕げからおふたり分お持ちしますね」

お駒さんは手際よくアニスの分の食事をお盆に載せていった。

うつむき加減になったお駒さんの結び上げた髪にきれいな細工のかんざしが刺さっているのに気づいた。

木製の玉かんざしで白い貝か何かで花の模様をはめ込んでいる。

「とってもきれいなね。そのかんざし」

「まあ……。ありがとうございます」

お駒さんは少しはにかむように微笑んで、かんざしに軽く右手の指を添えた。

「主人からの贈り物なんです」

「まあ、素敵ねえ！」

私は六三郎からもらったかんざしのことを思い出した。

使い方がわからなくて一度も髪に挿したことはないけれど……。

「私もかんざしを持っているけど、使い方がわからないの……」

包みからかんざしを取り出してお駒さんに見せた。

「あら、これはいいかんざしですねえ。鼈甲に金の蒔絵で家紋が入ってる。さすが七重様、相当な上物ですわ」

「そうなの？」

お駒さんは目をキラキラさせて大きく頷いた。

「このかたばみの家紋は……お武家さんの家紋ですよ？　七重様のいいお人ですか？」

「え……ええ、まあ」

夫だもの……。 「いい人」と言えるのよね。

「このかんざし、きっと七重様にお似合いですよ。よろしかったら髪に挿して差し上げましょうか？」

「お願いしていい？」

「ええ、喜んで！」

お駒さんは頷いて、お盆を入り口のフスマの前に下ろした。

そしてキモノの袖をまくって、私の後ろに中腰で座って、  
「失礼しますね」

と私の髪をまとめ始めた。

まとめた髪を後頭部でねじり上げ、かんざしに毛先を巻きつけてから向きを変え、髪に挿し込んだ。

「はい、できましたよ」

早っ！ 1分もかからなかったわよ！

「すごい……。上手ねえ……」

鏡を見るといつもとは違う落ち着いた雰囲気の方がいる。城にいるときはいつもアニスに髪を編んでもらったり、結ってもらったりしてたけど、こんな髪型は初めてだわ。首を捻って角度を変えると六三郎のかんざしが見える。

> i 2 6 4 9 9 — 2 9 7 6 <

「よくお似合いですよ」

「ありがとう。嬉しいわ」

につこりと笑うお駒さんに私も微笑み返した。そして、お駒さんの手にそっと小粒のルビーを握らせた。

「いえいえ！ とんでもありません！」

お駒さんはぶんぶんと首を振って、ルビーを返そうとした。

「いいのよ。小さなものだし。紅玉は愛を育てる石だと言われているから、お守りに持ってて」

私はお駒さんの手をぎゅっと握って首を振った。

「……ありがとうございます。大切にします」

根負けしたのか、お駒さんは嬉しそうに笑って頭を下げた。

お駒さんが部屋を出て行った後、私は改めて鏡を見た。

かんざしを挿した私を見たら、六三郎は何と言っただろう……。きれいだと思ってくれるかしら？

「これをそなたに。母以上に愛する女に出会えたら渡そうと思っ  
ていたんだ」

私をまっすぐに見つめる六三郎の迷いのない表情を思い出す。

六三郎のお母様はどんな女性だったんだろう？

きつと優しくしてしとやかで、でも強い、素敵な女性だったに違いない。

なのに、「母以上に愛する女」と言ってくれた……。

会ってまだ数日にしかならない私を。

そんな六三郎を、どうして私は信じることができないんだろう？

確かなものを求めて、いつも彷徨っている私の心。  
どこにいても、だれといっても、そこは自分の居場所ではないよう  
な気がして……。

あの人なら、どこかへ飛んでいきそうな私の心を捉まえていてく  
れるかも知れないと思った……。

襟足の後れ毛をそつと撫でつけながら、私はしばらく金色に輝く  
かんざしの家紋を見つめていた。

アニスが帰ったのはすっかり日も暮れてまもなく翌日になるという時刻だった。

「ただいま帰りました〜」

窓が開くと同時に弱い声が出て、ほどなくじゅうたんから窓の棧に跨るアニスが見えた。

苦手なじゅうたん飛行ですっかり憔悴しきっているみたい。

「おかえり！ 無事で良かったわ」

私は駆け寄って、アニスを部屋の中に引つ張り込んだ。

何故かアニスは左手に白い花を持っていた。

「その花は？」

「ああ……。くちなしという花らしいです。道中咲いてたんですよ。いい香りでしょう」

ちょっと苦笑いのような表情で花を見ながらアニスが答えた。確かに、甘い、胸をくすぐるような香りがする。

「ほんと。いい香りね。それはそうとお腹すいたでしょう？ お駒さんに頼んでアニスの分の晩ご飯は置いてもらったから」

「ありがとうございます。ふう……」

アニスは卓袱台の側の座布団に座り、汲み置きの水を一口飲んだ。そして、その水の中に手にしていた白い花を差すと壺を切ったように話し出した。

「やっぱり姫様の誤解でした！ 六三郎さんと伍助はなんでもあり

ません」

「そつなの？」

「はい。あの伍助という男……、水晶で六三郎さんと抱き合っていた相手ですが、あれはどうしようもない女たらしです！ 私のことも口説こうとしたくらいですから」

「アニスは美人だもの。口説かれても不思議はないわ」

「六三郎さんがいながらですよ！」

アニスは憤慨したように首を振った。

だらしのない男が嫌いなものよね……。アニスつて、お堅いから……。……と思った次の瞬間、アニスは晴れやかな笑顔を見せて言った。

「でも、伍助は白状しました。六三郎さんのことは完全なる自分の片思いで相手にされてないって」

「相手にされてない……」

「それに、六三郎さんは私と姫様を間違えて必死で走ってきましたよ。人違いだと判ると見ていて気の毒なぐらい肩を落として」

「……………」

「姫様のことをとつても心配していました。ジパング中を周つても探し出すとも言っていましたし、姫様以外の人を愛したことなど断じてないとも言っていました」

胸の中に何かじんわりと染み出してきて、涙が出そうになった。

どうして、今、ここに六三郎がいないんだろう？

なら、どうしてもっとしつかり私を捉まえていてくれなかったの？

六三郎に呪いをかけた拳句、逃げ出したのは私なのに……。判っているのに自分勝手な憤りが止まらない。

「だったら、どうして多兵衛さんにキスしたり、伍助に抱きついたりしたの？」

涙が出そうなのをごまかすため、私はぶいと顔を反らして聞いた。

「それは、姫様が六三郎さんに聞いてみてくださいください」

アニスは落ち着いた口調で答えた。

「とにかく、六三郎さんの言葉に嘘はないと私は思いますよ」

「……じゃあ、私は勘違いで六三郎に性転換の呪いをかけちゃったってどういうことなの？」

山道で「仕方ねえな」と言いながら私を負ぶって歩いてくれた六三郎の優しい声を思い出す。

結ばれた夜の腕枕、「七重を幸せにするためにこの剣の腕を活かしたい」という言葉を思い出す。

翌朝、恥ずかしくてお互い顔が見れなくて、そんなふたりがおかしくて大笑いしてしまったあの瞬間を思い出す。

「……どうしたらいいの？」

私は泣きそうになりながらうつむいた。

「後は六三郎さんの魔法を解いて、話し合えばいいんですよ。迷うことじゃないと思いますよ」

アニスは優しい声で言った。

「……できないのよ……」

私は握りこぶしに力を込めて搾り出すように呟いた。

「は？」

何を言っているのかというようにアニスは首を傾げた。

「……あの魔法は解けないの」

「ええっ!？」

「私、解除魔法を知らないのよ……!!」

私は全身の力が抜けてへなへなとその場に崩れ落ちた。

アニスがおろおろしながら近寄ってくるのが見えた。

あの魔法をかけたときは、単純に六三郎の浮気封じのつもりだったから、まさかこんなことになるとは思ってなかったのよ……。

「……ちよっ! 姫様、解けないって……、どーするんですか!!?」

「私の方が聞きたいわよ……!!……!!」

私は頭を抱えて床に沈みこむように首を振り続けた。

翌日、私とアニスは長く留まっていた温泉宿を発つことにした。



結局、六三郎にかけた魔法を解除するためには、一度アムランに戻ってお母様の一族である魔族に教わりにいくしかないという結論に至ったのよ。

……とは言うものの、私はお母様方の親戚には会ったこともないし、お母様以外の魔族に知り合いもいなければ、魔族の国の場所も知らないんだけどね。

家出しておいてこんな中途半端な状態で戻りたくはないけれど、いったん城に戻ってお父様に相談するしかない。

「一生六三郎さんを女性のままにはしておけないですしね。王様からカミナリが落とされるのは覚悟して戻るしかありませんね」

アニスは苦笑した。

「ごめんなさい……アニス。アニスに咎めがいかないように取り計らうから」

好き好んでアムランを離れたわけではないアニスを罰させるわけにはいかないわ。

全部私の我がままのせいなんだもの。

「いえ。強引について来たのは私ですから」

と言うアニスに私は首を振って見せた。

「今後もアニスには側にいてもらいたいから、私に拉致されて仕方なく、しかもずっと戻るように説得していた、ということにして。そうすればお父様はアニスを今後も私の側仕えにしてくださいさるわ」

アニスは納得のいかないような顔をしていたけど、最後にはしぶしぶ頷いた。

「でも……」

胸の辺りに何かがつかえてるような感覚がして、私は小さく呟いた。

「でも？」

「アムランに戻る前に……。一目六三郎に会って行きたい。謝りたいし……。聞きたいこともあるし……。何より不安なの……。このまま会えなくなりそうで……」

「姫様……」

私は昨日見た不吉な夢を思い出していた。

あれはただの夢ではない気がする……。

六三郎の身に何か危険なことが起きそうな……。

六三郎のぬるりとした血の感触を思い出して身震いした。

「そうですね。では、六三郎さんに会いに行きましょう。常陸の国まではじゅうたんてひとつ飛びですしね」

アニスはにっこり笑って頷いた。

「……でも、今度はランプに入ってもいいですか？」  
言いにくそうに言って、アニスは私の顔を伺った。

「いいわよ」

私は吹き出しそうになった。

昨日の長距離飛行で、もうじゅうたんはこりこりだと思っているのだろう。

「もう少し人気がないところに移動したらランプに入ってね」

私たちはけもの道を通って、ずんずんと山の奥深くに入っていた。  
名も知らぬ雑草が腕や足首を引っ搔いて、肌に細かな傷を残していく。  
かゆみの残る傷を瞬時に治癒魔法で治し、ベール状の結界を張りながら歩くことにした。

それにしても、なんて深い緑なんだろう。

初めてジパングに降り立ったときは、見渡す限りの緑の木々にめまいがした。

どこまでも続く濃緑をこれまで私は見たことがなかったから。そして、しっとりとした空気とむせ返るような木々の匂い。

ぴったりと体を包む湿気に驚いて、何度も肌をこすってみたのを思い出す。

汗だくになった肌が気持ち悪くて、六三郎が眠っているのをいいことに水浴びしたわね……。  
びっくりした六三郎が駆けつけてきて……、あの時は恥ずかしかったな……。

色々なことを思い出しながら黙々と山道を歩いていると、出し抜けるに数人の騒がしい気配を感じた。

ガサガサという草を掻き分けて走る音や、木の枝が折れる音、金属同士がぶつかり合う音や悲鳴などが聞こえてくる。

「うっ……!!」

「そこかっ！」

鋭い何かグドグドグドグと木や地面に突き刺さる音がした。

え！？ なになに？ 何が起こってるの？

まさか……戦闘？？

驚いて立ち止まっているとアニスに肩を掴まれた。

「姫様、逃げましょう！」

「いえ、逃げても逃げ切れるわけではないわ」

そう判断した私は、次の瞬間に迷わずアニスをランプに封じ込め、気配を消す結界を張って騒ぎが収まるまで待つことにした。

「ぐっ……」

押し殺すようなうめき声と人が倒れるようなドサっという音が聞こえて急に静かになった。

「やったか？」

「おそろしく」

続いて、くぐもった男たちの声が聞こえて、彼らが倒れた男？の側に駆け寄る気配がした。

「とどめを」

鋭い刃物で人の肉と骨を貫くような鈍い音と悲鳴が聞こえた。

「ぐわっ……！」

私は悲鳴を上げないように両手で口を押さえているのが精一杯だった。

心臓が口から飛び出しそうに緊張し、体全体が震えていた。

彼らに私の存在が気取られることはないとわかっていただけれど……。

「悪いなアサギ。お前に恨みはないんだけどよ。あの世で伍助に会えるといいな」

伍助?????

「ムダ口叩くな。行くぞ」

また草木を掻き分ける音がして、数人が走り去って行ったのが判った。

彼らの気配が消えて十分に遠く離れたと判ると、私は結界を張ったままアサギと呼ばれた男に近づいてみた。

うつぶせに倒れているアサギは背中や手足のキモノが破れ、滲んだ血の量から致命傷を負っていると判った。

私はアサギの上にかがみこんで背中からおそらく心臓に至るまで貫かれた致命傷を止血し、治癒魔法で回復させにかかった。

もしかして……、あの夢は六三郎ではなくてこの人のことだったの???

触れられたことに驚いたのか、アサギは体を素早く捻って私の方を見た。

死に掛けているというのに……、どこにそんな力があつたのかしら？

瀕死のアサギの抵抗にも驚いたけれど、彼がまだほんの少年だったということにも驚いた。

ジパングの人間にしては珍しく淡い鳶色の目を大きく見開いていた。

しかし、アサギの目は既に焦点が定まらず、その目に私の姿は映っていないようだった。

そして、最後に一言、

「……ご……すけ、あに……き……」

と呟くと意識を失い、また地面にドサリと倒れた。

その後はただ風が木々を揺らす音だけが辺りを包んでいた。

12：ナエマ（後書き）

第一部終了

第二部に続く

第二部は伍助が活躍します。  
伍助の過去が明らかに！

## 1：六三郎

今回はいよいよ六三郎とナエマが再会します。

前回は男に襲われかかるわ元カノに変態呼ばわりされるわ、さんざんな目に遭っていた六三郎ですが、今回もやっぱりひどい目に遭います。

可哀想なのでちょっとハッピーになって欲しくて扉絵にラブラブっばいふたりを描いてみました。(挿絵作家が)

軽薄忍者伍助の旅の目的もわかってきますので、ご期待ください。

> i 2 7 0 3 6 — 2 9 7 6 <

故郷である常陸国を出て二日後俺達は下野国に入った。

「やっと下野か」

新九郎はそう感想を漏らしたが、やっと何も旅を始めてまだ二日目なのになに言ってるやがんだ。

「お前は、無理やり付いて来ながらだらしないぞ」

「無理やりとはひでえな。せつかくの新婚旅行を」

「何が新婚旅行だ！」

俺が叫ぶと、伍助が同調する様に参加してきた。



「六さんの言う通りっすよ。こえれくらいでやっとか言ってるじゃ、とても京までいけねえんじゃないの？」

「うっせえな。てめえには関係ねえだろ」

「あるんだよ。この穀潰し」

「誰が穀潰しだと」

「てめえだよ。無一文の上に飯の用意すら手伝いやがらねえくせに」

「俺の金を巻き上げたのはてめえじゃねえか」

「人聞きの悪い事言いなさんな。てめえが自分で金を賭けて負けただけじゃねえか。自業自得だろう」

「ちっ！」

新九郎は大きく舌打ちしたが、どうやら伍助の勝ちみたいだな。

まったくこいつらは相変わらず仲が悪いな。

「どうしてお前らはそんなに仲が悪いんだ？　ちよっとは仲良く出来んのか」

すると伍助は呆れた様な目を向けてきた。

「なに言ってるんっすか。こいつは敵なんっすよ？　道場破りに来たのをもう忘れちまったんっすか？」

「うっくん」

そう言えばそうだったな。

「おいおい。六三郎なにそんな奴の口車に乗ってんだよ。元敵同士なんて燃えるシチュエーションじゃねえか」

「誰が燃えるか！」

すると新九郎が俺の肩に手を回してきやがった。

「つれなくするなよ。ロミオ」

「誰がロミオか！」

俺は新九郎の腕を力いっぱい振りほどいた。

って言うか、じゃあ、お前がジュリエットかよ。

どんだけごついジュリエットなんだよ。

まったく調子が狂うが、意外にも新九郎はある意味役に立った。

旅の初めの日、新九郎は夜になると俺に夜這いをかけようとしたのだが、伍助も同じく夜這いをかけようとした。

寝ている俺の前で鉢合わせた二人は、とつさに飛び退いて対峙し、譲れ、お前こそ譲れと言い合った後、戦い始めたのだ。

本気でやりあったらどうだか分からないが、どうやら接近戦では

新九郎に分があるらしく伍助は距離を置いた。

だが距離がひらくと伍助は新九郎に向けて手裏剣を連射する。

深夜で視界も悪いところに飛び道具を連射されては新九郎もさばききれず身を隠すしかなかった。

伍助が俺に近づけば、新九郎が刀を振りかぶってやってきて伍助は逃げ去る。

新九郎が俺に近づけば、伍助が手裏剣を飛ばして新九郎は身を隠さねばならない。

結局俺は、どちらからも襲われずに済んだのだった。

何が役に立つか分からないものだな。

さらに道を進んだ俺達は小高い丘に立つ城を見つけた。

とは言っても最早廃城に近く今にも朽ち果てそうだったが、俺はその城の事をよく知っていた。

「おお。あれが有名な島丘城か」

「知ってるんっすか？」

「ああ。有名だからな」

だが新九郎がそこに口を挟んだ。

「どう有名なんだ？」

「なんだ？ お前も兵法者の端くれなんだろう？ どうして知らない

「いんだ？」

「俺は剣一筋なんだよ。とにかく説明しろよ」

兵法者と言えば軍略にも通じていなければ行けないって言うのに、まったくこいつは。と俺は白い目を向けたが、新九郎ぶはどこ吹く風だ。

「まあいい。十数年前この城を巡って戦になったんだ。しかしこの城の城主はたいした奴ではなかったが、配下への武將に齊賀某という名將が居てな。その齊賀某の活躍で城はなかなか落ちない。そこで攻め手は一計を講じたんだ」

新九郎は「うむうむ」と俺の話を聞いているが、伍助はあまり楽しそうではない。

まあ忍者にはあまり興味の無い話か。

だがこの手の話が嫌いではない俺は構わず話を続けた。

攻め手はその齊賀某さえ居なければ勝てると考え、そこで城主と齊賀某との離間の策を立てた。

約束どおり攻め手の合図に合わせ齊賀某が城内に火を放つ。くれぐれもお間違い無い様に。という手紙を持たせた者を城内に潜り込ませ、そしてわざとその者を城主に捕まえさせてしまったのだ。

勿論手紙の内容は嘘っぱちで、齊賀某が裏切るなんていうのは事実無根だった。

だが城主はまんまと騙され、城の守りの要である齊賀某を手打ちにしてしまったのだ。

こうして強敵をまんまと排除した攻め手は、その後あっさりと城を攻め落としてしまったという。

「ほー。そんな事があったのか」

「ああ。見事な作戦だろう」

新九郎は確かにと頷くが、伍助は相変わらず興味なさげだ。俺は伍助に矛先を向けてみた。

「お前はどう思う？」

すると伍助は肩をすくめ、ことさらおどけた様に口を開いた。

「いやー。まったく見事な作戦ってやつですね。すごいもんつすよ」

だが俺は伍助の態度に違和感を感じた。

いつもどおりの伍助の口調なのだが、無理に明るく振舞っている様にも思えたのだ。

「どうかしたのか？」

「え？ 別に何もありませんよ？」

「いや。それなら良いんだが……」

気のせいだったか？

俺達はさらに道を急いだが、今日中に下野国を出るのはさすがに無理か……。

七重の居場所を探し当てる為、早く京に行きたいのだが気持ちばかりが焦る。

日が暮れいつもどおり伍助が晩飯の為獲物を取りに行った。俺はかまどの用意をする。

そんな俺を、相変わらずまったく働こうとしない新九郎が見つめ満足げに口を開く。

「こつやっていると新妻が夫の為にいそいそと飯の準備をしているよつだ」

「誰が新妻か！」

大体こいつはさつき、俺の事をロミオとか言っただけでなかったか？ だったらお前が女役だろう！ と思ったが口には出さない。

ホモの考える事はまったく分からん。

相手にしても疲れるだけだろう。

だが俺は相手にしない心算だったが、新九郎はそうではなかった。

「さあ、邪魔者がいない内に愛を確かめ合おうじゃねえか」

と身の毛もよだつ事を言いながら、なんと俺に擦り寄ってきてきやがったのだ。

しまった！ かまどを作るのに刀を置いてたんだ。さすがに素手で新九郎を相手にするのは難しい。

「ちよつちよつと待て！」

新九郎は片手突きを得意とする事からも分かるとおり、かなりの怪力である。組討（寝技）になつてはちよつと勝ち目が無い。ましてや俺は今女の身体なのだ。

慌てて飛び退つて俺は逃げたが、新九郎はすかさず俺の手を掴み俺を引き寄せた。

さすがにこれはまずい。

「新九郎。落ち着けて」という俺の顔にも微かに不安な気持ちが表面に出してしまう。

伍助相手ならいつも押し倒されても撃退しているが、新九郎の腕力は伍助とは比べ物にならないし、それに伍助はどこか冗談っぽい雰囲気があるが、こいつはマジで来てる感じがするんだよね……。

だが不安げな表情を浮かべる俺に、むしろ満足げな顔を新九郎は俺に近づけてきた。

「なに、怖がることは無い。優しくしてやるよ」

ぞわぞわつと俺の背に毛虫が這う様な寒気が襲つた。

「う……」

「うっ」

「伍助——！」

俺は耐え切れずについ叫び、その瞬間、新九郎が飛び退った。

今まで新九郎が居た場所を手裏剣が通り過ぎ、少し離れたところに立つ木の幹に突き刺さった。

「ちい！ もう少しだったのに」  
手裏剣が飛んできた方へと顔を向け、新九郎は憎憎しげに言った  
が、茂みから顔を出した伍助はいつもの様に飄々としている。

「てめえこそ、なに抜け駆けしてんだよ」

「伍助！」

伍助の姿に安心して俺は思わず叫んだ。

「六さん俺がついているから大丈夫っすよ」

伍助はそう言うと、俺と新九郎の間に割って入る。

悔しがる新九郎に、伍助の背中から俺は言い放った。

「今度からお前も伍助と一緒に獲物を取りに行け！」

「くそ！」

と悔しがる新九郎を伍助はにやにやと見つめる。

「しかしおかげで助かったよ」

伍助をこんな頼もしく思ったのは初めてだ。

「いや、それほどでもないっすよ」

「いやいや、ほんと危機一髪で……。って、まさか、俺が襲われる  
のを茂みからずっと見てたんじゃないだろうな？」

「え？ そんな事ないっすよ？」

伍助はすました顔でそう言ったが、俺は確信した。



ちっぽい、こいしも油断ならない。

## 2：ナエマ

アサギという明るい鳶色の髪の少年はなんとか一命を取り留めた。私とアニスとは彼を元の温泉宿に運び込み、引き続き魔法で治療したけれど、かなり失血していてこの分じゃ回復には数日は必要だろうと思われる。

「どうですか？ 姫様」

布団に寝かせたアサギの体に手を当てて組織の回復を促す私にアニスが尋ねた。

「うーん……。傷は全部ふさいだはふさいだんだけど」

「まだ危険な状態ですか……？」

「一応峠は越えてるのよ。ただ、失血してて組織の回復にまわすエネルギーが足りないのよね」

それに、さすがに一時間以上ぶっ続けて魔法詠唱していると堪える……。

私の体力にも限界が来そうだわ……。

輸血できれば大幅に回復させられるんだけど、アサギの血液はどうやら私たちや宿の誰とも適合しないタイプでそれもできない。

「この子……。ジパングの人間じゃないかも知れないわね」

「そうなんですか？」

「髪の色といい目の色といい、血液の型もちよっと違うのよね」

改めてアサギの顔を見てみると、穏やかな寝息を立てている。持参の薬を使って痛みを抑えたのと、傷口を完全にふさいだので状態が安定したんだろう。

この年頃の少年にしては色白で、髪の色も合わせると日の光に溶けてしまいそうな儂さを感じる。

「この子、最後に伍助兄貴って言ったのよ」

「それがあの伍助なんですか？」

アニスはちよつと驚いたように目を丸くして言った。

「服装とかもかなり似てない？」

道場で見かけた伍助の黒装束を思い出せば、アサギの黒装束も制服と言つていいくらい似ている。

「そう言われればそうですね。……ああ、思い出した！」

出し抜けにパンと手を叩いてアニスが頷いた。

「伍助は自分のことをニンジャ……と言っていましたよ。ニンジャだからこんなに素早いのだとか」

「ニンジャ？」

「……なんだっけ？ ニンジャって……」。

と首を傾げた瞬間、目の前のアサギがまばたきぐらいの素早さで起き上がり、私の首に右手を回して抱え込んだ。

何この力！？ これが瀕死の怪我人の力なの？？

「姫様っ！ー！」

両手で口を押さえて目を見開き、思わず近寄って来ようとするアニスを威嚇するように私の首を引き上げ尋ねた。

「何者だ……？ 何故伍助兄貴を知ってる……？」

苦しい息の下しぼり出すような声だった。

あ、やっぱりやつのことじゃべってるのね。これだけの怪我負ってちや当たり前だけ。

「命の恩人に対して……ごほつ。ずいぶんな仕打ちねえ……」

「答える……。お前たちも、里が放った刺客……なのか？」

「私たちはねえ……」

「この無礼者！！」

説明しようとする私より早くアニスの平手打ちがアサギに炸裂し、そもそも失血しているところを必死で堪えていたアサギはめまいを起こしたのか一瞬ふらついてはったりと倒れた。

「ア……アニス……！！」

「あら？ ごめんなさい。つい……。大丈夫かしら？」

ぶっ飛ばした相手が重体だったことを思い出してアニスは慌ててアサギに駆け寄る。

アサギは軽く気を失ったらしく、しばらく動けずにいたけれど、やがて頭を押さえながらのろのろと体を起こした。

「大丈夫？ さっきまで生死の境をさまよっていたんだもの。無理しない方がいいわよ。そ・れ・に！ 私たちは敵でも刺客でもないの。伍助って人とは旅の途中偶然会ったのよ」

まだ目を回しているらしいアサギに私はできるだけ優しく、でも断固として言った。

「兄貴と会った……？」

「そうよ。で、あなたが“伍助兄貴”って呼びながら倒れてたから、彼の知り合いなんだと思って助けたの」

「……本当に？」

「私たちに嘘をつく理由がある？ あなたを助けて私たちに何の得があると思う？ 里の刺客だったら仲間がとどめを刺したあなたを助ける必要はないんじゃないの？」

「……………」

安心して力が抜けたのか、アサギは上体を支えていた左腕の力が抜けてその場に崩れるように倒れた。

倒れたにもかかわらず、アサギはなんとか私たちから情報を引き出そうとする。

「あんたたち……本当に、伍助兄貴と……知り合いなのか？」

アサギのしぶとさにやや呆れたのか、アニスが腕組みをしながら肩をすくめた。

「あなたの言う伍助がニンジャとやらで、やたらに足が速くて、女にだらしないうち目気取りだとしたらそうだね」

言いたい放題だけど……まさに、的確。

でも……怪我人に言うことじゃないわよ。アニス……。

「兄貴は……どこに？」

「私たちが会ったのは常陸の国だったけど、今はもうどこかに向けて出発してるかも知れないわね」

それを聞いたアサギが起き上がる前に私はアサギの体を軽く押さえ、魔法で筋肉を弛緩させた。

「う……」

「動けないでしょ？ そんな体で探しに行こうたって無理よ。しばらく眠って体力を取り戻して。すべてはそれからよ」

私はそのまま続けてアサギに催眠魔法をかけて休ませることにした。

この調子じゃ回復がどんどん遅れるばかりだもの。

衰弱している上に魔法で押さえつけられているアサギは、抵抗する力もなく、深い眠りの底に落ちて行った。

アサギは一昼夜眠り続け、私はその間魔法で栄養を送り続け、傷の回復を促進させた。

彼の顔色は目に見えて良くなり、透けるように青白く感じられた頬に赤みを感じられるようになった。

2日後の朝、夜を徹して断続的に魔法をかけ続けた私の方に限界が来て、つい、横たわるアサギの上にかぶさるようにしてうたた寝をしてしまっていた。

私の重みに違和感を感じたのか、とろとろしたまどろみの中にいたアサギがゆっくりと目を開いたようだった。

「う……ん？」

途端にアサギの頭にはつきりした意識が戻ってきたのか、跳ね起きるように上体を起こした。

そして、どうやら起き上がろうとしたものの、お腹の辺りに私が引っかかっているのに気づいて思い留まったようだった。

「あなた……」

アサギは無意識にそろそろと右手を伸ばし、私の髪に軽く触れた。

「ああ……気がついたのね。おはよ……」

疲れ切っていた私は体を起こそうともせず、首だけアサギの方に向けて言った。

しかも、きつと寝ぼけていたのね。

「寝かせて……、あと5分……」

と、起こしに来たアニスカ六三郎に懇願するような情けない声でアサギに訴えていた。

「寝かせて……って、あなた」

アサギは吹き出して、くっくつと笑った。

「あなた、すごい姫様だな。そんなんでよく今まで無事でやってこれたよな」

「やめてよ。六三郎みたいなこと言うのは……」

「六三郎？」

そうよ……。いっつも、私にお説教するんだから……。六三郎は……。

「そなたは女なんだから気をつけないと！」って……。

六三郎……？

私ははっと正気を取り戻し、がばあつと飛び起きた。

「やだっ！ 私うたた寝してたっ!？」

アサギは目を丸くして私の様子を見守り、呆れたように口を開いた。

「俺の上でうたた寝するって……どういう神経してんだ」

「う……ごめんなさいっ」

疲れてたのよ〜！ 自分が眠っちゃってるなんて自覚もなかったし、意識を失った記憶もないのよ〜。

アニスにバレたら大目玉だわ。

「得体の知れない男の上でうたた寝するなんてっ!!！」と。



……今朝は、早朝から薬を買いに（また苦手なじゅうたんで）町に出かけてるからいけないけど。

「てか……俺に何かされるとは思わないのかよ？ あんたに乱暴した男なのに」

ポイント違うだろ……とアサギは苦笑した。

笑うと思ったよりあどけなくて、ああ、この子本当にまだ少年なんだと思う。

なので……、

「何もできないわよ。瀕死の子供だし」

と、つい本当のことを言ってしまった。

「おい。子供って……、俺はもう一人前の忍だぞ。あんたみたいな女ひとりぐらいどうにでもできる」

「一人前って、あなたいくつなの？」

「15。……って、だからポイントはそこじゃねーって」

アサギは少し怒ったように頬を赤くした。

「良かった……。元気になったわね」

体力もずいぶん回復して、普通の状態では会話ができるようになってアサギを見て、私は微笑んだ。

「あ……ああ」

虚を突かれたように、アサギは首を縦に振った。  
それから、急に表情を硬くして尋ねた。

「……どうして俺を助けたんだ？」

1 / 10 秒ほどどう答えようかと考えたけど、別段取り繕う必要はない、後でアサギの記憶処理なり何なりいつでもできるのだと思いついた。

「伍助は私の知り合いと旅をしているのよ」

「兄貴が？」

「ええ。伍助が刺客……？ に襲われたところを彼が助けて、それ以来一緒に旅をしてるみたいなの」

「そうなのか……」

よほど意外だったのか、アサギは考え込むように視線を下に向けた。

「で、知り合いの知り合いの知り合いだったから、なんか縁を感じて助けることにしたのよね」

「……………」

アサギはまた呆れたように口をへの字にして私を見上げた。

な………なによ。その救いようのない愚か者を見るかのような目つきは。

「ふっ」

じっと見返す私の表情がよっぽどおかしかったのか、アサギは再び吹き出した。

「もう……勘弁してくれよ。胸の傷が痛えよ……」

「失礼ね！勝手に笑っという何言ってるのよっ」

怒鳴ったところでアサギの笑いは収まらない。まったくもう！元氣すぎるでしょ！この怪我人は！

「命の恩人にずいぶんいい態度よねっ！あなたは」

「……悪い。くくっ」

謝りながら、「痛え」と目に涙を浮かべて爆笑してる……。

ひとしきり笑った後、アサギは、

「……ありがとうえけど、俺を助けたらあんたらも危なくなると思わなかったのかい？」

と急に真剣な顔をして言った。

「思わなかったわね。それにあなたも危ないわよ。完全に死んだと思われてるから」

「確かに……とどめを刺されたのは覚えている」

「あなたは奇跡的に（魔法の力で）助かったのよ。普通なら（絶対）

死んでたもの」

心の中で括弧を付け足して私は言った。

アサギはしばらく無言で私の目を見つめていた。何を考えているのか、その表情から窺い知ることとはできなかった。

そして、ようやく口を開いた。

「俺はアサギ。あんたの名前は？」

「な……七重」

「七重か……」

アサギは私を見つめたまま掛け布団の端をぎゅっと掴んだ。

> i27037 — 2976 <

「世話になったな七重。俺はもう行く。あんたたちを危険な目には合わせたくない。恩を返せなくて申し訳ないけど……」

そして立ち上がり、窓の方に歩いて行った。

こっそり窓から抜け出そうとしているんだろう。まだ完全な体じゃないのに……。

「待ってアサギ。見て欲しいものがあるの」

私はその背に声をかけた。

アサギはとっさに振り返って私を見た。

「アサギ、私の目を見て」

言われるままにアサギは私の目をじっと見つめた。その動きは自分の意志を手放した木偶人形のようなだった。

私はゆっくりとアサギの前まで近づき、歩みを止めたところで彼の目の前で両手を打った。

アサギは気を失い。床の上にドサリと崩れ落ちた。

あと3日は彼を行かせるわけにはいかない。

このまま行かせては、アサギは伍助の元にたどり着くことすらできないだろうから。

### 3：六三郎

伍助と新九郎が足を引つ張り合つた結果、平穩に旅を続けていた俺は下野国を通り過ぎ武蔵国にたどり着いた。

京までの道のりを考えればまだまだだが、国を超えろというのは一つ節目を通過した様で気分が良い。

「よし！ 武蔵だぞ！」

「武蔵って言つたつて京まではまだかなりあるじゃねえか」

道の脇に立つ「これより武蔵国」と彫られた古びた石碑を通り過ぎ叫んだ俺に新九郎が茶々を入れてきやがった。

折角気分良くしてるつてのに、まったくひねくれた奴だな。

「順調に進んでいるんだからいいだろ。ぶつくさ言つんだつたらついてくるなよ」

だが俺の言葉に新九郎は動じた様子も無く、いや、むしろ俺に言い返されたのが嬉しい様で唇を右上に歪ませ皮肉な笑みを浮かべている。

相手をして欲しくて突つかかってくるつて子供かよ。

しかしふと気付けば、こついつ時は新九郎を牽制する伍助が会話に入つてこないな。

後ろを歩く伍助を振り返ると、俺の視線にも気付かず、いつに無く深刻そうな表情で俯きながら歩いていった。

「どうした伍助？」

「え？ 何でもないっすよ？」

俺が声をかけた瞬間、顔を上げいつも通りの口調で話す伍助だったが、やはりさっきの表情は気にかかる。

「そうか？ かなり深刻そうな顔をしてたじゃないか」

「いやー。実は俺はそろそろお暇させて頂こうかと思いやしてね」

「なんだって？」

あれだけ俺に執着していた伍助の突然の言葉に俺が驚いていると、新九郎が肩をまわして来た。

「それは俺達二人の仲を認めると受け取って良いんだな」

「ちげえよ」

伍助は冷たい目で新九郎を睨み、俺は肩にまわされた新九郎の腕を振り払った。

だが新九郎は余裕な態度でにやっと笑った。

「まあどちらにしろお前が居なくなったら六三郎は俺のもんだがな」

そうかしまった！

いくら女になったからって剣や組討の接近戦主体に鍛えた俺は、

飛び道具なんかでの戦いを主体に鍛えてきたらしい伍助に夜這いされても撃退出来ていた。

しかし、俺と同じく接近戦主体に鍛え、しかも人一倍腕力の強い新九郎に夜這いされて、力づくで組み敷かれてはやばいだった。

それになんだかんだ言っても伍助は手加減してたっばいしな……。一度薬を盛りやがったけど。

「何を言ってるんだ。仲間じゃないか。これからも一緒に旅を続けよう」

せめて新九郎が居なくなるまではと、俺は伍助を引き留めたが、伍助は俺の考えを見透かした様に片目を瞑って見せた。

「いやー。離れていても仲間は仲間っすよ」

ちっ！ 駄目か。だがどうにかして引き留めないと俺の貞操の危機だ。

「でも、どうしていきなり別行動したいだなんて言うんだ？」

「覚えて無いつすか？ ここ俺と六さんが会った場所の近くっすよ」

「そう言えばそうだったかな。お前が追っ手とか言うに追われてたんだっけ」

本当は場所まではまったく覚えていなかったが、とりあえず口を合わせた。

「おいおい。物騒な話じゃねえか」



「だから別行動するって言ってんだろ」

「いやいや。ちょっとまって」

うーん。追っ手に追われている伍助と一緒に居ると、伍助の居ない事を幸いに襲ってくる新九郎と一緒にいるのとどっちが危険なんでしょうか。

だが俺の考えがまとまらないうちに伍助は

「じゃあ。俺はこれで！」

と右手をあげた。

「おう。さっさと行け！」

こうして伍助は新九郎からの暖かい見送りの言葉を受け、道をそれて林の中へと姿を消した。

> i27116 — 2976 <

行ってしまったか……。

しかしこれは今夜から新九郎の夜這いには気を付けなとな……。俺がそう考えていると、突然俺の尻に新九郎の手が這い背筋がぞわりと泡だった。

「てめえ！ なにしゃがる！」

「思ったより柔らかい尻だな。俺はもうちょっとしっかりした尻が好きなんだが」

「お前の尻の好みなんか知るか！」

くそ！ 夜に襲ってくるかと思ったら早速かよ！

俺は新九郎から逃げる為、伍助を追う様に林の中へと足を踏み入れた。

やっぱり伍助を連れ戻すか、いつそのことこのまま新九郎を撒いちまうか。

俺はとにかく走り続けたが、新九郎は離れず追ってくる。

「いい加減観念しやがれ！」

「誰が観念するか！」

しかし伍助が林に入ってから俺もそれほど間をおかずに追っただはずなのに、さすが忍者と言つべきか中々伍助に追いつかない。

伍助も林に入ってから駆け出したみたいだな。

だが、さらに俺が新九郎に追われながらも走り続けると、前の方から男の声が聞こえてきた。

伍助か？ とも思ったがどうやら別人らしい。

俺が足を緩めて木の陰に隠れると、追いついてきた新九郎もさすがに雰囲気察したのか襲っては来ず横に並んだ。

木の陰から顔を出すと、なんと伍助と伍助と同じ様な服を着ている数人の男達が争っている様だった。どうやら早速追っ手が現れたらしい。

「3人も追っ手を送り込んだのにまさか返り討ちにするとはな」

「へっ！ 3人程度で俺を殺れると思っただのか」

ん？ 伍助が3人の追っ手に追われてた時って、俺と伍助が始めて会った時の話か？

それだと伍助は3人の追っ手に殺られかけていた筈だが、伍助ははったりをかましている様だ。

少しでも相手がびびってくれたら隙が出来るかもしれないし、相手に隙が出来れば戦うにも逃げるにも有利になる。

だが残念ながら伍助の目論みは上手くいったとは言いがたい。

「だから今度はこうして6人で来たんだろうが」

と男達の中でも格上らしい奴が言い、その言葉に伍助が小さく舌打ちをした。

まあ実際は3人でもやばかったんだから、6人相手じゃ話にならないだろうな。

男はいつも飄々としている伍助が表情を変えたのが嬉しいのか。

楽しそうに笑う。

「そんな顔をするな。お前が寂しくない様にちゃんとアサギを先にあの世に送っておいてやったんだからな」

「なんだと！」

「恨むんなら自分を恨みな。お頭に逆らっておいて手前の弟分が無事ですむとも思ってたのか？ アサギが死んだのは手前の所為なんだよ！」

「くそ……！」

おいおい。なんだかかなり酷い話になってそうだな。

これはさすがに捨てては置けないが、今はまだ飛び出すべきじゃないだろうな。

以前伍助は2人相手なら勝っていたし、俺や新九郎は伍助の様な忍者じゃないが伍助に引けは取らないはずだ。3人对6人なら勝算は高いだろう。

だが以前伍助を襲った奴らより一人一人が今回の奴らの方が強い可能性もある。

ここはぐつと我慢して奴らの注意が完全に伍助に向いた時に後から切りかかるべきだ。

俺がそう考えて身を潜めていると思いがけない所から声が上がった。

「それは聞き捨てならんな！」

なんと新九郎が木の陰から奴らに向かって姿を現しやがったのだ。

まさか伍助が殺られそうって時に新九郎が手助けしようとするのは意外だったが、それよりもこの段階で姿を現すのはもっと意外だった。

駄目だ。こいつは馬鹿だ。

こうなったら俺だけでも隠れておこう。

相手も今新九郎が姿を現したのに、さらにもう一人隠れているとは思うまい。

思わぬ男の出現に身構える男達に向かって、新九郎が啖呵をきつた。

「1人相手に6人がかりでも男らしくねえところを、弟分まで殺すとは許さねえ！俺が相手だ！」

おお。意外と男気があつたんだな。

と俺が思っていると新九郎の顔が、俺が隠れる木の方へと向いた。

「そうだろ。六三郎！」

「なに！もう1人居るのか！」

新九郎、死んでくれ……。

あまりの馬鹿馬鹿しさに脱力しそうになつたが、相手を勢い付けせる訳にもいかない。

俺は今更ながらも、腕を組みあえて堂々と姿を現した。

「ああ。まったくだ。聞き捨てならん」

「くそ！まさか伍助に仲間が居たとは。お前ら油断するな！」

男は身構えながら後ろに立つ男達に声をかける。

隠れておいて後ろから襲う作戦が駄目になつた以上、もう全力で戦うしかないが一応伍助に確認しておこう。

「伍助。何か聞き出す為に1人くらい生かして捕まえた方が良いか？」

「全員殺つちまっつかまやしやせんよ。どうせこいつらも言われた事をやっているだけで、詳しい話なんか聞いてやしねえんっすから」

伍助は吐き捨てる様に言ったが、自分を殺しに来た相手にもかかわらず、微かに哀れんでいる様に聞こえたのは気のせいかな？

だが今はそれを深く考えている暇は無い。

「よし！」と叫ぶと、俺は男達に向かって突進した。

こいつらが伍助と同じ技を使うなら距離を置かれては面倒だ。一気に突っ込んで接近戦に持ち込む必要がある。

しかし敵もそれは分かったもので、俺の突進に飛び退る。

「ぐわっ！」

男達のうち1人が叫び声をあげて倒れた。

見ると胸に手裏剣が刺さっている。俺の突進に男達が逃げる方向を予測した伍助が放つたらしい。

これで後5人。

俺達は奴らの手裏剣を警戒し木々に身を隠しなりを潜めている。

そして奴らも姿を隠した。

いくら忍者でもこんな森の中じゃ地面の草木を踏まずには進めな

いし、そうすれば音が鳴る。  
そしてそれはこっちも同じ事。お互い耳をすませて位置を探りあ  
う。

だが突然前方の茂みが大きく揺さぶられ、ガサガサと大きな音が  
辺りを支配した。

何かしてくるのか？ と思った瞬間背後に殺気を感じ考える前に  
身を伏せた。

カツカツと寸前まで俺が立っていた場所を走り抜けた手裏剣が木  
の幹に突き刺さった。

ちっ！ 1人が大きな音を出して他の奴が移動する足音を紛らわ  
せる作戦か。

どうやらこんなところでの戦いは忍者である奴らの方に一日の長  
がありそうだ。

ちよつと不味いか？

ガサつと俺の左前方で音が鳴る。どうやら新九郎も襲われて身を  
伏せたみたいだな。

だが不意にドサツと上から男が降って来た。

その背には手裏剣が刺さり、その手裏剣が致命傷なのか落ちた所  
為かは分からないがすでに事切れている。

そうか。

奴らは森の中の戦いに不慣れな俺や新九郎を狙ってくるが、伍助  
はその俺達を見張って、俺達を狙う奴らを逆に狙っているという事

か。

とにかくこれで後4人。

よし。伍助の意図が分かった以上、こっちも動くか。

間違いなく敵の罠だが、あえて音が鳴る茂みに向かって俺は走った。

奴らは知らないだろうが俺は着込み（鎖帷子）を着ている。

着込みは刺す物には弱いので手裏剣を完全には防げないがそれでも1、2回くらいなら耐えられるだろう。

俺は頭を守るように身をかがめながら突進する。

「があ！」

俺の背後でくぐもった声が聞こえ、その後何か重いものが地面に落ちる音。

どうやら俺を狙った男をまた伍助が仕留めたらしい。

後3人。

俺は音が鳴る茂みへと突き進み、伍助の援護のおかげか結局手裏剣の攻撃を受けないまま茂みへと近寄る。

しかしガサガサという音は鳴り止まない。

俺は直感的に茂みを迂回して音が鳴る茂みの裏のさらに後方に回りこんだ。

するとやはり男が紐を片手に身を伏せていた。

茂みに隠れていたのならあそこまで俺が近づいてたのに逃げもせ



ず、平気で音を鳴らし続けられる訳が無いのだ。

「うわ！」

俺の出現に驚いた男は飛び跳ね逃げようとするが、俺は一気に距離を詰め奴の胸に突きを食らわして仕留めた。

後2人。

茂みで音を鳴らしていた男を俺が倒した為、辺りは静寂に包まれた。

だが暫くすると微かに草木を踏む乾いた音がするかと思うと、遠ざかっていく。

「六さん！ 奴ら逃げる気っすよ。追わねえと！」

足音を消す必要が無くなったのか、音が鳴るのを気にする様子も無く伍助が俺に近寄ってきた。

「いや。逃げる奴まで殺らなくていいだろう」

俺の言葉に奴らを追いかけていた伍助の足が止まった。

「本当に良いんですかい？」

「ああ。無駄な殺生はしたくないからな」

しかし伍助は不満そうだ。

「確かにお前の弟分を殺した奴らだ。憎いのは分かるが……」

「いや、なんとも思っちゃいねえと言やあ嘘になるっすけど、奴らにそれをやれって命令をした奴がいるっすからね」

「じゃあ、どうしてあいつ等を追おうとしたんだ？」

俺はもう終わったのかと茂みから顔を出し歩いてくる新九郎を横目に見ながら口を開いた。どうやらあいつも無事だったか。

すると伍助はまだ気付かないのかという風に肩をすくませた。

「だってあいつ等を逃がしたら、六さんも敵だって報告されてうちの里の奴らに六さんも狙われるっすよ」

しまった……。

俺は伍助の言葉にがっくりと肩を落として天を仰いだ。

どうやら面倒な事に巻き込まれたらしかった。

#### 4：ナエマ

「ところであんたら伍助兄貴とは常陸の国のどこで会ったんだい？」

私の魔法で更に丸1日、合計3日間熟睡させられたアサギは、日常生活を送れるまでに回復していた。

あと3日もすれば体力もずいぶん回復して、軽い運動ぐらいならできるようになりそうだ。

……旅に出て暗殺者と立ち回れるほどには回復しないかも知れないけど。

まあ、アサギからすれば当然の質問よね。

彼は伍助を探して危険な目に合いながらここまで来たんだし（事実死にかけてたし）。

でも、なんて答えたらいいのかちょっと躊躇してしまった私とアニスはアサギの質問に顔を見合わせた。

アニスとはかく、私は「私として」伍助に会ったわけじゃないのよね。

魔法で変装してアサギぐらいの少年の姿で伍助に会ってるから……。

「伍助と会ったのはアニ……じゃなくて八重なのよ。詳しくは八重に聞いて」

私はにっこりと笑ってアサギの矛先がアニスに向くように仕向けた。

アニスはぎょっとしたように目を剥いて私を見た。

「教えてくれないか、八重さん。俺はどうしても兄貴に会わなくちゃならねえんだ」

アサギがピユアで真摯な眼差しをじっとアニスの方に向ける。

「え……ええ」

彼の熱意に打たれたのか、アニスは少し困ったような表情で頷く。

「私が伍助さんと会ったのは常陸の国の小さな道場なの」

「道場？」

「ええ。ただ、同行者の六三郎さんという方が道場を出て旅に出られる予定だったので、今も同じ道場にいるかどうかはわからないわね……」

実は水晶玉で確認した結果では、六三郎たちはもう既に道場を出て行ってわかってるのよね。

ただ、偶然にもこっち方向に旅してきてるみたいなんだけど。

「……そういえば、その六三郎って人は七重さんの何なんだ？ 知り合いだって言ってたけど」

アサギはちらりと私を見て、それからつと目を逸らした。

あらぬほうを見て俯いているので表情がわからないんだけど、なんとなく決まり悪そうに見える。

あら？ なんだか不思議な態度ね。

でも、私もなんとなく六三郎と自分の関係をアサギに話すのは照れくさいんだけど……。

後でアサギの記憶を操作するのであれば、ここで嘘をつく必要はないかな。

「えーっと……。一応……。ね。“夫”ということだ」

私の答えを聞いたアサギは、頷いてぼそつと呟いた。

「……そうか」

あらら？　なんか気まずい雰囲気になっちゃった……？

アサギは神妙な面持ちで何か考え込んでるみたいだし、私は照れも手伝って次に何を言うべきか迷ってしまったし、アニスも私の前に口を開くのは控えようと思っっているみたいで、私たちの出方を待っている。

アサギが何故命を狙われているのか、おそらく伍助も狙われているんだろうし……。だとすれば当然六三郎も危険なわけよね？

それを思えば、アサギに色々と聞いておきたいことはあるんだけど。

「あんたたちは何者なんだ？　身分のある女が二人旅なんてするもんじゃねえだろっ……？」

やや長く続いた沈黙を破って、遠慮がちにアサギが口を開いた。

こういう質問をあらかじめ予想していたのか、動じる様子のないアニスが淀みなく答える。

「確かにそう思われても不思議はないわね。姫様と私はさる事情があつてこの国を旅しているの。詳しく説明することはできないけど、その事情のために今城に帰ることはできないのよ。ただし、誰かに

追われているわけでも命を狙われているわけでもないから、私たちと一緒にいることでああなたが危険な目に遭うことはないわ」

「さる事情……か」

アサギは納得がいくようないかないような表情になった。

ので、もうぶっちゃけてもいいかな」と本当のことを言うことにしたわ。

(繰り返すけど) 記憶処理はいつでもできるしね。

「意に沿わぬ結婚から逃げ出してきたのよ」

「姫様！」

「余計なことを……」とアニスが非難めいた眼差しで私を睨んだ。私は「いいからいいから」とアニスをなだめるように言って、

「それでこの国に来て出会った六三郎と結婚したのよ」

と付け加えた。

「……ふうん。つまり六三郎ってのは意に沿う相手だったわけか」

アサギは少しおかしそうに笑うような表情になった。もしかしたら呆れてる？

一国の姫が城を飛び出して異国のどこの馬の骨とも知れない男と簡単に結婚したって。

まあ……、他人にどう思われてもいいけどね。

「そういうわけ。で、あなたたちはどうして命を狙われたの？ 伍

助が里を抜けたのはどうして？」

こちらの事情はすっかり話したのだから、アサギも少しは心を開いてくれないかしら？

そう思つて聞いてみると、アサギは肩を竦め、私と同様いたつて簡潔に答えた。

「俺と兄貴が狙われてるのは抜け忍だからだよ。悪いが、兄貴の事情は俺が話すわけにはいかねえ」

「抜け忍……？」

「忍者の仲間から抜けることだ。裏切り者と見なされて殺される」

「なるほど、事情はわからないけど、あなたたちには殺されるとわかつてても仲間を抜ける理由があつたのね」

「……そうだ」

六三郎はその事情を知つてて伍助を同行させてるのかしら？

まあ、あの人、あまり物事を深く考えないところがあるから、襲われてもなんとかなると思つてるのかも知れないけど。

今のところ、追つ手が常陸の国にたどり着いた様子はないみたいだし……。

「アサギさんと伍助さんは兄弟なのかしら？」

アニスが首を傾げて尋ねた。  
うん。それはないわね。

アサギの髪と目の色はジパングの人間にしてはかなり淡い。はっきり言って異国人としか思えないくらいだもの。

伍助も髪は茶色い方だったけど飛び抜けて目立つほどではないし、顔立ちもアサギとはかなり違う。

“兄貴”と呼んでいるものの、おそらく血のつながりはないんじゃないかしら。

「俺は……捨て子だったから、兄貴の親父さんに拾われて、兄貴とは兄弟同然に育ったんだ」

「……そうだったの」

「兄貴は強えが、さすがに一人じゃ難しい。このままじゃ追っ手にやられちまつかも知れねえ……」

アサギは居ても立ってもいられないというように呟いた。

「大丈夫よ、六三郎がいるから。あと、なんかもうひとり怪力大男も一緒だし」

安心させようと思って言っただつもりなんだけど、アサギは私をきくと睨んで言った。

「忍者は人殺しのための訓練を受けてるんだぜ。その辺の素人が束になっただって勝ち目はねえよ」

私もちょっとムキになって答えた。



「六三郎はその辺の素人じゃないわよ。剣の達人なんだから。ひとりで五人まとめて倒したりするし」

嘘は言っていないわよね。初めて会ったとき、六三郎は野盗五人を切り捨てていたんだもの。

……まあ、五人中四人は寝てたけどね。

「本当かよ？」

「本当よ。だから、アサギはもう3日はここで療養して傷を治しなさい。はつきり言っただけで今追いかけても行き倒れになるか、よくして伍助たちに合流できても足手まといになるだけよ」

こつまではつきり言われてはぐうの音も出ないのか、アサギはやや無然とした表情で黙り込む。

アニス苦笑して私とアサギを代わる代わるに見ている。

ま……言い過ぎかも知れないけど、本当のことだものね。

「伍助と六三郎も心配だけど、アサギにも死んでももらいたくないのよ。せつかく助けたんだし。命を粗末にするのは許さないからね」

「……強引で、勝手な姫様だな」

むくれた表情のままアサギは呟いたけど、怒っているというよりは呆れているように見えた。

アサギがいくら焦っても最低あと3日は十分に栄養を摂って、それから傷の治癒も施しておかないとね

最大限頑張って魔法を使えば、完治……は無理だけど、多少暴れても傷が開いたりしなくなるだろう。

……私の体力に限界が来るかも知れないけど。ふう……。

アサギが隣の部屋で寝入ったのを見届けてから、私とアニスは水晶玉で六三郎たちの様子を見ることにした。

意識を集中して、映し出した人のことをイメージする。

普段なら大して消耗する魔法ではないんだけど、1時間おきにアサギに治癒魔法をかけているのでさすがに堪えてるのね。

安定した映像を映し出すまでにいつもより時間がかかってしまったわ。

「ふう。やっと映った」

「大丈夫ですか？ 姫様」

「うん……。ちょっと疲れてるかな」

水晶玉の中には、六三郎と伍助、それから、何故だか仲間になっているらしい道場破りの大男が映っていた。

三人はかまどを囲んで、何か話しながら食事をしているようだ。

「六三郎さんたちは無事の様子ですね。良かったですわ」

アニスも心配だったのか、元気な六三郎たちの様子を見て、ほっと安心したような笑顔になった。

「剣の達人がふたりと優秀なニンジャがいるんだものね。たとえ追っ手が来たとしても返り討ちにしちゃうわよね」

どちらかという都希望観測的な言葉だったけど、そう信じてたい。

あの夢が正夢だとは思いたくないし……。

「それにしても、どうしてこの道場破りは一緒にいるんでしょう?」

「それは謎だわね。もしかしたら、伍助と同じで六三郎に一目惚れしたのかも知れないわね」

私はふふつと笑いながら冗談を言った。

ふざけて言っただつもりだったけど、案外それが真相だったりして……。まさかね。

六三郎たちの無事を確認すると、私は改めて水晶を撫でて、故郷のアムランをイメージした。

ビスミラー。私の魔力の元を映し出したまえ。  
お母様の生まれた魔族の国を私に示したまえ。

……水晶は一瞬雲の中を通り過ぎたような映像を映し出し、虹色に光ったかと思うと、次の瞬間には真っ黒になった。

「ダメだわ……。やっぱり水晶では探せない」

「何を探しておられるんですか?」

アニスは真っ黒になった水晶を覗き込んで尋ねた。

「お母様の生まれたところ。魔族の国を映すことはできないかと思っ  
つて……」

「……ああ」

「でも、無理みたい。きつとイメージが抽象的過ぎるのね」

「そうなんですか」

「うん。やっぱりお父様に教えてもらうしかなさそう……」

簡単には教えてもらえない気がするけどね……。

黙って城を飛び出してきた私に激怒してるだろうし。

お見合い相手のシャルルカン王子をほったらかして姿を消しちゃつたから、シャブワとの関係に問題が発生してなければいいけど。

(マハネがいるから大丈夫だと高をくくってただけだね)

それにしても、人の気持ちって不思議なものね。

六三郎に会ってからというものシャルルカン王子のことを思い出すこともなくなっていたわ。

こんなにすんなり、むしろマハネと王子が幸せになっていたらいいなと思えるなんて。

ほんの2ヶ月前にアムランにいた私が別人みたい。

「大丈夫ですか？ 姫様？ ずいぶんお疲れのようですけど……」

はつと我に返ると、心配そうなアニスが正面から私の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫よ。この2ヶ月で私ってずいぶん変わったなあ……としみじみ思ってただけ」

たった2ヶ月の間に結婚して、男と女がどんな風に結ばれるのかを知って、その結び目がどんな風にほどけていくのかを知りそうになってる……。

六三郎は私を探してくれている。ジパング中を歩いても見つけ出すと言ってくれていると聞いたわ。

だけど、本当の私を知っても、六三郎は私を好きでいてくれるかしら？

私のために、ジパング中を周って追いかけてきてくれるかしら？

私が六三郎に呪いをかけた魔女だと知っても……。

5：六三郎

伍助への追っ手を撃退した俺達は、急いで森を抜け隠れるのには丁度良い洞窟を探し当て、そこで改めて伍助の話聞く事にした。

焚き火を付けて俺達はその周りを囲む。

「どうしてこんなところで休むんだよ。夜の間も休まず先に進んだ方が良いだろ」

「馬鹿か？ 忍者相手に夜に戦う心算か。見つからない様に隠れながら少しずつ進んだ方が良いんだよ」

おいおい早速ぶつかるとなよ。

「新九郎も伍助もいい加減にしろ！」

「こいつが俺の事を馬鹿つて言いやがったんじゃねえか」  
「だってこいつが馬鹿なんつすよ」

二人は指差しあつて俺に訴える。

まあ新九郎が伍助の危機に飛び出した事で二人が仲良くなつて、手を組まれたらやばいと考えていたので俺にとっては悪い状況じゃないのだが……。

女を男二人で挟んで、なぶ 煽るとはよく言ったもんだ。

さすがに新九郎と伍助の二人がかりで迫られては俺も手も足も出ない。文字通りなぶ 煽られてしまう。

とはいえ、さすがに毎回口論されてはうんざりする。

「いいから黙れ！　話が進まないだろ！」

新九郎は舌打ちし、伍助は「へいへい」と返事する。

まったく！

二人の態度は反省していると思えないが、ここでそれを追求して  
いてはそれこそ話が進まない。

「それでどうして追われているんだ？　前は上役の女房に手を出したから追われているって言うってたが、それにしてお前の弟分にまで手をかけるとは尋常じゃないぞ。もう俺達も狙われているんだ。正直に話して貰うからな」

俺がそう言うのと伍助は言い逃れるのを諦めたのか、それとも俺達を巻き込んだのを伍助なりに責任を感じたのか、いつになく神妙な顔で語り始めた。

伍助は関東一帯で活動する忍者の里で下忍の子として生まれた。

そこで生まれた者は男は男なりに、女は女なりに忍者として物の役に立つ様に小さい頃から訓練される。

里には多くの子供達が居たらしい。

忍者は少数の上忍が多数の下忍を束ねる形で成り立つが、はつきり言って上忍にとって下忍は消耗品だった。数は多ければ多いほど

いい。

伍助は里で生まれたが、捨て子を拾ってくる事も多く、時にはさらって来る事もあった。

伍助の弟分とついアサギは捨て子だったらしいが、伍助が色々面倒を見てやっているうちに、すっかり伍助になつて「兄貴、兄貴」と言つて慕つていたらしい。

伍助は下忍の子なので裕福ではなかったが、それでも親が里に居る分他の捨て子やさらわれて来た子などよりは暮らしは良く、特に不満は無かった。

というより、ずっと忍者の里で暮らし下忍は上忍に従うものだと教えられて育つた伍助に、環境に不満を持つなど夢にも思わない事だったのだ。

それどころか

「今日の俺の働きは良かったと、上の方々に褒められたぞ！」  
そう言つて上機嫌になる父の姿に伍助も、いつか自分も「上の方々に褒められる下忍」になると、訓練にはげみ任務につく日を夢見ていたのだった。

だがある日、伍助の父は任務に失敗して敵に捕まり処刑されてしまった。

伍助は父を失い涙を流したが、それでも任務を遂行する為には危険はつき物であり、父が亡くなったのは父の技量不足の為。

心のどこかでそう考えている部分もあったのだった。



伍助は父の様な失敗はしないと誓い、さらに熱心に訓練に明け暮れ里でも一、二を争うまでの忍者に成長した。

そして数々の任務をこなし、子供の頃からの望どおり上の方々からお褒めに預かる事も多くなった。

だがある日、特に難しい任務をこなしその褒美にと伍助は上忍の屋敷にまで招かれた。

こんな事は滅多にはない。

伍助は今まで見たことも無いご馳走を振舞われ夢見心地で居たが、廁へと行き部屋に戻り襖の前まで来ると上忍達の話し声が聞こえた。「まさかあやつの息子がここまでの手だれとなるとは……」

どうやらあやつとは、伍助の父の事らしい。伍助はつい聞き耳を立てた。

上忍と言っても実は血筋により下忍達を束ねる身分というだけで、実際技量において優れているとは限らないらしい。

上忍たちは襖の前で伍助が聞いているのに気付かず話を続けた。

そして伍助は父の死の真相を知ったのだった。

「それでお前の父親はどうして亡くなったんだ？ 任務で亡くなったんじゃないのか？」

焚き火の明かりに照らされる伍助の顔を見つめながら俺は問いかけた。

「六さん。ちょっと前に島丘城の話をしてたじゃないっすか」

「そついえばそんな話もしたな」

下野国に入ったところで新九郎に話してやった謀略により落とされた城の話だ。

「あの時に偽の書状を持って城に侵入して捕まった奴って居たじゃないっすか」

「ああ、居たな」

「その捕まった奴ってのが俺の親父なんっすよ」

「何だつて！」

「偽の書状を持った奴をわざと捕まえさせて仲間割れを起さす。まったく見事な作戦つてやつなんでしょうがね。やらされる方にとつちやたまつたもんじゃねえっすよ」

「伍助……」

それで島丘城の話をしている時、伍助の機嫌が悪そうだったのか……。

「俺の親父はそんな捨て駒に使われるなんて思ってもいやせんでした。でも親父が教えられていた書状を渡す相手が違つていやした。いや渡す相手の名前はちゃんと教えられていやしたが、そいつが居る部屋の場所が嘘を教えられて忍び込み、全然違う相手に書状を渡しちまつたんっすよ」

そこまで言うと伍助は一瞬黙り込み口元に笑みを浮かべたが、そ

の笑みはどこかまがまがしく見えた。

「城の奴らは親父の事を、書状を渡しに来て部屋を間違えた間抜けって言いながら殺したらしいっす」

伍助の声はむしろ楽しげにすら聞こえた。自分の父親が死んだ理由のあまりにも馬鹿馬鹿しさに。

「俺だって命を捨てる覚悟がある危険な任務ってのが有るのは分かりやす。実際そういう任務だってこなして来やした。ですがね。死ぬと分かってる任務ってのは話が別だ」

その時、焚き火にくべた木の枝が乾いた音をたて弾けた。

「世間ではね。忍者は任務を遂行する為には命を捨てるって言われているらしいっすね。まったくかっこいい話じゃないっすか。かっこ良過ぎてヘドが出ますよ」

俺は伍助の言葉に微かに罪悪感を感じた。

実際俺が何かした訳じゃないが、俺も伍助が言う様に忍者の事を自分の命を顧みない冷徹な奴らだと考え、そして伍助の事を「忍者らしくない奴」と思っていたのだ。

「俺は決めたんですよ。誰にも命令されねえ。好き勝手に生きてやる。里に縛られるなんて真っ平だってね。だがお頭だけは生かしちゃおけねえ。あいつだけは俺の手で殺してやる。そう誓ったんっす」

火に照らされ浮かび上がる伍助の顔は、いつもの飄々としたおちやらけた物は鳴りを潜め、静かな決意が感じられた。

だが里からやってきた6人の追っ手にもてこずる様じゃ、話にならないと思うんだが……。とは言えず、俺は控えめに聞いてみた。

「大丈夫なのか？ 里にはかなりの人数が居るんだろ？ お頭つてのを倒すのも難しそうだが」

「ええ、さすがにまともに全員とやりあう心算は無いですよ。どうかしてお頭と一騎打ちに持ち込みたいんですが、さすがにお頭ともなると血筋だけで無能って訳じゃない。里のお頭として恥ずかしくねえ様について子供の頃から村の手だれ達に特訓を受けてて、そう簡単に勝てる相手じゃねえ。だからお頭の側近の上忍の女房に近づいて何か有利になりそうな情報を探ろうとしたんっすよ」

「なるほど……」

しかしそれでもすでに伍助の裏切りがばれている以上、情報を引き出すのは不可能。お頭とやらを狙うのは難しいと思うんだがな……。

「3人でやれば何とかなるだろう」

突然の声に俺と伍助は驚いて新九郎を見つめると、新九郎は舌打ちしそうな顔になりそっぽを向く。

「どうやら照れているらしい。」

「どうせ俺も六三郎も狙われているんだから、3人でやっちゃまった方が良くないかねえか」

「どうやら伍助の話に、またもや新九郎の「男気センサー」が発動したらしいな。」

俺が苦笑しながら伍助の顔を見ると、伍助は意外にも真面目な表情で新九郎の横顔を見ていた。

おいおい。まさか新九郎に惚れたんじゃないだろうな。そいつに惚れたら色々大変だぞ。

まあ根っからの女好きの伍助が新九郎に惚れる訳は無いか。純粋に感謝しているんだろう。

だが実際どうしたものかな。

相手は多勢。

しかも逃げながら飛び道具を投げってくるんじゃない、俺や新九郎は不利だ。

多勢を相手にする時は奇襲で敵の大将を倒すつてのがセオリーだが、そのお頭の周りには側近とやらが守ってるんだろうし……。

ん？ そう言えば、側近つて上忍つて奴らなのか？

「伍助。お頭を殺るつていうより、里を潰して良いか？」

「え？ そりゃそれが出来りゃそれに越したこたぁありやせんが、そんな事出来るんっすか？」

「いや、というより、その心算でやらないと手も足も出ない」

「勝てるんなら何でも良いが、それでどうやるんだ？」

「下忍を束ねる上忍達はたいした事ないんだろ？」

「ええ。全員って訳じゃないですがたいした事ありやせん。出来るって奴にしたって、まあ俺や六さんに比べりゃ屁みたいなもんでさ」  
「俺の名前も入れるよ」

新九郎は不満げに口を挟んだが、ややこしくなりそうなので話を進める。

「その上忍を狙おう。里に入り込んで上忍達を切っていけば下忍を束ねる奴が居なくなつて里は混乱するはずだ。そうすればお頭とかいう奴を狙う隙も出来るだろ」

「上忍を狙つたら配下の下忍が立ち塞がって邪魔するっすよ？」

「俺や新九郎が忍者の相手が苦手なのは逃げながら飛び道具で攻撃されるからだ。上忍の前に立つ塞がるっていうんなら敵じゃない。立ち塞がらずに飛び道具だけで攻撃して来るっていうならその間に上忍を切つてやる」

「なるほど……」

「で、どうやって里に近づくんのだ？ 向こうも警戒しているだろう」

「それは伍助に聞くしかないな。伍助。里を抜け出して来たんだつたら抜け道とか知ってるんだろ？」

「いやー。それが、一応味方のふりをしつつ上忍の女房に手を出して情報を集めてたんっすけど、丁度任務で里の外に出ている時にそれがばれてそのまま逃げたんで、抜け道を通つて逃げたとかじゃねえですし、抜け道なんてのも知らないんっすよ」

伍助は「てへっ！」とばかりに舌を出した。

駄目じゃねえか……。

「どうするんだ？ 六三郎」

うーん。さすがにそれは予想外だったな……。

「どうにかして里に近づけないか？」

「いやー。見つからずに近づくのは中々難しいっすよ」

やっぱりそうか。どうしたものかな？

俺が考え込んでいると新九郎がじれったそうに口を開いた。

「里は逃げねえんだから、突っ込んできや良いんだよ。もし敵が邪魔して立ち塞がりやがったらそんなときや立ち塞がる奴らを全員切つてやる」

強引だが、確かに俺達が里に突入するのを防ぐには敵も逃げればかりは居られないか。

しかし目立ち過ぎるよな……。

出来ればこっそりと里に入って、上忍の屋敷を狙って倒してまた姿をくらまして。つてのを繰り返して敵の戦力を削って行きたいんだが。

だがグダグダ考えて居ても仕方が無いか。

「よし！ とにかく里に向かおう。里に着くまでに何か思い付くかも知れないし、里に着いてからも暫くは抜け道が無いか探そう。見つからなかったら新九郎のいうとおり突っ込むしかない」

「よし！」

「分かりやした」

こうして俺達は、伍助の敵であるお頭を倒すべく、忍者の里へと向かったのだった。



## 6：ナエマ

「アサギがないっ!？」

早朝、なんとなく嫌な予感がして布団を跳ね除けるようにして起き上がり、隣の部屋に駆け込むとアサギの姿が見えない。

無人の部屋には無造作にたたまれた布団が部屋の隅に寄せられている。

とつくに峠は越えてるし死ぬことはないけど、記憶操作もしないし、あのまま六三郎たちに合流されるとアサギの口から私たちのことが六三郎に知られることになってしまう……。

「姫様、どうしたんです？ 血相変えて」

驚いて目を覚ましたらしいアニスがいつの間にか私の隣に立っていた。

「アサギがないの!」

「……あら？」

「まだその辺にいるかも知れないから、私探してくるわねっ！ アニスはこちらで待ってて!」

と言うなり、外出着に着替えて、私は宿を飛び出した。

万一アサギが帰ってくるつもりでちょっと表に出ただけなら、私

たちがいないとそれこそ本当に行ってしまうかも知れないし（今、既に行ってしまったてるのかも知れないけど）、アニスには待機してもらったほうがいいわよね。

宿を飛び出して、常陸国方向に向かう獣道を奥へ奥へと走って数分もすると……、

「あ~~~~！ 私ってバカ！！ 水晶玉見てくればよかった！！」  
と自分の間抜けさ加減に気づいてがっくりと脱力してしまった。

息を切らせて、体中から汗をにじませながらも、アサギの気配を感じる事ができないかと神経を研ぎ澄ます。

……誰かがここを通った気配が残っている。

草の上を踏み歩いた後の新しい青臭さが漂っている。

ちよつと待つて！ でも、アサギとは限らないのよね。

この辺りの村人かも知れないし……、それどころかニンジャの追っ手という可能性もなくはないわ。

私は用心深く気配を封じる結界を周りに張ると、改めて深呼吸をし、青臭い匂いの後を辿って進んだ。

10分も歩いただろうか？ 滝水が流れ落ちるような音と共に、涼しい粒子が肌に当たるのを感じた。

この辺りには滝があるんだわ……。

草木を掻き分けて水音のする方を見ると小さな滝と小川が見える。

そういえば、滝で水浴びして六三郎に覗かれたことがあったわね……。

まあ……、わざと覗いたわけじゃなさそうだったけど。

そんなに昔のことじゃないのに、なんだか懐かしい思い出のような気がして胸の中に切なさが広がった。

二度と会えない……訳じゃないのに。

六三郎と交わした会話や歩いた景色を思い出しながら歩いていると、滝の音がだんだん大きくなっていった。

どうやら、すぐ先にわりと大きな滝があるらしい。

六三郎との記憶で意識のほとんどが占められていたせいか、ほとんど無意識に私は目の前の藪をざっと掻き分けた。

急に視界が開けて、小さな池ぐらいの滝つぼの中で滴り落ちる滝の流れを浴びている素っ裸（？ 正確にはフンドシ??）とかいう下着を身につけただけ）のアサギが飛び込んできた。

「きゃあああああ〜！！！！！！」

いきなり全裸（に近い姿）で現れたアサギを目にした私は、心の準備ができていなかったせいで絶叫してしまったわ。

それにしても、山の中で私の声の響くこと、響くこと。

「うわっ！！」

その絶叫に驚いたアサギも連鎖反的に悲鳴を上げて、ザブンと水の中に沈み込んで身を隠した。

……が、「ちょっと待てよ。何も隠れる必要はないだろう」と思ったのから秒後ぐらいには頭までずぶ濡れになった状態で水から体を出して立ち上がったけど。

「姫様？」

全身からポタポタ滴をしたたらせながら首を傾げ、こちらに近づ

いてくる。

「な……、なんて格好なのよっ！」

目の前のアサギの姿を払いのけるように手を振って後ろを向いた。

「どうしたんだよ？」

「いいから服を着なさいっ！ 服を！」

「いや、まだ服乾いてないし……」

「はあ？」

「だから、服洗っちゃったし。今乾かしてるから」

「はあ……」

答えながらアサギがどんどん近づいてくる気配がわかる。

「姫様、よくここがわかったな」

「それよりっ！ 何してるのよ？ なんで黙って出て行ったりしたの!？」

「いや、別に出て行っただけじゃねえんだけど……」

ザツと音がして、アサギが水から上がったのが判った。

それから木の枝に引っ掛けてたらしい着物を下ろして、パンパンと叩いて水気を切るような音がする。

ドスンと私の横に腰を下ろす。

「ほら、これでいいか？」

横目でちらりとアサギを見ると、腰から下に着物を被せて寝転がっている。

まだ上半身は露わだったけど、まあ……男の上半身が裸だからってどうってことないわね……。

「……いいけど」

なんとなくまだ照れくさい気がして不機嫌な顔のまま、アサギの横に腰を下ろした。

アサギの胸や腕にはまだ襲われたときの傷跡がくつきりと残っている。

完全に塞がってはいるけど、この跡が消えるまでにはもうしばらく時間がかかるわね。

そんなに長い間、一緒にいることはできないけど……。

それにしても、意外に逞しい体つきだったのね。

さんざん包帯とか替えて見てるのに、気づかなかったわ。

六三郎と比べてもかなり筋肉質な感じ。

やっぱりジパングの人間とは体型も少し違うような気がするわね……。

「出て行っただんじゃねえよ。まだ、ちゃんと礼も言っていないし」

木漏れ日が眩しいのか、左の手のひらで庇を作るように目の上を覆いながらアサギが言った。

「世話になったしさ……、なんか礼できないかと思って」

いつの間にも持っていたのか、右手には赤い実でいっぱいになった桶を持っていた。

「これは……？」

「グミとバライチゴだ。甘酸っぱくて旨い」

「あ、ありがとう」

「まあ……、桶は、宿のを失敬しちゃったんだけどよ」

私たちにお礼をしようと、わざわざ探しに行ってくれてたんだ。アサギの顔を見ようと視線を運ぶと、左手のひらで目を覆って照れくさそうに顔を隠していた。

……乱暴そうだったけど、いい子なんだな……。

しばらく無言の時間が続いて、ちよつと気まづくなったころ、アサギが赤い実をひとつ手に取った。

「食ってみなよ」

そして、私に差し出した。

「う……うん」

私は赤く柔らかいイチゴの実を受け取って口に入れた。

口の中でじわつと酸っぱさが広がって、その後甘みが残る。野性味の強い不思議な味。

「酸っぱいけど、甘いね」

アサギは口元で笑って、目から手のひらの庇を外し頭上高い緑の枝を見つめた。

日の光がアサギの目に差し込んで、淡い褐色の目の色が琥珀のように輝いて見えた。

日に透ける髪の色も赤みを帯びて銅色に揺れている。

「きれいね」

「何が？」

「アサギの目と髪の色」

「俺の目と髪が？」

アサギは眉根を寄せて険しい表情になって私の方に首を向けた。

「こんな鬼みたいな色が？ 嘘言っなよ」

と言つて、ぷいっと顔を背けた。

「ほんとよ。琥珀みたい。キラキラしてる」

「いいかげんにしろよ！」

アサギはがばつと状態を起こして私を睨んだ。

「この髪のせいで嫌われてきたのに……。きれいなわけねえだろ！」

「嫌われてきた??」

私は驚いて目をパチクリとさせた。

つまり、外国人に対する差別のようなものがアサギを苦しめてきたということ?

彼の目と髪の色の色で……。

しまった……。無神経なこと言っちゃったわね……。

「ごめんなさい……」

私は反省して、小さく謝った。

だけど、こんなに素敵な色なのに、それをアサギが知らないなんてもったいないな……。

「でも、私は好きよ。アサギの目と髪の色」

「……」

アサギは険しい表情を和らげて……というより、悲しげな表情になって、ふたたび空を仰ぐように寝転んだ。

「……俺が捨てられてたのは、この髪と目の色のせいなんだ」

「え?」

どこから聞こえてくるのか鳥のさえずりが響く。

アサギの心境をよそに、少し無粋なくらい賑やかなさえずりが。

「里に近い山奥に俺は捨てられてた。置手紙もなく。ボロ布にくる



まれて」

まばたきを忘れたように目を見開いたまま、空を見つめてアサギが続ける。まるでひとりごとのように。

「手のひらに青い石を握ってたんだとさ。浅葱色の。それでアサギって呼ばれるようになった」

アサギは着物を裏返して、縫い付けてある鮮やかなライトブルーの石を見せた。

小指の爪ぐらいの大きさの楕円の石。

これは……ターコイズ？

「ターコイズね」

「ターコイズ？」

「ええ。私の国では旅の守護石と言われているわ。持ち主の身代わりになってその身を守る石と」

「そうなのか……」

アサギは改めてターコイズを見つめた。

「この石は上忍に一度取り上げられたんだ。それを伍助兄貴がこっそり盗み返して隠してくれた。俺がものがわかるようになってから親の形見だつて渡してくれたんだ」

「そうだったの……」

伍助ってちゃんぽらん男だと思つてたけど案外いい人なのね。  
アサギが命を懸けて追いかけるぐらい慕っている相手なんだし。  
……それでも、やっぱりちゃんぽらん男のような気はするけど。

「里じゃ俺はずっと嫌われ者だった。赤い髪と目のせいで鬼の子つて言われてよ。悪いことが起こるとみんな俺のせいだと言われた。その度に伍助兄貴がかばってくれて、兄貴だけが俺の味方だったんだ……」

口の堅いアサギが自分のことを話してくれている。  
おそらく思い出したくもないような記憶を思い起こしながら。

「私も……嫌われてたわ」

ほとんど無意識だったと思う。  
アサギの告白に相槌を打つように呟いてしまったのは。

「……え？」

アサギはびつくりしたように振り向いて私を見上げた。

「私も他の人とは違ってたから……。ずっと陰で悪く言われてたの」

アムランの姫として表ではちやほやされていても、陰では「魔女」とか「魔物の血を引く姫」と言われていたわ……。

だから、シャルルカン王子も最終的にはマハネを選ぶんじゃないかって……どこかで判ってた。

私の地位や外見に惹かれて近寄ってきた他の王子たちの中には、私の魔法を見たとたんに手のひらを返すような態度をとった人たちもいた。

私を本当に一人の人間として認めてくれてたのは、お父様とマハネと……アニスだけだったわ。

「姫様を嫌う奴がいるなんてわからねえな」

アサギは上体を起こしてまっすぐに私を見て言った。

「きれいだから、妬まれてるんだよ。それしか考えられねえ」

「それは違うわよ」

私は苦笑した。

私が魔女だということを知ったら、アサギはどう思うのかしら？でも、アサギなら私の気持ちができるかも知れないわね……。頭の片隅でそんなことを思っていると、アサギの声に引き戻された。

「姫様を見たとき天女ってこんなのかと思った」

言葉が、止まった。

この子、六三郎と同じことを言うのね。

あどけない目で、真剣な顔で。

「こんなに優しくしてもらったのは、生まれて初めてだ……」

アサギの大きな目が一瞬切なそうに細くなって、再びまっすぐに私を見た。

「こんな暮らしがあるって夢に見たこともなかった」

言いながらアサギは着物に縫い付けてあるターコイズをちぎり取った。

「……これが誰かを守ってくれるというなら皆様たちを守るように」

アサギは私の右手を取ってターコイズを握らせ、その上に自分の手のひらを被せた。

「ダメよ！ ご両親の形見でしょ？ これはアサギが持つてなさい！」

私は首を振って、手を引きターコイズをアサギに返そうとした。だけど、強い力で握られていて、アサギの手を払うことができない。

「俺を捨てた親に未練はねえよ。俺の命は皆様にもらったようなものだ。俺がずっと側にいて皆様を守れたらいいけど、それはできねえ」

「アサギ……」

「皆様たちのことは忘れねえ。俺のこれまでで、一番……、なんて言うか……」

アサギは一生懸命言葉を搜しているようだった。強い、強い力で私の手を握りながら。

「……そう、一番、幸せな時だった……。……ありがとう」

アサギは初めて見せる優しい表情で微笑んだ。

そして、ターコイズを握らせた手を私の膝の上に置くと、立ち上がり、まだ濡れたままの着物を着た。

何故なの？ 催眠魔法をかけられたように、ただ、アサギを見上げることしか出来ない……。

着物を着終わると、アサギはゆっくりと2、3歩歩き出した。

そして、一度だけ振り返って泣きそうな目で私を見た。

それは一瞬の表情で次の瞬間には切なそうな微笑みに変わっていったけれど。

「……アサギ」

引きとめようとして声に出して呼ぶ前にアサギは駆け出していて、あっという間に姿が見えなくなっていた。

幻を見ていたのかと思うぐらいアサギは気配ごと完全に消えていた。

右手のひらに、硬い、青い石だけを残して。

7：六三郎

俺達は伍助の里へと向かっていた。

本当だったら見つからない様に隠れて進みたいところなんだが、何分相手は忍者で俺と新九郎は侍だ。いくら伍助の先導があるって言っても隠密行動で勝てるもんじゃない。

と言うわけで、いつその事俺と新九郎は街道を堂々と進んでいた。当然忍者の里からの追っ手に見つかる訳だが、俺と新九郎に注意がいつているそいつを伍助が仕留めるって作戦だ。

まあ前回忍者と戦った時に伍助がやった作戦の応用だな。

俺と新九郎は並んで街道をどんどんと忍者の里へと向かっていた。

「こうして2人で歩いていると、新婚旅行の様じゃねえか」

「誰が新婚か！」

万一いきなり手裏剣でも飛んでくるかもと神経を張り巡らせながら歩かないといけないというのに、まったくこいつは図太いんだか馬鹿なんだか、馬鹿なんだろうけど。

新九郎が伍助の手伝いをしてやろうと言い出したのには見直したが、やっぱりこいつ馬鹿だしな……。

いかにいかに、俺の方こそ関係の無い事に意識が向いてしまった。集中しなければ、と思っっているとちょうど、左手に気配を感じ反射

的に身をそらせると、目の前を風を切る音が通り過ぎて、俺の右に生えている木に突き立った。手裏剣か。

そして間もなくその左手の茂みから「ぐう」というぐもった声が聞こえてきた。

「おい。やったか？」

と声をかけると、茂みから

「へーい」

と返事が返ってきて、伍助が姿をあらわした。

「結構順調みたいだな」

「そつつすね。里の奴らは型どおりに動く奴が多いんで動きを読むのは楽つすからね」

「確かにお前が言っていた様にみんな左側から攻めてくる奴らばかりだな」

「里では相手の左側から攻めろつて教えられてるんつすよ。利き腕と反対側から攻めると相手の反応が遅れるからつて」

「しかし同じ攻め方してたらばれるに決まってるじゃねえか。そいつら馬鹿なんじゃねえか？」

と新九郎は呆れたように言った。

里の奴らもこいつにだけは馬鹿とは言われたくないだろうな。と俺が思っていると、案の定伍助が新九郎に反論した。

「命の取り合いの戦いってのは本来一度きりなんだ。色々手を出すより、効果的な方法一つを熟練した方がいいんだよ。俺が前もつて

教えて置いたから知っているだけで、俺が言わなかったらお前も知らなくて引つかかってたかも知れないだろ」

「ああ？　俺がそんなもんにつっかかる訳ねえじゃねえか」

「後からならいくらでも言え……」

「どうした？」

伍助が途中で言葉を切ったので聞いてみると、伍助は

「どうやらまた1人来たみたいす」と茂みの奥に姿を消し、俺と新九郎は顔を見合わせた後、何事も無かったかのようにまた街道を進みだした。

結構せわしないな。それだけ忍者の里に近づいたって事かな？

だがいつまで立っても左手から手裏剣は飛んでこず、それどころか伍助の「なに！」と言う叫び声が聞こえてきた。もしかして裏をかかれたか！

「伍助大丈夫か！」

俺と新九郎は急いで左の茂みに分け入った。

そして伍助を探すため視界を巡らすと、伍助が15、6歳ぐらいの少年と抱き合っているのが見えた。

まさかお前もそっちの趣味が合ったのか！

くっ！　どうも伍助が俺が元男と知っておきながら執着するのはちょっとおかしいと思っていいたら両刀だったのか。だったら心は男



で身体は女の俺は、伍助から見たら一粒で二度美味しい状況なんだな。

「生きていたのかアサギ！」

「兄貴の方こそ無事だったんだな！」

> i 2 9 3 2 0 — 3 5 9 7 <

ん？ アサギ？ 聞いた覚えがあるぞ？ ああ、確か伍助の弟分って奴か。ずいぶんと赤い髪だな。こりや追っ手も見つけやすかっただろうな。追っ手の奴らが殺したとか言ってたが、どうやら生きていたのか。まあ良かった。

「お前が伍助の言っていた弟分っていうアサギか？」

「ああ、そうだけど。あんたは？」

「俺か？ 俺は六三郎って言っただ」

するとアサギは探る様な目で俺を見直した。

「あんたが六三郎か……思ったよりなよっとしてるな」

なんだ？ どうも引つかかる言い方だな。まあ子供相手に怒っても仕方が無いか。それにそれよりもっと気にかかる事がある。

「そうだが、どうして俺の名前を知ってるんだ？」

「俺は姫様……七重さんに助けられたんだ」

「なに！？ 七重に助けられただと！ どういう事だ！」

俺はアサギの両肩を掴むと前後にゆすって問い詰めたが、そこに伍助が割って入った。

「六さん、そんなにしてちゃ言えるもんも言えねえっすよ。アサギなにがどうなってるんだ？ 詳しく聞かせる」

「兄貴がそう言うならいいけど……」

アサギは渋々って言う感じで頷いた。

こうして俺達はアサギに詳しく話を聞く事になったが、こんなところでたむろしていたら追っ手に見つかってしまふ可能性がある。

追っ手の奴らは俺達に刺客をやらねながらも、俺達が里に向かって進んでると報告をしているみたいなので、その裏をかいて面倒だが少し道を引き返し、そこで改めて街道横の森に分け入ってアサギを取り囲んで座った。

「それで、どうしてお前が七重に助けられたんだ？」

だが俺の問いかけにアサギという奴は、むすつと黙り込み返事をしない。なんだこのガキは？ 伍助の弟分って事じゃなかったらしばいているところだぞ。

だがこいつから七重の居場所を聞きださなくてはならない。こころは大人になって我慢しようじゃないか。

「どうした？ お前、七重に会ったんだろ？」

するとアサギはむすつとした顔のまま胡散臭げな目を向けて来やがった。

「姫様の言つてた感じじゃもつとしっかりした奴かと思ってたんだけどな。あんた本当に1人で5人とか倒したのか？」

姫様？ なんだそりゃ？

「ああ、5人だったら七重と初めて会った時に倒した。それよりも姫様つて七重の事か？」

するとアサギは、へっ！ と、小馬鹿にした様な笑いを漏らした。

「あんたそんな事も知らないのかよ。八重さんが七重さんの事を姫様つて呼んでたんだ」

八重さん？ 俺が思わぬ人の名前が出てきた事にびっくりしていると、同じ事を思ったらしい伍助が割り込んできた。

「アサギ、八重さんがどうして六さんの奥さんと一緒に居るんだ？」

兄貴分の伍助に聞かれてはアサギも応えるしかなく、渋々と言った感じで事情を話し始めた。

「なんで七重さんと八重さんが一緒にいるかなんて知らねえよ。俺

が2人に助けられて気付いたら初めから2人一緒に居たんだし。八重さんは七重さんの事を姫様と呼んでたから、八重さんは七重さんの侍女かなんかじゃねえのか？」

「七重が姫？」

確かに世間知らずとは思っていたが……。まさか七重が姫とは……。

「さつきからそう言ってるだろ。なんか気に入らない奴と結婚させられそうになつたから八重さんと一緒に逃げてきたみたいな事を言つてた」

「そんな話聞いてないんだが……」

琉球から旅してきたって思ってたんだが、その領主の姫君で政略結婚させられそうになつたのを逃げ出したとかか？ しかも八重さんが一緒ってどういふ事だ？ 俺と七重が旅していた時に八重さんはどこに居たんだ？

「あんた本当に姫様の旦那なのかよ？」

アサギは少し首を傾げて疑わしげな目で俺を見てきやがるが、断じて俺は七重の夫だ。なんだこのガキはさつきから俺に突つかかってくるな。

「お前だつて七重から俺が夫だつて聞いてんだろ。お前こそ追っ手にやられたんじゃないのかよ。本当にアサギとか言う奴なんだろうな」

「何言つてやがんだ。兄貴が俺を見間違う訳無いだろ。それに俺が助かったのは七重さんに助けられたからってさっきも言ったろ。兄貴を追つて下野に差し掛かったところで追っ手にやられそうになつた時に姫様に助けられたんだよ」

それだ！

「じゃあ、七重は下野に居るってんだな！」

俺はアサギの肩を掴んで前後に強く揺さぶりながら問いたですとアサギは、

「あ……あ……あ」とガクガクしながらも答えた。

「よし！ 下野に行くぞ！」

「いやいや、なに言つてやがんだよ。ここまで来といて引き返すわけねえだろ」

「馬鹿やろう！ 里は逃げないけど、七重は逃げるんだよ！」

「逃げるんだつたら諦めるよ」

新九郎は呆れた様に言つたけど、諦めるわけがない。

「言葉のアヤだ！ 誰が逃げられてるか！」

「でも、どうして七重さんは六さんに会いに来ないんっすかね？」

「後、八重つてのはなんなんだ？ 前に会つたときはその七重つていうのの事は知らないふりしてたつてのはなんなんだよ？ おかしいんじゃないかねえのか？」

くそ！ みんなで寄ってたかって！ こっちはやっと七重の居場所が分かって焦ってたよ！

「だからそんなもん、会いに行きや全部はつきりするんだよ！」

「いや、だから今から引き返すのはめんどくさいじゃねえか」

「めんどくさいとか言う問題じゃないだろ！ 馬鹿やろー！」

ダメだこいつ等話にならねえ！ 俺はいても立ってもいられず七重の元へと走り出した。我ながらいつもの自分らしくは無いつと思うけど、やっと七重の居場所が分かったつてのに、冷静でいられるか！！

「おい！ 六三郎！」

「六さん！」

奴らは俺の背に声をかけるが、俺はその声を振り切つて七重の元へと走り続ける。こうなつたら俺1人でも行つてやる！

七重待つて居ろよ！ 今行くからな！

だが街道を下野に向かって走り続けていると、ゾクリと背に冷たいものが走つた。

追っ手が！ しまった！ 伍助の援護が無いんだつた。

俺は追っ手を振り払おうと走り続けたが、追っ手の気配はどんどんと近づいてくる。やはり忍者にスピードでは勝てないか。

どうする。迎え撃つか？ いや、どうせあいつ等は影から手裏剣を投げてくる事しかない。足を止めて迎え撃つてもしょうがない。

だが身を隠す物が無い街道を進むよりはマシと街道をそれて森の中に分け入り、木々の間を縫う様に走り抜けた。

殺気を感じ身を屈めると、頭のあった位置を手裏剣が通り過ぎ、木の幹に力カツ！と突き刺さった。

俺は懸命に逃げ続けたが、追っ手は諦めず俺を追い続ける。

はあはあ。こいつ等しつこ過ぎるぞ……。

俺は足が止まりそうになるのを必死に堪え走り続けたが、次第に足は鈍り手裏剣を避けきれなくなってきた。

手裏剣を避ける動きも鈍り、ビシュ！ と手裏剣が俺の腕を掠め切り裂いた。

七重……折角お前の居場所が分かったというのにこんなところで……くそっ！！

だがそれでも走り続けると不意に木々が途切れた。いや、途切れたのは木々だけじゃない。地面もそこで途切れ、足元には崖が俺の行く手を塞いでいる。

なんだと！

だが俺の動きが止まったのを絶好のチャンスと追っ手が放った手

裏剣が俺の背に突き立って、俺は前のめりに倒れた。崖の下を流れる川へと……。

「七重……」

俺の声は崖にこだまし、水面に叩き付けられそこで俺の意識は途絶えた。



アニスが敷いてくれた布団に横たわってぼんやりと天井を見上げていた。

アサギが去っていったから、突然どつと疲れが押し寄せてきて寝込んでしまったのよね。

団扇と呼ばれるジパングの紙製の扇でゆっくりと扇いでくれながら、アニスが言った。

「姫様が魔法の使いすぎで体調を崩されるなんて初めてのことですね。心配ですわ」

「うーん……。まあ、魔法自体は自然の力を変換して発動させてるんで体力とかは使わないんだけど……」

とアニスには話しているものの、実は私自身も魔法のメカニズムをよく理解していなかったりして……。

幼い頃、魔法を教えてくれたお母様によると、魔法でもっとも重要なのは信じる力なのだそう。

人は自分が呼吸できること、まばたきできることを疑ったりはしない。

そんな気持ちで自然の力を自分の力のように使う力を私たちは魔法と認識しているのだとか……。

「ただ、一晩中魔法を使い続けていると、集中力は酷使用するわね。睡眠時間もなくなるし。そういう理由では体力を消耗することになるわ」

「なるほど。夜なべしてじゅうたんを織るようなものですか？」

「そうね。それ近いかも」

確かに肩凝りとかあるし、ずっと座ってたから足腰もなんか痛みを感じたりするものね。

「……アサギは、六三郎さんたちに会えるんでしょうかねえ」

アニスはゆつたりと団扇を動かしながら、ちらりと私を見た。

「うん。どうかしらね……。会える……んじゃないかしらね」

六三郎たちは微妙にこつち方向に向かっているようだし、そこはアサギの頑張り次第かも知れないけど……。

「姫様」

「な……なあに？」

「アサギの記憶操作するの忘れてましたよね？」

「あ……ああ、それね」

「うっ……。痛いところを……」。

でも、別れ際のアサギの言ったことや表情を見れば、とっても彼の記憶を消す気にはなれなかったのよ……。

「アサギはね。こつち言ってたの」

あのとぎのアサギの泣きそんな微笑が脳裏に浮かんだ。

「姫様たちのことは忘れない。俺のこれまでで一番幸せなときだった……って」

「そうなんですか？」

「だから、できなかったの。アサギが、私たちといた時間を大切に思ってくれていることがわかったから。とても彼の記憶を消すことはできなかった……」

「そうですねえ……」

アニスは卓袱台の上の布の上に置かれたターコイズを眺めた。

大粒のターコイズには石を貫くような穴が穿いていて、もともとはネックレスの一部だったんじゃないかと思える。

おそらくアサギのお母様が身につけていたものなんじゃないかな……。

「私もそれでよかったと思いますよ」

アニスは目を細めて淋しげに微笑んだ。

「ただ……、私たちのことがアサギから六三郎さんたちに知れることとなりますね」

「そうですねえ……」

「六三郎さん、混乱するでしょうねえ。姫様が私『八重』と一緒にいることも、六三郎さんの居場所を知っていて別行動していること

も」

「そ、そうねえ……」

「いつそアサギと同行した方が面倒がなくてよかったんじゃないですか？」

「かも……知れないわね」

私はアニスから視線を逸らしあらぬ方を見て答えた。

「姫様」

「な……なあに？」

「まさか、この期に及んで、六三郎さんに会わずにアムランへ帰ろうと思ってるんじゃないでしょうね？」

「……………」

いや、そんなことは……、思っではないような気もしないでもないような気がする……？

「ダメですよ、そんなことしたら。アサギから話を聞いたら、六三郎さんは姫様が敢えて自分を放置してるって思ってしまいますよ。そうしたら絶望のあまりハラキリするかも知れませぬ。ジパングの戦士はすぐハラキリして自害するらしいですから」

アニスは神妙な表情で私ににじり寄るように言った。

「……ハラキリ……」

それは困るわ！

アムランへ帰るといっても、二度と六三郎に会わないつもりで帰るんじゃない。

ただ……密かに問題解決して、何事もなかったかのように戻れないかな……と思ってるだけで……。

「アムランに帰る前に、六三郎さんに会って本当のことをちゃんと話すべきですよ」

アニスはきつぱりと言った。

私だつて判ってる……。それが道理だつてことは……。

掛け布団の端をぎゅっと握り締めた。

「……だけど、私が魔女だつて知ったら……六三郎は？」

「え？」

「六三郎は……私を嫌いになるかも知れない。自分を呪ってあんな目に遭わせたひどい魔女だと思つて……」

アムランにいたとき、お父様の後妻の継母や親戚たちも私を恐れて嫌っていた……。

ふたりの継母は表ではいつも私の機嫌をとっていたけど、「あの女は魔女だから、いっどんな目に遭わされるかわからない。怒らせないように、関わらないようにしなさい」と自分の子供たち（つまり私の兄弟姉妹）に言っていたもの。

私に求婚してきた王子たちも大方は、心の中は私の魔法を利用し

ようとしているか、魔法を目にしたとたん私のことを化け物のように恐れるかどちらかだった。

北の大陸では魔女狩りが行なわれていて、多くの魔女たちが虐殺されてると聞いてるし……。

目や髪の色が違うだけで、鬼……という魔物呼ばわりされるこのジパングで、魔法を使える私はどう思われるんだろう？

しかも、その魔法を使って、自分を呪った女だとしたら……。

「それは大丈夫ですよ」

アニスはまた団扇を優雅に動かしながら、優しく微笑んで言った。

「六三郎さんなら大丈夫です。あの人は姫様が魔女だろうと受け入れることができます。六三郎さんは……、自分が女になった事実にもちゃんと向き合っている。……もちろん動揺はしておられますけど。女の体で道場破りにも立ち向かっていきましたし、伍助という厄介者を抱えてそれも放り出したりもしない。まあ……これは、十分に成り行きの部分があるんでしょうけど」

「……………」

「六三郎さんは強い人です。今まであの人を見ていて、私、そう思いました。彼は何かからも逃げ出すことをしなかった。あんな状況でも姫様のことを諦めてはいない。心から姫様のことを大切に思っているんですよ……。最初は異国のどこの馬の骨とも知れぬ男と違ってましたが……、今は、姫様が六三郎さんに惹かれた訳が判るよな気がします」

……………アニス。

アニスが心からそう思ってくれているのが判る。

最初は六三郎のことを良く思っていなかったアニスが、こんな風に言うなんて……。

「姫様も、六三郎さんの気持ちに答えないといけませんよ。体が治ったら、ふたりで六三郎さんに会いに行つて、謝つて、本当のことを話しましょう。それに、アサギも伍助も命を狙われています。危険な状況の中に姫様を連れて行くのは本意ではありませんが、姫様の力があれば彼らを助けてあげられるかも知れません」

「そうね……。わかった」

私は逸らしていた目をアニスに戻し、しっかりと向き合つた。

「私も……頑張らなきゃね！  なんのためにアムランを飛び出してきたのか、すっかり忘れてたわ！」

魔法で体力を消耗することはないとアニスには話したけど、実は精神力はしっかり消耗されていくのよね。

（まあHPは削られないけどMPは削られますって感じ？）  
精神力を消耗すると、交感神経に負担がかかってきます。

そうすると体に疲れを感じるようになり、血流が悪くなり、イライラしたり不眠になったりしてしまうのです。

幸いなことにここは温泉宿。

温かい温泉にゆっくり浸かって、リラックスしながら血行を良くすれば神経の疲れの癒えも早くできるのよ。

……ということ、不眠気味の私は真夜中の温泉で少し神経を休めることにした。

ここの温泉は、入浴後肌がぴりっと引き締まるような感じがして  
気に入ってるのよね。

観光客も多いんだけど、私はいつも人除けのまじないをかけて入  
ってるから、私が入浴しているときには浴場は無人になる。

雨季にもかかわらず、ここ2、3日は晴天で、今日は明るい満月  
が夜空に浮かんでいる。

それにしても、本当にジパングは不思議な国。

何日も続けて雨が降っていたり。

針のように細い葉の高い高い木がびっしりと山を囲んでいたり。

晴れた日でも森の中を歩くとしっとりしている。

私は湯気に包まれてよりしっとりした空気を楽しむように頬や腕  
を撫でつけた。

慣れていないからジパングの人たちのように長くお湯に浸かるこ  
とはできないけど、温泉ってなんか気に入っちゃったのよね。

凝った首筋をさすって後れ毛を撫で上げると、結い上げた髪に挿  
した六三郎のかんざしが当たった。

ここに六三郎がいて、一緒に温泉を旅できたら楽しいだろうな…  
…。

初めて会ったときの六三郎は顔に似合わずおどけていて、野盗の  
ひとりかと思ったりもしたわね。

「お嬢さん。悪夢は終わりました。白馬のお殿様が助けに参りまし  
た」

こんなふざけたことを言う人に会ったことなかったなあ……。

野盗を次々に切り捨てて、開口一番これだもの。



確かに、六三郎なら何があっても大丈夫かも。

「琉球ってどんなところなんだ？ こっちはずいぶん違うんだろ」

街道を歩きながら、六三郎は尋ねてきた。

……そういえば、琉球とかいう国出身ということになってるのよね。私。

「そ……そうねえ。六三郎は琉球について何か知ってるの？」

「うーん。正直あんまり知らないな。本州からずいぶん離れた南の島国ってぐらいしか」

「そうなの？」

じゃあ、適当にアムランの話をしてボロは出なさそうね。

「ここみたいにたくさん緑はないわ。雨もほとんど降らないし。砂漠があつて乾いた大地の上に低い草木が生えているの。石で作られた城や寺院があつて、褐色や黒、白い壁のものがあるわ。市場では果物や香辛料、織物や宝石が売られていて賑やかなのよ」

「へえ……。想像つかないけど、楽しそうだな」

「行商人から外国の話聞くのが楽しいわ」

ジパングの話を知ってる行商人は少なかつたけどね。

4つの季節を持ち、家屋は黄金でできていて、水と緑豊かな国。人々は美しく礼儀正しく、人肉を食べる習慣がある……（これは信じてなかつたけど）とか言われていたわ。

「そういえば、この国には黄金でできた城があるっていうのは本当？」

「黄金でできた城??」

六三郎は首を傾げた。

「そういえば京には鹿苑寺という金色の寺院があると聞いたことがあるな」

金色の寺院!?

「京? 行ってみたい! ここから遠いの?」

私は六三郎に飛びつくようにしていった。

六三郎は苦笑しながら答えた。

「七重の足じゃひと月はかかるよ」

「えー」

「でも、七重が好きそうなところだ。かつての日本の都で、華やかできれいなものがいっぱいあるらしいよ」

「えー! 絶対行きたい!」

「絶対って……」

六三郎は呆れたように、でもちよっと楽しそうに笑った。

「そうだな。すぐには無理だけど、いつか行こう」

私の力を持つてすればすぐに行けるんだけどな。

仕方ない、六三郎には私の魔法のことは秘密だから。

でも、金色の寺院があつて華やかできれいなものがいっぱいある国なんて、行かないわけにはいかないわよ！

よし、京ね。覚えてたわ！

「京も……、行つてみたいなあ……」

湯面でびちゃびちゃと手のひらを振つて滴を飛ばしながら呟いた。温泉でちよつとのんびりしたら、アニスと一緒に京に行くつもりだつただけだね。

いろいろあつて……すっかり忘れてたわ。

六三郎のことを思い出しながら浸かっていたらすっかり長湯しすぎちゃった……。

気がつくとなんだか頭がぼーっとして、首を振るとめまいする。

あらら……いけない。もうそろそろ上がらないと……。

私はよろよろと立ち上がって脱衣所の方へ歩いて行こうとした。

その、瞬間……。

「痛っ……！」

一瞬背中に激痛が走り、宙に浮いたような浮遊感を感じた。

(七重……！)

六三郎!?

同時に六三郎の呼ぶ声が頭の中に響いた。

説明がつかない何かの力が働いたのか、六三郎の命が危険に晒されていることが瞬時に伝わってきた。

何故と聞かれても、それはわからない。

ただ、彼が死にかけている、それは確信できた。

背中に刺し傷を負って、水に流され今にも息絶えそうな六三郎の姿が不意に私の脳裏に浮き上がってきたから。

すぐに、六三郎のところへ行かなければ！！

私は慌てて浴衣を羽織り、魔法で空飛ぶじゅうたんを引き寄せて乗り、六三郎のいる崖下に向かって全速力で飛んだ。

ただ、ひたすら、間に合うことを祈りながら……。

## 9：伍助

六さんが逃げた奥さんを追って行っちまった後、残された俺達は顔を見合わせていた。

「行っちまったか。……しょうがねえな、追うか。里の追っ手がやっつて来たらやばいからな」

「ちっ！ めんどくさい事しやがって」

「あんなのほっときやいいんだ」

新九郎がめんどくさそうにしているのはともかく、アサギはやっぱり不満そうだ。

どうやら六さんの奥さんとなんかあったっぽいな。まさか奥さんに手を出したわけじゃないだろうが。

だが、今はそんな事を詮索している場合じゃねえか。

「いいから行くぞ！ いくら六さんでも1人じゃ危険なんだよ」

しかし愚図るこいつらを促して六さんの後を追おうとした瞬間、こっちに近づいてくる追っ手の気配を感じた。

くそ！ さっそく来やがったか。今六さんを追ったら後ろから殺られちまう。先にこっちを始末するしかない。

「追っ手が来たぞ！ とりあえずアサギは隠れてる！」

とはいうものの、さーてどうしたもんかね。いつもは司令塔の六

さんが奥さんの事とち狂っちまって行っちまったし、アサギは戦力にならねえ。新九郎は馬鹿だしな。

仕方がない。六さんは居ねえけど、とりあえず六さんが立てた作戦通りでやってみるか。

「よし！ 新九郎囷になれ。その間に俺が追っ手を倒す」

「アホか！ 誰が囷になんかなるか！」

「六さんが居る時にやってた作戦だろ！ さっきまでやってただろうが！」

「なんだと！？ あれは六三郎とのデートではなかったのか！」

駄目だ予想に寸分たがわず馬鹿だ。しかしこいつが囷になってくれないと、さすがに多勢に無勢で無策で戦っちゃ勝ち目は無い。

「とにかくさっきと同じ様に、街道を歩いてくれ」

こうしてさっきと同じ様に新九郎を囷に、奴に気をとられている追っ手を俺は始末していった。多勢と言ってもアサギを抜いた俺達より多いっただけで、実際追っ手は4人だけだったしな。

そして追っ手が新九郎に気をとられている間に2人倒す事ができ、後の2人は俺1人で倒すのは訳なかった。自慢じゃねえが俺は里で1、2を争う技能の持ち主だったからな。

「ずいぶんあっけねえ奴らだったな」

「殺つたのは全部兄貴じゃねえか」

「なんだと。俺が囮になってやったからだろ」

どうもアサギと新九郎は相性が悪いか。まあアサギはみんなから仲間はずれにされていたせいで、自分の味方と思った奴には異常に肩入れするところがある。

俺と新九郎の仲が悪いのを察して、新九郎に牙を向けてるって訳か。とはいってもここでいがみ合われちゃ今はちよつと面倒だ。ここはたしなめておくか。

「おいおい。アサギあんまりけんか腰になるな」

「でもよ兄貴」

「いいから黙れ」

とりあえず今は強引にでも黙らせる。とにかく早く六さんを追わなくちゃなんねえからな。

俺は新九郎とアサギと共に六さんの後を追った。

だが今は六さんに追いつくのが先決だ。このふたりの速度に合わせてもらねえ。

俺は新九郎達を後に急いで進む。

だがいくら追っても六さんに追いつけねえ。六さんはなんだかんだいってても女の身体だ。いくら先に行ったとしても、俺が全力で追いかけてるんだ。もう追いついても良い頃なんだが……。

俺はそこで足を止め、新九郎とアサギが追いついてくるのを待つ

て2人と合流した。

「どうしたんだ兄貴？ あの六三郎っていうのを追いかけるんじゃないかったのか？」

「それが、そろそろ追いついてもおかしくねえんだが、姿が見えねえんだ」

「もっと先に行ってるんじゃないか？」

「いや、俺の脚ならとくに追いついてるはずなんだ。それが一向に追いつかない。もしかしたら六さんは別の道に行つてて、いつの間にか追い抜いちまつてるのかも知れない」

「なんだと。じゃあ、どうするってんだよ」

新九郎は苛立った様に言ったが、俺だってどうしようか迷ってるんだよ。とは言っても面倒だが、引き返しながらか探すしかないのか？

「しょうがない。戻りながら六さんを探そう」

「ちっ！ じゃあとつとと手分けして見つけようぜ」

「そうだな」

という訳で俺達は手分けしてつて言っても、さすがにまだ半人前のアサギを1人にする訳にはいかない。

「新九郎。アサギを頼む」

「おいおい。こんなガキのお守りなんてまっぴらごめんだぞ」



「俺だつてこんな奴御免だね！」

「一々手間を取らすんじゃねえよ。いいから頼んだぞ！」

アサギを新九郎に押し付けた俺は、あちこち六さんを探したが全然見つからない。だがそこに新九郎とアサギとは別の人間の気配を感じ反射的に木の陰に身を隠した。

俺が身を隠していると里の者らしき2人、注意も散漫に俺が隠れる木を通り過ぎ里の方に向かって駆け抜けていく。

ずいぶん油断しているな？ と俺はその後を追った。すると油断しきっている2人は走りながら会話を始め、こつちまでその声が漏れ聞こえてくる。

声に聞き覚えがあるな。確か重三シゲゾウと長治チョウジだったか……。まあ上に取り入ってばかりで嫌な奴だったな。

しかしあの2人、何の警戒もしてやがらねえ。里の質も落ちたもんだぜ。だが今はそれがありがたい。

「伍助の仲間らしいあの女みたいな奴を始末したから、後は伍助ともう1人か」

「ああ、あの崖から落ちたらひとたまりも無いだろう。意外と楽なもんだつたな。この分じゃ残りの2人も訳ないだろうよ」

なに！？ まさか六さんが？ おい！ しゃれになんねえぞ！

ブチ切れた俺は、反射的に棒手裏剣を長治の背から心臓と重三のふくらはぎに向けたて続けに放った。

「ぐわっ！」

「ぎゃあ！」

2人とも転倒し長治はそのまま動かなくなる。そして足を引きずって逃げようとする重三の怪我をしていない方のふくらはぎに、逃げられない様にとさらに手裏剣をお見舞いしてやった。

「ひいー！」

両足が動かなくなり、のた打ち回る重三に俺はゆっくりと近づくと色々と聞き出さなくちゃなんねえから、精々怖がらせてやらないと。

「ようシゲ久しぶりだな。今なんて言ってた？俺の仲間を殺ってたって言ってたか？」

俺の問いかけに重三はのた打ち回るのを止めて、両手を地面につき尻餅を付く様な格好で俺の問いには答えず、睨んできやがる。結構いい度胸しているじゃねえか。

その度胸がいつまで持つか。俺はさらに近づきながら棒手裏剣を力いっぱい重三に向かって投げつけ、手裏剣は重三の右手の甲を突き抜け根元まで突き刺さった。

「ぐがっ！」

「いいから答えるよ」

しかし見上げた根性な事に、重三は俺に投げ返そうと言うのか、手の甲の手裏剣を抜こうとしたが、根元まで刺さった手裏剣は簡単

には抜けない。

痛みにくぐもった声をだし手裏剣を抜くのを諦めた重三は、  
またも俺を睨んで問いには答えない。まったく無駄な事を。

「馬鹿か！」

今度は重三の太腿に向けて力いっぱい手裏剣を投げつける。  
今度は太腿に根元まで突き刺さった。おそらく骨まで達しただろう。  
重三は痛みにのた打ち回った。

人の仲間を殺っておいて、手加減して貰えんとか甘い考え起して  
るんじゃないだろうな。

「いいか？ シゲ。お前はどうせ喋っちまうんだよ。俺はお前が喋  
るまで何本でもお前の手と足に手裏剣を投げ続けるぜ？ お前は何  
本まで耐えられるんだ？ 5本か？ 10本か？ 20本は耐えら  
れねえだろ？ どうせ喋っちまうんだったら、とつと喋っちま  
いな」

だが重三はまだ口を割ろうとはしない。だー！ めんどくせえ！

「い、い、か、ら、しゃ、べ、れ、よ！」

俺は一文字一文字口に出すごとに、至近距離から手裏剣を力い  
っぱい投げ、重三の手足に叩き付けた。手裏剣はすべて根元まで刺さ  
り骨を貫通する。

「ひひひひー！！」

俺は悲鳴を上げ地面をのた打ち回る重三にしゃがみ込んで微笑み

かけた。

「なあ。お前後何年生きるんだ？ 両手両足が不自由になつてずつとはつて暮らす心算か？ 今なら傷の手当をすりゃ治るんだぜ？」

微妙にもう手遅れつばい気もするが、俺の思いやりある忠告に重三はやつと口を割り、六さんを追い詰め谷底に落とした事と、その場所を聞きだした。まったくこの程度の事に意地になつて口を噤むんじゃないよ。

話を聞き出したからにはもう重三には用はない。

その場に捨て置いて元来た道を引き返したが、まあ運がよければ生き延びるだろう。

しばらく走っているとこっちに向かつていた新九郎とアサギに合流した。そして重三から聞き出した話を2人に説明する。

「どつやら六さんは追つ手の奴らに追われて、谷底に落ちたらしい」

「なに！？ 六三郎は大丈夫なんだろうな！」

新九郎は俺の襟首を掴み食つて掛かるが、俺はその手を振り払つた。まったく馬鹿力で締め上げやがつて。

「俺にそんな事分かる訳ないだろ！ とにかくその場所まで行くぞ」

俺達はとりあえず六さんが落ちたというその場所まで行った。だが……。

「結構高いな」

下の方に川が流れているのは見えるんだが、相当な高さだ。これじゃいくら上手く川に落ちてもかなりの衝撃を受けちまうだろう。気絶ぐらいしているかも知れない。

「ここから落ちたらさすがにひとたまりもないんじゃないかねえの？」

「縁起でもねえ事言うんじゃないよ。泣かすぞこのガキ！」

まったくこんな時までいがみ合いやがって。仲良くしろとは言わねえけど、せめて静かに出来ねえもんかね。

「下は川になってるんだから上手く川に落ちてれば、助かっている可能性もあるだろ。下まで行くぞ」

とは言うものの、もう日が暮れるか。夜に月の明かりすら届かなさそうな谷底に行くのは危険か。それに周りが見えないんじゃないや折角下に下りても六さんを探せねえ。それでも谷底の手前まで行きそこで日が昇るのを待つ事にした。

とても寝ては居られないので、3人とも起きて焚き火を囲んだ。アサギが俺と仲の悪そうな新九郎に突っかかるのはともかく、六さんに突っかかるのに違和感を感じていた俺は、アサギに言葉を向けてみた。

つつつても、まあ当たりはついてる。六さんの嫁さんに助けられて、結構入れあげているっばいからその関係だろう。

「おい。お前七重って人となんかあったのか？」

「別に……なんでもねえよ」

とはいうものの、いつもだったら俺から視線を外さないアサギが、視線を泳がせあからさまに怪しい。まあ惚れたんだろうな。

それでも、惚れた相手の旦那が自分が勝てそうも無い男らしい奴なら諦めもついたが、女みたいな奴だったので、我慢なら無かったところか。六さんの凄さは一緒に戦ってみねえと分かんねえし仕方ねえか。実際女みたいどころか女だし。

一度六さんの戦いぶりをみれば、こいつも六さんを見直すんだろうけどな。その為にもとつと六さんと合流したいんだが……。

そして俺達は、朝になって谷底に入ったが、どこにも六さんの姿が無い。やっぱり、下流の方まで流されちゃったか。

「よし。もっと下流にまで行ってみよう」

と俺はみなを促したが、新九郎はすでに無言で、さすがにアサギも口を噤んでいる。

しかしいくら探しても六さんの姿を見つけない事は出来なかった。

口を割らしたシゲの言う事を信じりゃ、手裏剣は間違いないく六さんに当たってるし、崖から落ちた事も考えりゃ自分で動いて移動しているとは考えられねえし……。

くそ！俺が巻き込んだ所為で六さんが！！

俺が唇を噛み締め、血が出るほど拳を握っていると、新九郎が思いの外静かな口調で口を開いた。

「こうなったら、やるこたあ決まってるだろ。六三郎のあだ討ちに、

お前が言っていたその里とか言うのにとつと行くぞ」

「新九郎……」

「里への抜け道なんざ探してらんねえ。正面から突っ込んでやる」

新九郎……まさか死ぬ心算か。だが新九郎まで死なせる訳にはいかねえ……。

……俺一人で突っ込むか。俺がそう考えていると、アサギが遠慮がちに口を挟んできた。

「里への抜け道なら……。俺知ってる……」

「なんだと!？」

「俺……みんなに仲間はずれにされて、人気の無いところに行く事が多かったから……。それで洞窟を見つけて、その洞窟が里の外まで続いているんだ」

「なに! アサギ、それは本当か!」

「ああ。本当だ」

「よし! そこから潜入して里の奴らをやっつけてやるうぜ!」

「ああ、やってやる!」

俺達は六さんと俺の親父の仇をとるべく里へと向かったのだった

日暮れが近い薄紅のにじむ空を空飛ぶじゅうたんで飛ばしてきた私は、眼下の急流を目にして心臓が止まりそうになった。

……こんな流れの中を……六三郎が……。

だめだめっ！！ 呆けてはいられないわ！

まだ彼は生きている！！

弱々しいながらも六三郎の気配は途切れてはいない。

私はアサギを探したとき以上に神経を研ぎ澄ませ、広範囲にわたって六三郎の気配を探った。

本来は水晶玉という媒介を使って相手の姿を映し出すんだけど、今はそんな場合じゃない！

直接私の頭の中に六三郎の映像を描くように集中する。

温泉に浸かっていたのぼせと、緊張と、疲労のあまり激しい頭痛に頭が割れそうになる。

「くっ……」

意識が遠のきそうになって声を上げる。

こんな……頭痛ぐらいで、気を失ってる場合じゃないわっ！

頭痛に耐えながら目をつぶると、かろうじて岩に引っかかって流されずにいる六三郎の姿が飛び込んできた。

皮肉にも女であることが幸いしたのか、仰向けに浮いている六三郎は意識は失っているもののそれほど水を飲んではいないようだ。



……良かった！ これなら、助けられる……はず！！

音速を超える勢いで下流目指して私はじゅうたんを飛ばした。

「六三郎！！」

それから1分と経たないうちに六三郎を発見できた私だけど、瀕死の彼を目にしたら声を上げずにはいられなかった。

両目に涙がにじんでくる……。

いけない！ 泣いてる場合じゃないのよ！！

自分を奮い立たせるようにパンと両頬を叩き、じゅうたんの高度を水面ぎりぎりまで下げて六三郎の体をつかまえた。

それから落ち着いて両脇に腕を通し、気合を入れて一気に引き上げる。

「……しよつ……と！」

も……持ち上がらない！！

人間の体ってこんなに重いものだったの！？

思い直して半重力の魔法を使い、六三郎の体重を半減させる。

それでも、ずいぶん重く感じたけど、着物が水分を吸っているのと六三郎の意識がなくてぐったりしている分、余計に重く感じるのね。きつと。

「六三郎……」

やっとの思いでじゅうたんに引きずり上げ、改めて六三郎の顔を見ると、血の気が引いて唇が紫色になっている。息を……していない？

私は自分自身の心臓が凍りつきそうになるのを感じた。

そんな……！ 嫌よ……！

にじみかけていた涙が溢れて頬を伝った。

そのとき、頭の中で、誰かの声が響いた気がした。

『死なセナイ』

自分自身の奥底から聞こえてくるような声だった。

私の魂が私自身にそう告げていたのかも知れない。

そうよ！ 死なせないわ！ 死なせてたまるもんですかっ！

私はぎゅっと目を閉じて、六三郎の肺に意識を集中する。

水分子を分解して追い出し、酸素を送り込む。

急速にはなく、ゆっくりと……。

肺と脳が酸素を受け入れられるように。

心臓はまだ動いている。

脳細胞の損傷もほとんどない。

後は、傷口を探して……。あつた！

背中に2箇所鋭利な刃物が突き刺さっている。

不思議な形の刃物だ。四芒星の形……？

へビのものらしい出血毒が塗られているみたい。

血が固まるのを邪魔しているから、傷口の小ささのわりに出血が止まらないのね！

私は再び魔力を駆使して止血をし、血液を浄化しながら目に付いた洞窟に滑り込んだ。

乗ってきたじゅうたんを敷いて六三郎を横たわせ、血液の浄化を続けると、今度は六三郎の体がかたと震えだした。

水中で血圧が下がりすぎていて、低体温症を引き起こしているんだわ。

私は六三郎の濡れた服を脱がせて、自分の体温で彼の体を温めようとした。

すると……

「なによ、これっ？」

着物をはだけてみると、六三郎の胸はご丁寧にミイラのように幅広の包帯のようなものでぐるぐる巻きになっていた。

もちろん、包帯はぐっしょりと濡れていてぴったりと体に貼りついている。

「そうか……。胸を隠すために……。それにしても邪魔つけねえ」

私は遠慮なくかまいたちの魔法で包帯を引き裂き、六三郎の体から剥ぎ取った。

すると白く艶のある豊かな胸が露わになった。

まるで少女のものとしか思えないような瑞々しい乳房に目を奪わ

れる。

！！！！！

……そうだった……。

今の六三郎にはバストがあるんだったわ……。

それにしても、きれいな体ねえ……。

女性らしい豊満な肉体……というのではないけれど、無駄のない  
しなやかな少女のような体型だ。

それで、出るところはしっかり出てるってところが……。

~~~~う~~~~ん……。複雑な気分だわっ！！

六三郎の濡れた着物をすべて脱がせ、私も浴衣の前を開き、六三郎の上に覆いかぶさるように肌を重ねる。

やっぱり、冷え切ってるわね……。

幸い私には温泉で温まった余熱があったから、六三郎の冷たさに凍えることはなかったけど、できれば洞窟の中ももっと暖かくしておきたいな……。

と思ったとき、目の前をコウモリが横切っていくのが見えた。  
よし。

「あなた、仲間と一緒に薪になりそうな乾いた枝をいっぱい集めてきなさい」

私はコウモリに暗示をかけて、薪を集めてくるよう命令した。

コウモリはふらふらと洞窟の奥に入ったかと思うと、十数匹の仲間を引き連れて洞窟を出て行った。

3 往復ぐらいいでコウモリたちが十分な薪の量を集めている間に、私は六三郎を温めながら自分の血液を六三郎の体の中に送っていた。アサギのときはできなかったことだけど、ありがたいことに私と六三郎は血液の型が一緒だったのよね。

「これで、アサギのときより格段に早く回復できるはず……」

そう思っただけで口元に笑みを浮かべると、次の瞬間に洞窟の天井がぐにやりと捻れて見えるようなめまいを感じた。

いつけない……。だいぶん疲労してるわね……。……。

コウモリたちが積み重ねた薪に火をつけると、ほとんど闇の中だった洞窟がほの明るくなり、岩肌まではっきりと見えるようになってきた。

すっかり日が暮れたのか、我に返ったコウモリたちは獲物を求めて夜の闇に飛び出していったようだった。

私は再び六三郎に体を重ねて、彼の腕や首筋をさすりながら温めていた。

六三郎は長いまつげを伏せて、今は呼吸も落ち着いている。

冷えた体さえ温まれば、多少のたるさや痛みは残るだろうけど、ほぼ通常の状態に戻るはずだ。

「ふふ……。なんだか、いつもと逆ねえ」

以前六三郎と体を重ねたときはいつも六三郎が上だった。

私は六三郎の腕に抱き締められ、彼の体に包まれるようにして、草の褥の上で星空を見上げていた。

男のときから六三郎の体は細くしなやかだったけど、やっぱり女の体とは違うわねえ……。

もっと硬くて骨っぽい感じだったのに。

今はわき腹や腕に残る紅色の刀傷さえ色っぽく見えるほど、女の体だわ。

……私と比べると、だいぶ胸は小さいし、凹凸のない体だけだね……。

ずっとこのまま……元に戻らないのかしら？

息が止まるかと思うぐらい、強く私を抱いた六三郎にはもう戻れないのかしら？

細いけど力強い腕。頬に触れるときどき硬く短いヒゲが当たった。

男の人なんだなあ……って、こそばゆく思った。

もう、あんな風に……抱き締められることはなくなっちゃうのかしら？

そう思うと、また涙が出てきた。

全部、私がやったことなのに……。

六三郎を信じられなかったから……。

崖から落ちる瞬間、私の名前を叫んだ六三郎を。

感極まって六三郎の背中に腕を回しぎゅっと抱き締めると、ぼんやりと意識を取り戻し始めたらしい彼が目を開いた。

「う……ん」

「六三郎！」

私は顔を上げて、目を開けたり瞑ったりしている六三郎を見た。そして、とっさに彼の名を呼んだものはっと気づいた。

どうしよう……。無我夢中で何も考えず助けたけど……。私、六三郎になんて言えばいいの……???

この状況を、どう説明したらいいの……???

「なな……え？」

六三郎は今度こそはつきりと目を覚ましたのか、急に起き上がって、そのはずみで一緒に起き上がってしまった私の肩をがっしりと掴んだ。

「七重なのか！ 本当に??？」

「え……ええ……」

「七重！」

一瞬のためらいもなく六三郎は私を抱き締めた。死に掛けていた人とは思えない、そして女とは思えないような強

い力で。

背中に置かれた指が、私の髪や背中を撫でる。

その手の温かさに、彼が死の淵から逃れたのだと、間違いなく一命を取り留めたのだという実感が湧いてきて泣きそうになる。

「六三郎……よかった……」

「七重……」

六三郎がまた抱き締める腕に強く力を込める。

少し息苦しいぐらいに。

「これは……夢なのか？」

「……夢じゃないわ。ほんとのことよ」

「崖から落ちて……極楽浄土にいるんじゃないのか？」

「崖から落ちたのも本当よ。でも、流されずに岩に引っかかってるあなたを見つけたの。それで、すぐに助けることができたのよ……」

六三郎は目を閉じてしばらく私の頬や首に頬ずりをした。

まだ湿った彼の髪が私の頬や首筋をくすぐる。

「七重が助けてくれたのか……」

「……うん」

今度は私の頬に両手を添えてじっと私の顔を見る。

そして、目を細めて笑う。



いつもの……六三郎の、あの笑顔だ。

「本当に七重がいるんだな？ 目が覚めると消えてしまつ。いつもの夢じゃないんだな？」

「本当よ」

「七重……」

六三郎はまた私を抱き締めた。さつきよりも一層強い力で。

「ちょっと……放してよ。六三郎。苦しいわ……」

六三郎は頭を振って私の首に顔を埋めた。

「放すとどこかへいつちまつかも……」

「どこへも……行かないから」

「七重？」

不意に六三郎が何かに気づいたように私の耳元で言った。

「俺たちなんで裸なんだ？」

本来なら感動の再会……っていうムード満点の場面なんだけど、何故か薄暗い洞窟でセミヌードの女ふたりが向かい合っているという妖しさ満点のシチュエーションになってしまっているのよねえ…

…。

一命を取り留めた六三郎が思いのほか元気なせいもあって、さっきまでのシリアスなムードが一転して妙な空気が漂っている……気がするのには私だけかも知れないけど……。

「おわあっ！……！」

六三郎は次の瞬間、はっとしたように自分の体を見下ろして、さらに大声で叫びながら腕で胸を隠して後ろに飛びのいた。

何……？ さっきまで生死の境をさまよっていたとは思えない、このイキのよさは……？  
てか……。あれ……？

「ん……？」

六三郎も気づいたのか、恐る恐る自分の胸から腕を外し、改めて胸元を見る。

……胸が……ない……？

「じ、これは……」

信じられないといった表情でしきりに自分の胸を上下にさすっている。

「戻ってる……男に」

「……どっして……？」

魔法をかけた私自身も信じられなかったわ……！！  
だって、張本人の私が解呪魔法を知らないし……、時間の経過で解けるような性質の魔法じゃないはずだから……。

でも、道理でさつき抱き締められたとき女にしては異常に力が強いと思っただのよね……。

「どういうわけだ？　今までののは夢か？　俺は女になった夢を見てたのか？　伍助も新九郎も……夢なのか？」

六三郎はまだ自分の胸をさすりながら呟いている。

「……夢じゃないわ。全部、本当のことよ。六三郎が……女になってしまったのも。伍助や新九郎や……アサギと出会ったことも……」

私は浴衣に袖を通し、前を合わせながら言った。

六三郎はこれ以上ないというぐらいの驚きの表情を浮かべて私を見た。

「どうして知ってるんだ？　七重」

「……………」

どう説明しようかと考えがまとまらなくて黙り込んでしまった私の両腕を六三郎はがしつと掴んだ。

「どうしてなんだ？　お前は琉球の姫なのか？　八重さんは俺のことを知っていて道場に来たのか？　どうして俺のことを何もかも知ってるんだ？　どうして、俺の元からいなくなっちゃったんだ？」

七重！」

これまでの疲れと温泉ののぼせと、ここに来て魔法を駆使しすぎたせいが一瞬強いめまいがした。

力が抜けて崩れ落ちる私を六三郎が慌てて抱きとめる。

「どうした？ 七重？ 大丈夫か？」

「……ごめんなさい」

知らず知らずのうちに頬を涙が伝っていた。

「七重？」

「私の……せいなのよ」

「七重のせい？」

私は六三郎の胸に顔を埋めた。

涙が、今は温かい六三郎の胸を濡らす。

「私が呪ったの……。六三郎が女になるように……。初めて六三郎に抱かれたときに……。六三郎の妻になったときに……」

「呪い??？」

六三郎は私を抱きとめながら、信じられないといった声を上げた。

「呪いって……そんなファンタジーじゃあるまいし……」

「でも、現に六三郎は女になったでしょ？」

「ま……そ、そりゃそうなんだが」

『うーん』と唸りながら六三郎は頭を掻いた。

「だとしたら、そもそも七重はなんで俺を呪ったりしたんだ？ 本当は俺のことが嫌だったのか？ だから俺から逃げちまったのか？」

「違っわ」

私は首を振って六三郎を見た。

「六三郎が……好きだったから」

「はあ？」

「だから……六三郎が、他の人を好きになってその人に触れたときに女になるよう呪ったの……。私以外を愛せないように……」

「ええ??？」

六三郎は頭を抱えた。

「待て、ちょっと待て……」

そして何かを考えながらしきりに首を振った。

「……それって、もしかして、俺が浮気したら女になってしまえっ  
てことか……?」

私は頷いた。

「おい！ 俺は浮気なんかしてないぞ！」

「したわよ」

「知らん！ 断じて身に覚えがない！！！」

「多兵衛さんとキスしてたじゃないのっ！ それからあの伍助って男とも！」

私はついカーツとなって、六三郎の胸を突き飛ばすように押し退けて怒鳴ってしまった。

「な、なななんで知ってるんだ！？」

にわかに焦りだした六三郎がどもりながら聞いた。  
「やっぱり！ 身に覚えがあるんじゃないの！！」

「見たのよ。この目で」

「誤解だぞ！ あれは芝居なんだ！ おふみの奴が俺についてくるってしつこいから。……って、多兵衛さん？」

「おふみって誰よ？」

「おふみは……昔の元カノで……。も、もちろん今は何の関係もないぞ！ それに多兵衛さんがどうして出てくるんだ？」

どこまでもしらばっくれる気？

私は見たんですからね！ 六三郎と多兵衛さんが道場でキスしてるのを！

「酔っ払って多兵衛さんと道場に行ったときに、心配して見に行ったら、六三郎が多兵衛さんにしがみついてキスしてたのよっ！ 六三郎の方からキスしてたわ！」

「はああああ？？？」

怒鳴ったせいか息が上がってきて、私ははあはあと荒い呼吸をしながら六三郎を睨みつけた。

六三郎はしかめっ面のまま首を傾げ、しきりに何かを考えている。

「記憶にないぞ……。あの日は……。飲みすぎてて……」

「聞きたくないわよっ！ 言い訳は」

「言い訳じゃないって。本当に覚えてないんだ。それに、そのときはきつと七重の夢を見てた」

「だから言い訳は……」

こぶしを握って振り回そうとする私の両手首を握って、六三郎は真面目な表情で私の目を見つめた。

「本当だ。前も寝込みを襲ってきやがった伍助に抱きついちまったことがあったが、あのときも七重の夢を見てた」

「信じられないっ！」

振りほどこうとしても振りほどけない……力が、強くて。

「本当だって！ 第一男同士なんて気持ち悪くて耐えられんぞ、俺は。寝ぼけてでもなきやキスなんてできるか！」

「だって……じゃあ、なんで女になっちゃったのよ？ 情欲を持つて別の人に触れたときに発動する呪文なのに……」

六三郎は上を向いてまた少し首を捻った。

しばらく考えてから、『わかった！』とばかりに晴れやかな表情で私を見た。

「別の人を七重だと思い込んでたからだ！ 俺は酔っ払って寝ぼけて、多兵衛さんを七重と間違えたんだ」

「……え??？」

「それしか考えられん。男にムラつとくるなんてあり得ん。吐き気がする」

六三郎は本当に気持ち悪そうに顔をしかめた。

……てことは、勘違いで発動しちゃったの……?? ああ魔法!!

「な……なんで今は男に戻ってるの?」

「……それはわからん」

本人もまじまじと自分の体を見ているけど、私にも訳がわからな



い。

どんな理由があつて魔法が解けたのかしら？

「本当に男に戻ってるのかしら？」

「うーーん」

左手首を掴んでいた右手を離して、私の背中に回すとそのままじゆうたんの上に仰向けに寝かせる。

そして、そつと私の上に体を重ねながら肩にかかった浴衣を引き下ろして開いていく。

こ……この男……。

男に戻つたと思つたら……これ??

「確かめてみる？」

目を細めて微笑を浮かべながら、私の首から鎖骨の辺りまで撫でるように指を這わせる。

私は思わずびくつと反応してしまい、六三郎を睨みつける。

「ほっ……他に聞きたいことがあるんじゃないの？」

「俺がちゃんと男に戻つたかどうか確かめてから聞かせてもらう」

言いながらどんどん六三郎の顔が近づいてきて、その言葉が終わるころには耳たぶに彼の唇が触れたのがわかった。

夢にまで見た七重が今俺の前に居る。しかも体が男に戻っている！

これはやっぱりいつも通り夢なのか？ だとしたらやっぱりいつも通り良いところで目が覚めるといふオチか？

いやそうはさせせん！ 今日こそは最後まで行かせて貰うぞ！ だが夢ならば急がなくては、グズグズしては朝になってしまう。折角七重と再会できたと思ったら目が覚めて目の前に伍助が居た。なんていう夢オチはもう飽きたんだよ！

七重は聞きたい事があるんじゃないかと言っているが、俺の夢なんだったら意味はないだろう。今はもっと重要な事があるはずだ！

「俺がちゃんと男に戻ったかどうか確かめてから聞かせてもらおう」

俺はそう言って七重の耳たぶを唇で啄ばんだ。

そしてそのまま首筋に唇を這わせ、肌蹴かけていた七重の衣をさらに肌蹴させ肩を露出させる。そしてその肩にも唇を沿わせた。

「駄目よ……六三郎……あ……」

小さくあげた七重の抗議の声を無視し、俺はさらに七重の体の下へと唇を滑らせていく。そして胸の膨らみに強く吸い付き、赤い印をつけた。そしてさらに俺の唇は下へと向かい……。

どれくらい身体を重ねていたのだろう……。  
パチパチと音を立てて燃える焚き火が七重の肌に落ちる影を揺らしている。

覆いかぶさっていた七重のほてった身体から身を離れた俺は、彼女に視線を向けたままその横に肘を付いて寝そべった。

そしてその手を握る。七重から視線を外せば、触れていなければ、またどこかに消えてしまうのでは無いかと思ったからだ。

改めて思う。夢ではなかった。本当に七重が目の前に居るのだ。今感じた七重の体の温もりが夢のはずが無い。七重の手をさらに強く握り締める。二度と失わない為に。

しかしそうなるとさつき七重が言っていた事も全部本当で、俺が女になっていたのも呪いの所為だったというのも本当という事か？とても信じられる話ではないとも思ったが、事実俺の女は体になっていた。

信じるしかないということか……。

……まさか七重にそんな能力があるとは。色々と変わっている娘だとは思っては居たんだが……。

だがそうなると改めて聞きたい事が色々とある。

「俺に呪いをかけたって言うのは分かったけど、その……七重は……？」

七重はいったい何なんだ？ まさか物の怪の類なんだろうか？  
……などという疑いが頭を過ぎったものの、何と聞いたものやらわからない。

俺の思惑が読み取れたのか七重は少し苦笑しながら言った。

「心配しないで。私は人間よ。特別な力を持っているだけ……」

「そうか……」

七重の言葉に俺はそう言って、握っていた七重の手に口付けた。さすがに人間じゃなくて魔物とか言われると少し考えたが、ちゃんと人間だというなら問題ない。いや、たとえ七重が魔物だったとしても、七重でありさえするのなら……。

「私が……怖くないの？」

「どうして俺が自分の妻を怖がらなくてはいけないんだ？」

俺はそう言って七重を見詰めた。七重も俺を見詰め返し、俺たちはしばらく見詰め合った。

「……ありがとう。六三郎」

しかしそれはそうとして、確かに男を女に変えたりって大変な力だな。七重みたいな力を持っている人間が大勢居るとしたらとんでもない話だ。

「七重が住んでいた琉球ではみんな七重みたいな力を持っているのか？」

「私みたいな力を持っている人間ばかりじゃないわ。……私だけだった。それに……」

「それに？」

「ごめんなさい。六三郎が誤解したみたいだし、私も誤解されたままの方が都合が良かったから黙ってたんだけど……。実は私は琉球から来たんじゃないの」

「なんだって？ いやまあ確かに七重がいう西からってという言葉から、俺が勝手にそう思っていただけで、七重から言い出した事では無かったが。」

「じゃあ、どこから来たんだ？」

「もっとずっと西の国」

「琉球より西って言うと、朝鮮か？」

「もっと」

「中国？」

「いえ、もっと西」

「じゃあ……インドか？」

「ううん」

「もしかして、南蛮か？」

「それは行き過ぎ」

俺の言葉に七重は首を振り続ける。世界って三国（日本、中国）朝鮮を含む？、インド）の他は南蛮だけじゃなかったのか？ ずっとそう思ってたんだが。

「なに？ じゃあどこだ？」

「えーっと……アラビア」

アラビア？ なんだそれは？ そんなマイナーなところは知らん。しかしそう言っただけでは七重が傷付くかもしれんな。七重の故郷なんだし。夫として妻の面子は守らないと。

「アラビアか……。えーと、確か知っていたと思うんだけど、どこら辺だったかな？」

「良いわよ。気を使ってくれなくても……。日本じゃあまり知られてないみたいだし。インドと南蛮との間辺りよ」

「すまん。しかしそんな遠くからやって来ていたとは……。どうやって日本に来たんだ？ 大変だったろう。しかも八重さんも一緒に聞いてたけど」

「ええ。アニ……。八重は私の侍女なの。別に騙すつもりは無かったんだけど、ちよつと六三郎の様子を見に行つて貰ったの」

「そうだったのか……」

それで、俺と会った時に八重さんは七重の事を言わなかったんだな。しかしそうになると、アサギが言っていた七重はどこかのお姫様って言うのも本当だって事か。まあ折角本人が目の前に居るんだ、

聞いてみるか。

「じゃあ、アサギが言ってたんだが、七重はどこかのお姫様って事か？」

「そうなの。私が住んでいたアラビアと言うのは国の名前ではなくてその地域全体を現す名前前で、アラビアの中に沢山の王国があるんだけど、私はそのなかの一つの王国の王女なの」

「王国の王女！？　じゃあ、あれか。日本で言うと、將軍様の娘とか、そういう事なのか？」

「ええ。そういう事になるかもしれないけど、アラビアは広いけど一つ一つの国は日本ほど大きくないから、日本で言うと藩のお姫様くらいじゃないかしら」

「そうなのか。それでも大変な事だな。仕官を求めて旅をしていた浪人の俺が、知らずとはいえ一国の姫を嫁にってしまったとは驚きだ。」

「でもそれが、どうして日本に来たんだ？　お姫様ならなんら不自由は無かっただろう」

「それでもないわ。不自由ばかり、結婚相手すら自分では決められないんだもの。だから逃げ出してきたの」

ふむ。なるほど。それで日本に来て理想の男である俺と出会ったという訳か。つまり俺はそのアラビアとかいう国の男たちより上で、世界レベルでいい男という訳だな。

だがまあその呪いとやらも解けたみたいだし、七重も居る。七重に呪いをかけられたのは何か誤解があったみたいだが、その誤解も解けた。これで何もかも元通りで明日からはまた七重と一緒に仕官探しの旅だ！

「よし！ とにかくこれでやっと元通りだ！ これからはお前を離さないぞ！」

俺がそう言つて改めて七重を抱きしめると、七重も俺を抱きしめ返してくる。その体の温もりを再確認する様に俺は強く抱きしめた。

「……苦しいわ六三郎」

「すまん。少し我慢してくれ」

すると七重も力を強め精一杯抱きしめ返してきた。俺達は互いに強く抱きしめあっていたが、不意に七重がケホケホと咳き込んだ。

「あ、いかなさすがに強すぎたか」

俺は慌てて抱きしめていた力を弱めると、今度は優しく胸に抱き寄せた。

「馬鹿。私を殺す気なの？」

七重はそう言つて俺の胸に顔を埋める。俺は七重の長い髪に指を絡ませる。七重とのまどろんだ時間を楽しんでいたが、こうもしてばかりは居られない事を思い出した。

「そつだ……。伍助と合流しないとな」



「……そうね」

本当は七重とは一時たりとも離れたくは無いが、さすがに忍者との戦いに七重を連れて行くわけには行かない。不思議な力を持っているらしいが、それでも何があるか分からないからな。

「七重はここで待って居てくれ。すぐに片付けてくる」

「え？ ちょっと待ってよ。私も行くわ」

七重はそう言って起き上がろうとしたが、俺は胸に押さえ込んだ。俺だって七重とは離れたくないが、万一の事があればそれこそ永遠に七重を失ってしまう。

「駄目だ。危険なんだぞ。お前はここで待っているんだ」

「でも……」

「いいから！！ お前はここに居ろ！」

七重は心配そうな目で俺を見ているが、ここは断固として連れて行く訳には行かない。いくら七重に不思議な力があるとしても、相手は忍者だ。不意打ちとかされてその力を使う間もなくやられてしまう事もあり得るだろう。

「分かったわ……。でもその前に六三郎に渡したい物があるの」

「ん？ なんだ？」

「これよ」

七重はそう言っただけで自分の指から指輪を抜き取り俺に差し出す。手にとって見ると金で出来ていて何やら複雑な模様が彫ってある。

「ありがと。大事にするよ。だが……小さくて俺の指では入りそうに無いな。紐を通して首にかけておくよ」

「いいえ。大丈夫。その指輪は身に付ける人によって大きさが変わるの。ちょっと嵌めてみて」

そうは言ってもとてもじゃないが俺の指には入りそうに無いんだが……。だが七重が言うのだからと、一応やってみるかと言う積もりで指輪の小さな穴に左手の薬指を向けた。そして入らないに決まっているよな。と思いつつ指を進めると、あれ？と思う間に指輪に指が通ってしまったのだった。

「どういう事だ？　なんかスルツと入っちゃったぞ？」

「だから言ったでしょ。身に付ける人によって大きさが変わるって」

「あ、ああ。そうか。しかし不思議な指輪だな」

「それはあなたの事を守ってくれるお守りよ」

「お守り？」

俺はそう言っただけで指を目の前にかざし、改めて指輪をマジマジと見詰めた。日本では見た事も無い模様が刻まれているくらいで、特に変わった感じはしないんだが。

「ええ。だから肌身離さず持つておいてね」

「分かった。ずっと指にはめて置くよ」

「そうしてちょうだい」

「じゃあ、俺は伍助のところに戻る。お前は危険だからここから動くんじゃないぞ」

「でも……アニス、八重を呼んで来ないと。心配していると思うし、もちろんおいていく訳にも行かないんだから」

「それもそうだな……。つて、あれ？　そういえば、俺とお前は2人きりで旅をしていたよな？　その時、八重さんはどこに居たんだ？　ずっとこっそり追いかけてきていたのか？」

「いえ、実は……八重も一緒に旅をしていたの」

「一緒にって？　どこに居たって言うんだ？」

前に会った時の感じでは、八重さんには忍者みたいな能力はなさそうだった。いくらなんでも普通の女性に後を付けられていたら心配で分かりそうなものなんだが。

「私が持っているランプの中に潜んでいたの」

「ランプの中？　人が？」

「どうやってランプの中に人間が入るんだ？」

もしや物の怪は八重さんの方だったのか!?

「魔法のランプなのよ。今度六三郎も入ってみる?」

おいおい。

「いや……俺はいい」

最早とてもじゃないが話についていけない。

女にされた上、ランプの中に閉じ込められたんじゃたまったもんじゃないぞ。

俺の表情から何かを読み取った七重は苦笑すると、身を翻す。

「じゃあ、八重を呼んで来るわ。2人でここで待っているから!」

七重はどこからか絨毯を取り出すと、それに座った。いやいや、いきなりくつろいでどうする。と思っていると、その絨毯がふわりと宙に浮く。そして猛スピードで洞窟を疾走し姿を消す。

……やっぱりこれは夢なのか? 俺は思わずほっぺたをつねった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7265s/>

---

戦国トランスジェンダー

2011年10月4日01時49分発行